
魔法使いと風精霊

田中 2 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと風精霊

【Nコード】

N5884Z

【作者名】

田中23号

【あらすじ】

趣味は剣と弓と錬金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔法学院卒業。現在無職。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。

魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかったりします。

第一章プロローグ

木々に囲まれた静かな街道を男が一人、のんびりと歩いている。

しかし、その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきな！」

木々の陰から出てきた賊が三人道を塞ぐ。

その賊はこれでもかというほど、山賊のオーソドックスな格好をしている。

伸び放題の髭面に、ところどころなんの染みかも分からないものが付着した汚い服を着て、曲刀をもっている。

しかし、道を行く男は止まらずに進む。

「と、止まらないと切るぞ！」

賊は動揺しつつも曲刀を抜き、歩く男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「「うおおおお！」」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉

をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかのように、また歩き出した。

・ ・ ・ ・ ・

「俺、かっこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど賊を倒した男、名をクリスと言う。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いている。

「かつこよさで言えば、29点ですね。ぎりぎり赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

森の中に突如、女性の声が響く。

「な、なんだと……。俺のかつこよさも精霊にはつたわらんか……。嘆かわしいなあ。あとテストの点は言わないで……」

クリスはすつと現れた女性に目を向け、わざとらしく頭を抱える。

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかったじゃないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で……。あとテストが近づくと意味もなく掃除したり、趣味の錬金したりしてるから赤点なんですよ」

しかし女性は意に介さず、クリスの過去を暴いていく。

「あああああ！やめて、俺の心の柔らかいところを言葉のナイフで抉らないで！あとテスト前にいつも二番目の趣味に走ってしまったのは病気なんだよ！なぜか一番目は気が引けてやれないんだ」

地面に手をつき、うなだれるクリス。

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まあ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言ってもいいかもしれませんがね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですよねー」

「主は魔力節約の鬼ですが、魔力自体は一般人に毛が生えたくらいですからね。まあ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所にいて、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないとイケない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくても契約できるが、その分精霊の格はおちる。

クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、人間では契約するのが難しい高位精霊のフウリと半ば詐欺のような方

法で契約している。

「いや、本当にできると思わなかった。内容を理解して契約してくれる精霊となると高位精霊だからな、下手したら不興かって死んでたな！」

「私は大らかな精霊ですからね。有難く思ってくれていいですよ。そして余剰魔力を私に渡していいですよ？」

そう言つて、浮いたまま、歩くクリスの前に回るフウリ。

「ば、馬鹿言うな。余剰なんてあるわけないだろおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！！ほとんど限界値の魔力を提供してるんですだよ！？俺に干乾びろって言うのか！」

「うふふ、そんなこと言つて。私知ってるんですよ」

「何をしってるんだ、性悪精霊！」

思わせぶりなフウリに、戦々恐々とするクリス。道の上で見つめ合いが続く。

「まあ、性悪だなんて。ただ、前に拾った魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に錬金を繰り返して、吸った魔力を蓄積できるようにしたでしょう？今主がつけてる指輪、おいしそうですね？」

怪しく笑つて、フウリはクリスの指輪に注目する。

精霊が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂っている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、錬金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは……！」

指輪を手で押さえて、胸の前にもっていき祈るようお願いするクリス。

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがとうございやす、ありがとうございやす！この恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので」

クリスはゴマをするように両手をもみ合わせる。

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね」

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込める魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

クリスは、体に取り込む上限を精霊のように増やしていけないかと思っただのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃったからなあ」

クリスは空を見上げぼやく。

「向こうでは、引く手数多でしたし、宮廷魔法院にも内々に推薦をもらっていましたのよね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニートラップまであるし、女性不信ですよ俺は」

「フウリもそのことは知っていたので、むしろ魔法院に主が行かなくてよかったと思っっている。」

「なら、あのままギルドで遺跡に潜ってもよかったじゃないですか。あと主は女性不信になっても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもらうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴ったら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスクですからね、あの仕事も。まあ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴ったらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやばいってのは知ってたつもりだけど、平民にできる想像のさらに上のやばさだったんだよ!」

不毛な言い合いを続ける主従。

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宮廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞー!!」

フウリの言葉に本当に涙目になり、クリスは顔を拭う。

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それこそ、師匠に迷惑かかるっしょ。宮廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入ったら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに顔が利く。

「今思うと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよってこなかったんじゃない」

「それはそうでしょう。拳句に私のような高位精霊連れてますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が……。もう少しおとなしくしていればよかったのかああ!!」

真実に気づき、愕然とし叫ぶクリス。

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まあ、けど、男友達なら結構いたじゃないですか」

フォローしているのかどうか分からない言葉を主にかけるフウリ。

「あいつらほとんど彼女やら許婚やらいたからなあ。友情より女を選びやがって……」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそういった生徒への配慮も考えるようになったとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ……。あれは予想以上に人も集まって引けなくなったのもあるけどな」

手を頭の後ろに組みながら歩くクリスがそう言う。

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかったじゃないですか」

「簡単に作れるならそうしてるよ!!」

クリスは腕を振り上げ、フウリの言葉に全力で抗議する。

「主に気のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精霊とも契約してた・・・ような?」

「あいつの精霊はお前に怯えて、俺の前じゃほとんど出てこなかったからな」

フウリは上位精霊の中でも最上位に位置されるほど高位な風精霊のため、中位、下位精霊は一緒の空間にいるだけでもその影響をもろに受けてしまう。

「あと、あいつは男だ!!」

「え?」

「え?」

何か認識の齟齬を感じる二人。

「まあ、主がそう言うならいいです」

「なんだその引っかかるいい方!」

「気にしないで下さい、ところで主の生まれ故郷はまだですか?」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしてるんだぞ」

「なら飛んで行きましょよ、主！」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切ろう」

風精霊が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどかからないので節約の鬼であるクリスマスもフウリの提案に乗る。

クリスマスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第二話「魔法使いの過去と白い風」

「よっと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかったじゃないですか」

「おばか！そんなこと田舎の村でやったら、俺が村で浮いてしまうだろう！」

「何をいまさら。主は浮くの得意じゃないですか」

「学院でも好きで浮いてたんじゃないだよ!？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか」

「決らないでください・・・」

「そつえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた目で見ないでください。想像つくのでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが……

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意フウリ様に尽くさせていただきますと！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がってくると段々人型をとれるようになる。

上位になれば服なども魔力で形成できるが、実際服を着ている精霊は少数派である。

「まあ、主の過去は特技から推察できます。弓が得意なのは、森で狩猟をしていたからでしょう？」

「うん、畑耕すより向いてたみたいだから、狩のときはいつもついていった」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょう？王都でもすれ違つと目を輝かせて見てましたからね」

「あはい、ちゃんばらごつこで磨きました」

「ちゃんばらごつこであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・？」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだとか言っつていつも木の棒でも振り回して大きくなって、本当に王都まで行つちやっただんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たってる・・・剣買う余裕なんてなかったんだよ！木の棒で悪いか！」

「悪くは無いですけど、本当に木の棒で王都に行つただんですか・・・。ここ数日通つた道、結構魔物いましたよね？」

「え、うん。木の棒で頑張つた。で、王都目前で力尽きたところを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで・・・！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさつきから何か良からぬ気配がするので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であつた亡霊騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ・・・。フウリと俺の剣技とこの剣があつて五分五分だったやないかい！・・・え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡霊に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦って、やっと倒したという事があつた。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行ったとき、小汚い樽に十把一絡げで売っていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入した。

そして遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、古代の魔法文字が特殊な方法で刻まれており、解読できない部分も多かったが、できた部分をあわせると、

世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚したのだ。

ポロポロだったその剣をクリスが得意の錬金で見栄えと、剣そのも

のの切れ味をよくしたものである。

所持者の魔力を吸ってなんらかの効果を得る魔剣というのは存在するが、世界の魔力を吸って効果を得る魔剣というのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるとお金を得て初めていったのが武器屋だ。木の棒を振り回すのは恥ずかしいということに、王都に来て少ししてやっと自覚したそうさだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がってるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思うのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな」

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送ってくれたのに。ちょっと俺には無理だわ」

「まあ、様子見だけでもしてきます。処理できそうなら処理しますし」

「うーい。お願いします」

「はい、お願いされました。それでは、危なくなるかもしれないので、少し頂きますね？」

「頂くって何・・・を!？」

クリスの唇にフウリのそれが重なる。

「ん……。ごちそうさまでした」

「おいましてその色情精霊」

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持つての行動ではないですよ？ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ！だけど別にその方法じゃなくてもいいだろ！？」

「はて？その方法とは？」

「い、いや、だから、き、き、キスじゃなくてもだな！」

「うふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリィィィ！指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろうが！！」

「それでは見てきますので、おとなしくしてるんですよ。あんまり騒いだと、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな！！お前のせいだ！！早く行って来い！！怪我すん

なよ!?!」

「はい、それではまた後ほど」

そう言いつと、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふう、白……か……」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さっきから一人で大声だしたりしやがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちょうど村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よって、フウリと話しているクリスは独り言を言ってるように見えるため、学院外でもあまり人がよりつかなかった。

フウリなら、人に姿を見せることも簡単なのだが、フウリはあまり王都で人前にでようとすることは無かった。

「怪しいだと！こんなシテイボーイの俺を捕まえて怪しいだと！この田舎者が！お前じゃ話にならん！村長を呼び！」

クリスはまるでギルドのカウンターにたまにいる、たちの悪い客のような言葉と仕草で子供たちに向かう。

「ふ、ふざけやがって！この！！」

「おれたちになうと思うなよ！」

「ぼっこぼこにしてやんよ！」

「僕たちはトリ工村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばっか、どうせ偽物だつて」

「金持ちそつな顔じゃないだろ」

少年たちは口々に言い、木の棒を振り上げて威嚇する。

子供たちの中では、クリスが怪しい奴から、大悪党にまでランクアップしている。

「木の棒・・・それにトリ工村騎士団だと・・・。くそ！なんてことだ。俺の負けだ・・・。好きにしろ・・・」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリ工村初代騎士団長はいま膝をついている。

「分かればいいんだ！」

現騎士団長が、膝をつくクリスを上から見てふんぞり返る。

「けどこいつどうする？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「それがいいな、これでこの前、商人さんを間違えてつかまえちゃ

ったのはちゃらだな！」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まってたよな」

団長の後ろで、この大悪党をどうするか、処遇を決定する会議が行われる。

「よし！ついて来い！村長の家に行くぞ！」

後ろの会議で決定したことを耳に入れ、団長が号令をかける。

そうして結局、クリスは故郷の村へと、子供たちに引っ立てられて足を踏み入れる。

「よし、お前はここで待ってるよ！今兄ちゃんたち呼んでくるから
そう言い残して子供たちは村長の家に入っていく。

クリスは一人になってしまい、後ろから村長の家に入ってしまったおうか迷っている。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろって言っただろ！」

すると怒鳴り声がしてきたので、反射的に目を瞑って衝撃に耐えるように首をすばめるクリス。

よくこの怒鳴り声と共に殴られていたクリスは、「お前」の「お

の時点でこの防御体制を取る。

しかしいつもは瞬間に来る衝撃がこないのも、クリスはゆっくり目を開けて防御体制を解く。

そして自分が怒られているわけではないことに気づき、周りを確認し誰も見て無いことにほっとする。

クリスが奇行に走っている中、子供たちは必死に弁解していた。

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「悪党を村の前で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよ！」

「凄いだろ！」

と、自慢げな子供もいる中、一発の雷が落ちる。

「お前たちは！！また、そんな勝手なことして！！何度言えば分かるんだ！！本当に危ない奴だったら、最悪殺されてしまつかもしれないんだぞ！！」

子供たちの弁解は怒鳴り声にかき消される。

旅の商人を捕まえたときにも、同じことを言われて、こっぴどく怒られているトリ工村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「それで、そいつは何をしてたんだ？」

子供たちの泣き顔に、少し声色が優しくなった村の男が聞く。

子供たちはそれを聞いて顔を見合わせる。

「えっと、空に向かって独り言を叫んでたんだ！」

涙目になりながら、団長がみんなを代表して発言する。

「そ、それだけか!？」

「う、うん……」

子供たちも、今更になって捕まえた人物が特に何も悪行を働いていないことに気づく。

男は一瞬固まる。

村の客人かもしれないのに、無礼を働いたとあつては何かあれば困った事になる、ざわつく大人たち。商人のときは穩便に済んだが、もし変な噂が立って商人が来なくなったりすれば、村にとっては一大事なのだ。

「とにかく、その人のところにすぐ案内しろ！」

すぐに立ち直った男は口を開き、子供たちに命令する。

「う、うん。村長の家の前にいるよ」

「わしも行く」

それまで成り行きを見守っていた村長は、立ち上がって家を出る。

自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

家の前に出た村長は、見覚えのあるような男が立っているのを見つけて、しかし慌てていた村長はすぐに謝罪に入る。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まことに申し訳ない。この通りじゃ！」

「本当にすまない！」

そう口々に言っただけ皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡って俺のせいというか・・・」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかった身であり、初代トリ工村騎士団長という身でもあるので、クリスのほうも気が気じゃない。

「おお！そう言ってくれますか！」

村長がぱつと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「・・・あれ？」

「お？」

「んー？」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔であることに皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねえか！」

「おい、クリ坊か！」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

クリスは即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配させやがって！」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがって！」

「マリアンさんもジョシユもずっと心配してたんだぞ！」

マリアンとはクリスの母の名前で、ジョシユは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長！ププッ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の五年ほど前は、村の客人を罾に掛けたりと、もっとひどかった。

団長は年下の団員をこき使って、村の周りに罾を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罾にはまって、一週間臭いがとれなかったんだぞおお！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらここにいないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まあ、いま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな」

「てめえ、貸してた色本返せや！」

「お前が出ていってからリリイちゃんが元気なかったんだからなあ
ああ！」

「くそ、もげろ！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこに、後ろから声が掛かる。

「クリス！！」

そこには、丁度畑から戻ってきたマリアンがいた。

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄ってくる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！

倒れたクリスに馬乗りになって殴るマリアン。

「このっ！馬鹿息子がっっ！」

「おご、ちょ、あば、母、あが」

「おいおい、そんなにすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チツ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言う言葉か！！」

「うるさい、馬鹿息子！五年も連絡なしで！どんだけ心配したと思
ってんの！」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すみませんでした！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もういいわ。殴つてすつきりしたし。ジョシュはまだ畑だから、とりあえず家で待ちましょ」

「はいさ」

「皆もお騒がせしてごめんなさいね。この馬鹿息子には、今度日を改めてちゃんと村長のところに挨拶させにいきますので」

「よいよい。積もる話もあるじゃろつて」

「さすが村長だぜ。あと村長の息子よ、色本は犠牲になったのだ」

「お、俺のお気に入りがあああああああ」

晴れ渡った故郷の空に次期村長の絶叫がこだまするのだった。

第四話「魔法使いと母と弟」

「うおおお、帰ったぞおお」

「うるさいわね、お帰りなさい」

クリスは家に入るなり騒ぎだす。

「我が家はいいね、一番だね！王都なんてほこりっぽいし、それに比べてこの村はなんて清々しいんだ」

クリスはテーブルについてくつろぎ、マリアンはお茶を入れて戻ってくる。

「あんだ、王都にいたのかい」

「うん。騎士になるつもりだったからねー」

クリスはお茶を飲みつつ答える。

「うそおっしゃい。あんだが何で家を出たかなんてこっちはお見通しよ」

「う、嘘じゃねーし！騎士になるつもりだったし！」

しどろもどろに叫ぶ息子に母は呆れ顔だ。

「あの年は、ウルバが死んでから初めての不作だったかね。本当ならジョシュをどこかに奉公に出さないとイケなかったのを知って、

出て行ったんでしょ」

ウルバとはクリスの父、マリ안의夫である。

「う……。ま、まあ、それが関係してないといったら嘘になるけど、本当にそれだけじゃなくて、騎士になりたいってのも理由だったし。そもそも、ジョシユのほうが俺より何倍も畑仕事できるからね」

すっかり見破られていたクリスは、少し赤い顔で本音を語る。

「はあ。あんたが納得してるならいいけどね、母としては複雑だわ。今からでもジョシユと土地半分ずつとかしない？」

「そんな慣習作ると村の人たちに睨まれるからやめとくよ。ジョシユは家の農地をちゃんと相続したんでしょ？」

「ぐずったけど、村長にも話して、ちゃんと相続させたわよ。村長もうすうすあんたが出て行った理由気づいてたみたいだけど黙っててくれてね。ジョシユは年齢的にはちよつと早かったけど、体でかいし体力あるから大丈夫だろうって、村のみんなも説得してくれたわ」

「ああ。ジョシユはでかかったからなあ」

マリ안의話に、クリスはどこか懐かしそうに弟の姿を思いだす。

「あれからもっと大きくなったわ」

「え！？何食ったらそんなにでかくなるんだよ！」

しかし、マリ안의言葉で思いだした弟の姿が霧散する。

「あんと同じ物食べさせてたんだけどねえ」

しみじみとマリアンがお茶を飲みながら語る。

「身長の格差社会や！」

「主もそこまで小さくはないでしょう」

「弟より小さいだけで俺のプライドはズタボロなんだよ・・・」

クリスはどこか哀愁の漂う背中で語る。

「主のプライド・・・？ああ、あれですか、遺跡でよく捨ててますよね」

「プライドなんて遺跡じゃ邪魔なだけだよな」

無駄にプライドが高いたいで食っていけるのは貴族だけ、クリスはそう思っている。

「さすが主です。早さに自信のある私も、あんな見事な逃げっぷりは真似できません」

「毎度毎度挟り込むように言葉の暴力を振るってくるな・・・ってあれ？」

「どうしました、主？」

いつも過ぎるやり取りに、やっと何かに気づいたように横を見るクリス。

フウリが首をかしげてクリスと見つめ合う。

「何、さも当然のように会話に混じってるの」

「やっと気づきましたか、鈍いですね主。それだから、女性との出会いも見逃すんですよ」

「最近、フウリの罵倒に慣れてきた自分が怖い」

「変態主ですね、無職と並べるともう手の施し様がないですね、ご愁傷さまです」

「えーっと、馬鹿息子。そこの綺麗なお嬢さんはだれだい?!」

突然現れた美女に驚いて、固まっていたマリアンが再起動してクリスを問いたです。

「これはこれは。挨拶が遅れまして、大変失礼いたしました。私、主と契約させていただいております、フウリと申します。未熟な身ではありますが、誠心誠意クリス様に尽くしていきますので、どうかよろしくお願い致します」

綺麗なお辞儀とともにフウリは自己紹介をする。

「ちよ、馬鹿！フウリ！大事なところが抜けてるよ!？」

「何が大事なところよ！馬鹿息子！都会に行つて帰つてきたと思つたら、こんな別嬪さんと契約して主なんて呼ばせるなんてどういう見だい！もう少しお仕置きが必要なようね！表に出な！」

「勘弁してくれえええええ」

その自己紹介に足りないものを感じたクリスが叫ぶが、マリアンが腕まくりをして睨みつける。

「ふむ、大事なところですか、主・・・ああ！そうですね、誤解を招いてしまいました。失礼しました。主とは契約してますが、ほとんど対価も頂いておりませんよ」

「違うよおおお！？そうだけど、違うよおおお！！？」

思いだしたように手を打つフウリを見て、クリスは期待の眼差しを向けるも、見当がはずれて叫ぶ。

「あ、あんたつて子は・・・！そんなことする子じゃないと思つてただけどねええ！？都会に行つて根性が腐つちまったのかね！」

「おいしい！信じてくれよ母さん！つてか、フウリも悪ふざけが過ぎるつて！」

マリアンの雰囲気を押され、クリスは必死に状況を打開しようとする。

「ふむ、すみません、主。お母様も途中から気づいてるようでしたので、少し悪乗りしてしまいました」

「母さんもぐるかあああああ！」

結局二人にからかわれてただけだと分つて叫ぶクリス。

「五年も心配かけた罰さ。それにしても、あんた中々面白い娘さんを連れてかえつてきたじゃないのさ」

「主をからかうのは私の趣味ですので」

「ここに味方はいないのかあああああ！！！」

悪びれもしない二人を見てやっぱり叫ぶクリス。

「そんなことより、この娘さんとはどんな関係なんだい？」

「そんなことって軽く流さないで・・・」

「私は主と契約した精霊兼嫁です。お義母さま、これからよろしく
お願い致します」

「あら！まあまああ！こちらこそこんな馬鹿息子ですが、可愛い
ところもあるので、見捨てないでやってくださいね」

フウリが事実を少し捻じ曲げながら伝え、マリアンがそれを受け入
れ嬉しそうに言う。

「おいしい！精霊が嫁とか聞いた事ねえよ！？そんな契約してない
からね！？」

このコンビにたまらずクリスマスは叫ぶが、同時にこの二人には何言つて無駄だと思い始めていた。

騒いでいると、玄関が開く音と共にどたどたと慌てたような足音が響く。

「母さん！兄さんが帰ってきてる本当！？」

「本当よ、ほらここに」

マリアンがクリスマスを指差すと、クリスマスの弟、ジョシュがクリスマスを口ツクオンする。

そして一息に間合いを詰めると、クリスマスを力一杯抱擁する。

「兄さんっっ！生きててよかったよおおお」

「ああ、心配掛けたなって痛い痛い、馬鹿、絞めすぎだあああああ」

「にいゝさゝあゝんゝ」

「聞いてねええ！おいまじで体格差考えろおおお！ギブ！ギブ・・・ブ・・・」

段々、動かなくなっていくクリスマス。

「いら。ジョシュ、クリスマスがぐったりしてるから離しな！」

「うあああ、ごめんよ兄さん！嬉しくてつい」

ジヨシユはしゅんとつつむく。

「はあはあ。殺す気が!」

「じめんよお」

「ああもうわかったから涙目になるな鬱陶しい」

「うん・・・」

うなだれるジヨシユ。

それを見て、クリスはため息をつきつつ、丁度目の前にきたジヨシユの頭を撫でる。

「すまんかったな、家のこと全部任せちまって」

「に、兄さん!そんな、僕のほうこそ!」

そう言ってジヨシユは両腕を広げる。

「ああまた抱き着こうとするな」

「う、ごめんなさい」

「はいはい、もういいから、とりあえず畑仕事の泥落としていいよ」

「うん、洗ってくる」

ジヨシユは家の裏の井戸へ向かう。

「相変わらずだなあ、あいつは」

「あんたが出て行った理由も、最近気づいたみたいでね、少し落ち込んだのよ、あれでも」

でも少しは元気でたんじゃないかしら、とマリアンが続ける。

「主が家を出た理由ですか？騎士になるためでは？」

マリアンの言葉にフウリが食いつく。

「あら、お嫁さんにも何も話していないなんて、いけない子だわね、あんたは」

「おいちよつとまっってください、嫁じゃねえですよこいつは」

「また、そんな照れちゃつて。こんな息子だけど結構家族思いなのよ、家を出た理由だって本当は」

「おおおつと、そこまですごお母様」

「主は黙っていつも通り壁の花になっていてください」

「ひどいわ！パーティーでもいつの間にか壁際に移動してる俺に向かって！」

「で、あの子が家を出た理由なんだけどね……って理由なのよ」

「まあ、主は家族思いなんですね、そういえば学院でも女の子に言い寄ってた貴族に・・・それで・・・あれで・・・」

「キヤツキヤツ」「ウフフ」

・ ・ ・ ・ ・

・ 弟が戻るまで、部屋の隅でいじけている魔法使いの姿があったとか
・

第五話「魔法使いとドラゴン？」

話をしていたら、いい時間になったので、マリアンが夕飯を作り、皆で食卓を囲む。

「で、兄さん、フウリさんとの関係は良く分かったんだけど、結局五年も何してたの？」

夕飯を食べながら、ジヨシユがクリスに尋ねる。

ちなみに、精霊であるフウリは特に食べ物を食べる必要はないのだが、少しは食物の魔力を取り込むことができるから、という言い訳でクリスが同席を求める事が多かったため、最近では魔力以外にちやんと味を感じることができるようになった。

クリスとしては、一人で食べるの寂しいというのが本音である。

「王都の魔法学院で学生してました。超優等生だったんだぜ」

「さすが、兄さんだね！」

ジヨシユは、昔から兄の言うことを無条件で信じるのである。

「本当に、さすがですね主」

「あ、やめて。ごめん、嘘だから。実は卒業もぎりぎりでした」

「あんたは昔から、ジヨシユを騙し切ったことはないわよねえ」

ジヨシユの純真無垢な瞳に弱いクリス、嘘をついても結局嘘だと言
うか、その嘘を真実にしてしまう。

「くそ！そこはいつもなら、フウリが痛烈なツッコミをするとこ
ろなのに、俺の弱点を的確に突いてくるなんて・・・いつも通りか」

「平常運転です」

クリスががっくりとうなだれ、フウリはすまし顔だ。

「本当に仲がいいんだね、二人は」

その様子を見て、ジヨシユが嬉しそうに言う。

兄が五年も音信普通でとても心配した弟は、ちゃんと心が許せる人
がいてよかったと思っている。

「夫婦ですから」

「夫婦じゃない！」

フウリの虚言にすばやく切り返すクリス。

「主従と言ったほうがよろしいですか？主」

「え、あ、うん。そう言われると、契約内容があれだし、ちょっと
困っちゃっわ」

フウリの切り返しに、十分な魔力を渡していないこともあり、フウ
リが簡単に自分の魔力を奪えることもありで、主従とは決定的に何

か違つと思つているクリスマスはしどろもどろになる。

「父親に似て煮え切らない男だね、あんたも！ちゃんと責任とりな
！」

「おおおい！？責任つてなんだよおおお」

マリアンは生前の夫のどつちつかずな態度を思いだし、息子と重ねる。

「主、契りまで交わしたのに、そんな・・・」

「までやこら！契りつて契約だろが！なんか変なふうに聞こえるから！ただの、魔法使いと精霊の契約だろ！」

「あはは、まあまあ。兄さんも熱くならないで。フウリさんも兄さんをあんまりいじめないでね？」

フウリがクリスをいじつて、マリアンが煽つて、クリスが爆発して、ジヨシユが宥めるローテーションで食事の時間が過ぎていく。

「結局、あんたは冒険者しつつ学生してたのかい？」

「うん、学生が本業で、冒険者はお小遣い稼ぎだね」

「なら、兄さん魔法も使えるんだ！すごいなあ」

「あんた、あんまり危ないことはするんじゃないよ？冒険者なんて乱暴者も多いって言うし」

ジヨシユはきらきらとした目で兄を見、マリアンはあまり良い噂を聞かない冒険者に眉をしかめる。

「大丈夫です、お義母さま。主は、剣と弓の腕では冒険者ギルドでも一目置かれ、難易度高い討伐も何度かこなしていて、そっち関係ではかなり有名人です。逆に、魔法使いと言ってもだれも信じてくれませんが」

心配そうなマリアンにフウリが安心させるように、クリスのギルドでの評価を教える。

「そういえばこの子、昔から木の棒で魔物しばき倒してたからねえ」

「兄さん強いもんねえ」

「しみじみこつちみないでくれますか！？魔法使いなんだよ！一応！ギルドの登録も魔法使いなのに、それっぽい依頼一度も受けた事ないけど！！フウリと契約してからは、本当に全然使って無いから腕が落ちてないか超心配なんだけど！」

実際、錬金以外の魔法はフウリ任せが多く、クリスはギルドだとドラゴンキラーの称号を持っているため、凄腕剣士として扱われており、魔法は、使えるらしい？くらいにしか思われていない。

ちなみにドラゴンキラーは、ドラゴンを討伐したときに国から与えられる称号だが、国の騎士はほとんどもっている。

騎士団のドラゴン討伐ほど醜い狩は無いと言われているが・・・

何人で倒しても参加すれば貰えるため、騎士の虚栄心を満たすものというのが一般の認識となっている。

しかし冒険者でもっている、その冒険者の実力を示すものとして、ぐんと価値があがる。

「そういえば、騎士団からもお誘い受けてたのに、何でそっちに行かなかったんですか？」

「うん？だつてお前、魔術学院入れてもらったのに、卒業して騎士団入りしましたとか滑稽だろ！師匠にも顔向けできないし！あと実際見た騎士団はちよつとなあ」

「あのお師匠さまなら、笑つて許してくれそうですけどね。逆に無職のほう心配してると思いますよ。まあ、主が騎士団入るつて言つてたら私は実家に帰つてましたけど」

「師匠には心配掛けてばっかりだなあ、今度遺跡潜つて、また貢物でも献上するか。あとお前の実家と言えばあの空の島か、さすがにもう行きたくないぞ・・・」

クリスとフウリが話している横では、マリアンとジヨシュが呆れ顔だ。

「あんだ、本当に危ないことは程々にしなさいよ」

「兄さん、ダメだよ、危ないことは。兄さんが怪我したりしたら悲しむ人がいるんだからね」

「あはい、すみません、気をつけます」

兄が落ち込んだことを感じて、ジョシュが明るく言う。

「けど、兄さんの冒険の話聞きたいなー」

それに喜ぶクリス。

「そうかそうか！じゃあまずは、国境付近で暴れてたドラゴンを退治した話をしよう！あのときは本当に大変だった、敵国の軍隊まで出張ってきて」

「そして、敵国の軍隊がドラゴンを切り倒す主を見て、逃げ出して行きましたよね。おかげで今、相手の国とは停戦交渉中です」

「いや俺のせいじゃないだろ、停戦交渉は」

クリスの話を途中で受け継いだフウリが、当の本人もしらないような事実を語る。

「いえ、聞いた話だと、あのときの軍隊に敵国の王子がいたらしく、帰って早々見てきたことを報告したら、王様が泡を食って停戦を要請したらしいですよ」

「だからか、なんかあの依頼以降、国からおいしい仕事が・・・」

報酬のほとんどは、クリスの師匠への貢物や、錬金の素材で消えている。

「お師匠さまが名前は隠してくれたみたいですけどね、ギルドも主には借りがありますから、しっかり情報統制してくれたみたいですよ」

「よ」

「なるほどなー。しかし、なんで俺の知らないことをフウリが知ってるのか、とても疑問なんだけど」

「気にしないでください、趣味の範囲です」

「多趣味な精霊だなおい！」

マリアンとジョシユは呆然と二人の話を聞いている。

「兄さん・・・戦場に行ったの？」

ジョシユが心配そうに言う。

「あんだ、ほんと無茶ばかりだね・・・」

マリアンが、呆れ切った顔をする。

「俺ですが、家族の視線が痛いです」

「ドラゴンなんて序の口じゃないですか」

家族の視線に耐えかねたように呟くクリスにフウリは追い討ちをかける。

「おいやめろ、もう少し刺激の少ない話をしよう」

「じゃあ、騎士団を闇討ちした話ですか？」

「過激すぎるだろ！！」

「そもそも、刺激が少ない話が出てこないですね。人間相手な分、騎士団閨討ちが一番刺激が少ないですよ」

「おいしいい、あるだろなんか！俺も思いつかないけど！ああ！あれだ。王城忍び込んだときのやつ！あれなら特に問題ないだろ！」

「王様に一撃いれたあれですね」

「あ、ごめん、やっぱなし」

クリスは過去の悪行を思いだし、冷や汗をかきながらフウリを止める。

「ああああ、あんた！そんなことしたのかい！？」

「兄さんそれはさすがにまずいんじゃ・・・？」

「おいしいい、違うんだ、俺はやってないいいいいいいいいいい」

魔法使いの絶叫が響く中、夕食の時間が過ぎていった。

第六話「魔法使いの剣の秘密」

「くそ、なんだ、この五年！本当にろくなこと無いぞ！」

夕飯を食べ終わって、クリスは五年ぶりの自分の部屋でごろごろしている。

「私との出会いをお話すればよかったのでは」

ふわふわ浮きつつ、フウリが言う。

「・・・！あれならちゃんと冒険してるし、別になんか倒した話じゃないし、とつても食卓向けの話だったんじゃない？なんで早く言わないし！」

フウリの言葉に昔を思いだしたクリスは、ベッドから起き上がり言う。

「ええ、そうですね、すみません。あの島に来るのに遺跡一個無くなってますけど、一番まともな話ですよね」

「ああ・・・嫌な・・・事故だったね・・・」

フウリの言葉に悲痛な面持ちでクリスは俯く。

「お師匠さまが涙目だったじゃないですか」

「やめて、あの顔思い出すと今でも罪悪感がひしひしと！」

「ダメな主ですね」

ベッドに顔を埋めているクリスを見ながらフウリが続ける。

「ところで、あの良からぬ気配についてですが」

「おお、そういうえは何か分かったのかい！」

ベッドから勢いよく起き上がりクリスはフウリに顔を向ける。

「ええ。ちょっとやばいことになってます」

「え。なにそれこわい。亡霊はもう勘弁」

フウリの発言に、クリスは最近の一番やばかった事項を上げる。

「私は亡霊のほうはまだいいですけどね」

「お、おい、やめてくれよ。亡霊のほうがましって、もう俺個人でどうにか出来るレベルじゃなくね!？」

それ以上と言われて、クリスは慌ててフウリに食って掛かる。

「落ち着いてください、主。大丈夫です、私にとっては都合の悪い相手なだけで、主なら一刀両断です」

「一応魔法使いなんだけどね俺。まあ倒せるならなんでもいいや・・・」

「さすが主。それでそのやばい奴なんですが・・・魔力食いです」

沈黙が部屋を支配する。

「……。おいしいiiiiiiii、まじもんでやばいやないかあああああ！」

魔力食いは、その名の通り魔力を食べる、魔物の突然変異である。

魔力食いは、世界から一切の魔力を吸収できず、そのため、生物がもっている魔力を食べて力をつける、特に精霊が好物で、精霊食いとまで言われる。実際、精霊食いというのは別にいるのだが、人間から見た被害はどちらも天災レベルなのであまり区別されない。

どちらも、放置して精霊を食べつくされてしまうと、不毛の大地ができあがる。

「まだそこまで精霊も食べられていないそうなので、明日にでも倒しにいきましょう」

「え、倒せるのあれ。くそ珍しいし、俺見たことも無いんだけども」

「主の剣なら、切れ味抜群ですよ。切ればあいつの魔力も吸って切れ味がドン！更にドン！切り刻みましょう」

「フウリさんテンションおかしくね？そもそもうちの剣、他の生物の魔力吸えたっけ？」

「いやですね、主。私はいつも通りですよ。ただちよっと同族が食べられてイライラしてるだけです。あと、主の魔剣はそもそも主の魔力を吸うこともできますよ？ただ、主が素寒貧だから世界の魔法

を吸ってるだけです。切れば生物の魔力も吸収します。だからドラゴン切ったとき切れ味やばくなつたじゃないですか。本当にあの大きさのドラゴンを一刀両断するなんて、そりゃ停戦したくもなりますよ」

「ああ、怒ってるのね。まあ、俺もむかつくし、切ろうか。ってか、この魔剣すごかったんだな……。てつきりちよつと珍しいだけかとおもってたわ。ごめんよ」

「明日、切り刻みましょう。というか、魔剣については、私より長い相棒なんですから、正確に把握してあげてください」

「はい、すみません。けど、刻まれた古代魔法文字は難解すぎて、師匠だつて解明できないところ多いし！ 剣振つてるときは、切れ味増したなあと思うことはあつたけど、俺の隠された力がピンチで覚醒したんだなつてくらいにしか思つて無かつたです、すみません」

「てつきり知ってるものかと思つてましたが。主に隠された力は一切ないので安心してください。ピンチになつても、魔剣にあげられるほど魔力もないですしね」

「ぐぬぬ。指輪の魔力もまた集めなおしだし、つてか結局魔力使つたの？」

「ああ、主に接吻して頂いた魔力ですね、ちゃんと使いましたよ、半分食われて消滅しかかつてた精霊に」

「接吻つて……。まあ使つたならいいや」

「ふふ、赤くなつて可愛い主」

「おい、やめろ、くつついてくるな」

「しかたないじゃないですかー、あるじのへや、ベッドいっこしかないですしー」

「棒読みはやめろ！別に浮いたまま寝れるだろうが！そもそも睡眠
いらないだろ！」

「まあまあ、主。私も長旅で疲れているんです。接触してれば効率
的に魔力を摂取できますし、主の節約にもなるでしょ？」

一応、契約して魔力を渡している場合、契約者と非契約者が離れて
いると、到達するまでに微弱な魔力が世界に放出されている、と言
われている。

「くっ・・・分かったよ。もう寝よう」

「はい、主。おやすみなさい」

「おやすみ。フウリ」

・
・
・
・
・

「（ちくそう！柔らかいものが当たって寝れない！！）」

翌朝。

「結局ほとんど寝れなかった・・・」

クリスは隈ができた顔でベッドから出て顔を洗いに行く。

「主、寝不足ですか？ いけませんよ、素人ではないのですから、戦いの前に夜更かしなんて」

「お前のせいなんだよ!？」

「ふむ。刺激が強すぎましたか」

「狙ってやるなよおおお」

クリスとフウリはいい合いしつつ食卓へ。

「おはよう母さん」

「おはようございませす、お義母さま」

「はい、二人ともおはよう」

クリスは、大きな弟の姿が見えないことに気づいて母に尋ねる。

「あれ、ジヨシユは？」

「もう畑にいったわ」

「うお、早いな」

「あの子、お兄ちゃんがいつ帰ってきてもいいように頑張ってたのさ」

「ったく、あいつは・・・」

「ふふふ、いい弟さんですね、主」

「うっさい」

マリアンが微笑ましそくに二人を見る。

「ほら早く食べちゃいな」

「うーす。いただきます」

「いただきます」

「私もそろそろジヨシユの所に行くから。あんたは村長に話をしきな。あとリイにも顔見せに行くんだよ、あの子はあんたのことすごい心配してくれてたんだから」

リイとはクリスの幼馴染で、何かと変わっていたクリスの面倒を良く見てくれていた。

「あいあい。そのあと少し森のほうに行くからー」

「森のほうは、今危ないからやめときな。なんか見た事もない魔物が出るらしいから。そのせいで、昨日も村長の家に猟師とか自警団が集まってたんだよ」

「なるほど。まだ食われた人とかいない？」

マリアンがクリスを鋭く睨む。

「食われた人はいないけど・・・あれは人を食うのかい？というか、あんたあれの正体がわかるのかい？」

「あ、あはは。ちょっとやっかいな魔物だけど、何度か倒したことがあるから、今日にでも始末してきちゃうよ。村の人が食われたら嫌だからね」

「危ないことはしないで欲しいんだけどねえ。まあ、あんたがそう言うなら信じるわよ。そのこと、村長には言っていきなよ」

「りょーかいました、まっかせといてよー!」

「はいはい、それじゃ行ってくるからね。怪我するんじゃないよ」

「いってらっさいー」

「いってらっさいませ」

マリアンを見送ったクリスとフウリは、食事を済ませ、支度をする。

「魔剣つて、切った奴の魔力も吸収できるんだよなあ……。これ応用できれば、魔力の上限を増やせなくても、吸収速度をアップできそうだなあ。うーん、取り込む術式に節約魔法を織り交せて、小さい作用で大きい魔力を得るように……。まずは魔剣を改造して……」

「主、考えるのもいいですが、早くあいつを切りに行きましょう」

「あ、はいはい、大分怒ってるね」

「ええ、同族を食べられて黙ってはられません。昨日助けた精霊も手助けしてくれるらしいです。火精霊で、魔力食いに棲家の洞窟を奪われたらしいです。私、火精霊とは相性いいので、丸焼きにして切り刻みましょう」

「怖いよ!?!」

「ところで、さっきさうりと嘘ついてましたね」

「倒したことがあるくらい言わないと、心配されるだろ」

「そうですね、いい嘘だと思いますよ。馬鹿正直だった主が、ちゃんと嘘もつけるようになってうれしいです」

「へいへい。んじゃ行くこうかね」

「まずは、村長さんのところでしたね」

そうして、魔法使いは家を出たのだった。

第七話「魔法使いと魔力食い」

フウリを待たせて、村長の家の玄関をまたぐ。

「ちわー」

「挨拶くらいちゃんとせんか！」

クリスの挨拶に怒鳴る村長。

いつも集会をしている部屋にクリスが行くと、昨日とほぼ同じ面子が集まっていた。

「すみません。それで、村長。昨日は言いそびれましたが、少しの間村に滞在したいのですが、よろしいですか？」

クリスは居住まいを正し、村長をまっすぐ見る。

「う、うむ。それは問題ないが。敬語を使われるのも、ちとむず痒いのお。というか、滞在なのか？住まないのか？」

「ええ。王都の学校を卒業したので、家族の様子を見に帰ってきた次第です。少ししたら王都に戻ろうと思います」

途端、集まった面々にざわめきが広がる。

「王都の学校だと！」

「嘘だろ……」

「木の棒しか持たないで出て行ったって話なのに」

「王都の学校で雑用してただけなんじゃ」

「俺の色本・・・」

昔からクリスを知っている、そして叱ってきた面々は、その事実を受け入れられないように皆一様に信じられないという顔をしている。

村長がそんな面々を見て一喝する。

「静まらんか！」

すぐに皆が黙り込み、しかしやはりどこか信じられないという顔をしながら、次の言葉を待つように村長に視線を向ける。

「して、王都では何を学んだのだ？」

「魔法について少し」

村長が回りを気にしつつ厳かに聞くと、クリスもその雰囲気呑まれて緊張気味に答える。

「む、そうなのか、てつきり剣術だと思ってたのだがな、あと喋り方はいつも通りでいいぞ」

まさか、建前だと思いが騎士になると出て行った子供が、魔法使いになって帰ってくるとは思わなかった村長は、その突拍子もない子供がいまだに敬語を保っていることに違和感を覚えてそう言

う。

「ひゃっほい！敬語とかあんまり使わないから疲れるんだよね！」

クリスは村長の言葉を聞いて、すぐにはっちらける。

「はあ、お前という奴は……。まあいい。お前が望むなら村の空家を貸してもいいから、村に残る気はないか？」

村に魔法使いがいれば、実力なんて無くても、何かと役に立つし、字の読み書きが出来るというだけで貴重なのだ。

「うーん、まだやり残した研究もあるし一度王都に戻るよ。師匠にも恩返ししたいしねー。けど暫くはいるつもりだし、戻った後もちよくちよく帰ってくるよ」

「そうか、残念だが、仕方ないか」

「すみません」

村長の本当に残念そうな顔に、五年も心配をかけたということも自覚しているクリスは罪悪感を覚えて心から謝罪する。

「よいよい。ところで他の者には挨拶してきたのか？リリィは特に心配しておったんだぞ？」

村長は謝るクリスの真剣さを感じ取り、あまり思いつめないようにと殊更明るく話題を変える。

「このあと行って来るよ」

「ふむ、この時間なら、皆畑だな。ちゃんと顔を見せに行くんだぞ」
「はい。あ、それと村長、森になんかいるじゃん？あれの件なんだけど……」

クリスが本題に入ろうとしたところで、部屋のドアが開く。

「村長！大変です！」

件のリリイの妹、ユリイが息せき切って入ってくる。

その姿を見た集まっていた面々が、何事かとユリイを囲み事情を聞く。

「どうした、ユリイ！？」

「ね、姉さんが、森に入った子供たちを追って森に！」

集まっていた村人がユリイの言葉を聞き、今の森の現状を思い浮かべ騒ぎ出す。

「子供っていうとあの悪ガキどもか！」

子供たちとは、騎士団の面々である。

「な！森は今やべえんだぞ！」

「化け物がうろついてんだ！」

狩に出た時に魔物の凄惨な死骸を見た者が、子供たちのことを想像して顔を青くする。

「すぐ呼び戻しにいかない」と

「けど、魔物だって何体も食い殺されてるんだぞ、俺たちで行っても・・・」

「おい！子供を見捨てるってのか！」

森で魔物を食い散らかす化け物を相手にすることに怯む村人に、別の村人が食って掛かる。

男たちが取っ組み合いになって意見をぶつけ合う。

「静まれ！」

村長が立ち上がり一喝するも、いつもはすぐに静まる面々が更に言い募る。

「だけど、村長！」

「おぬしらが騒いでも仕方ないだろう！すぐに若いもん集めて森に行くぞ」

村長は子供を見殺しにするなど論外だとばかりに叫ぶと、全身の雰囲気で周りの面々に有無を言わさぬ圧力をかける。

村人たちは、すぐに村長に言われた通りに動こうとする。

「あ、村長」

そんな中、クリスが声を上げる。

「クリス、今状況を説明している暇がないんだが、森と一緒に来てくれんか？」

ここ最近の森のことを知らないであろうクリスに村長は、説明する間もおしいと早口に告げる。

「ああ、森に行くのはいいんだけど。先に行くから、村の人は森の入り口で待っててもらえないかな」

「おい、何言ってるんだ！今、森には化け物が！」

「正体も分かってるから。ちゃちゃっと倒しちゃうからさ。森の入り口で子供たちを頼むわ」

クリスは森に化け物がいると言われても、気にした様子もなく、お使いにでもいくかのように村人たちに言い放つ。

クリスにとっては、村人たちがいくら武装しても邪魔になるだけなのだ。

フウリに任せれば、探すための人数も必要ない。

「しかしな！」

言い募る村人を押し戻して村長がクリスと向かい合う。

クリスの目をじっと見つめる村長。

「分かった。子供たちとリリィを頼む」

クリスの真剣な目と先ほどの発言から、ここにいる誰よりも事態を把握してるのだろうと思った村長は即決断する。

「村長!？」

「クリスの弓の腕は、おぬしらも知ってるだろう。魔法も使えるんだ。わしらがいても邪魔なのだろう」

「村長がそう言うなら・・・」

村人たちは村長の説得にしぶしぶ引き下がる。

クリスは心の中で、無条件に信じてくれた村長に感謝をする。

「そんじゃ行って来る」

クリスはそう言うとかか呟き、瞬間村長らの目の前から掻き消えた。

フウリは、村娘が村長の家に駆け込んだとき、クリスに契約を通して話かけていた。

『主、何やら慌しくそちらに向かった娘がいましたよ』

『うん、今ちようど来たね』

少し途切れてから、クリスが慌てた言う。

『まずい！子供が森に入ってそれを追って娘も一人入ったらしい！』

『森は魔力食いの狩場になってますから、危険ですね』

『すぐ追いつくから、先に行って子供たちを探してくれ』

『分かりました』

クリスの指示を聞いて、フウリは晴れ渡った空に急上昇すると、まるで本物の風のように森を目指し高速で移動する。

フウリは森に着くと、昨日助けた火精霊の戦っている気配がするごとに気づく。

『主、昨日助けた精霊が戦っているようです。たぶん相手は魔力食いですね。人の気配もします』

森の上空で待機しながら、フウリはクリスに契約を通じて状況を報告する。

『すぐ行ってくれ、俺もフウリを目印に向かう』

『分かりました』

クリスの返答を聞くと、フウリは戦いの気配がするほうへ急ぐ。

クリスも、フウリの補助が無い中、なけなしの魔力を使い高速で移動する。

「頼むから、無事でいてくれよ!！」

魔法使いは祈り、さらに加速する。

第八話「魔法使いの幼馴染」

火精霊が魔力食いと戦っている後ろで、子供たちが泣きじゃくり、村娘がなんとか子供たちを逃そうとしている姿がフウリの目に入る。

フウリは急降下しつつ、魔力食いに風の刃を無数に叩き込む。

ふわりと、フウリが火精霊の前に降り立ったときには、魔力食いがいたところは、地面が抉れ土煙が立ち込めていた。

「間に合ったようで良かったです。その娘、子供たちは全員いますか？」

フウリは土煙の向こうを見つめながら、顔を向けずに村娘に話しかける。

村娘、リリイは目の前で起きた事象に一瞬呆然とするも、すぐにフウリの質問に答える。

「は、はい、皆いますー！」

「それでは、急いで逃げてください。私たちが足止めしますので全員いることに心の中で安堵したフウリは、守りながら戦うには心許ないと思い、冷静な顔で魔力食いと反対方向を指差し言う。

土煙がはれてくると、うごめく影が見える。

「分かりました！ほら、皆立って！逃げるよ！」

その影が見えたりリイは、急いで子供たちに向き返り促す。

しかし、子供たちは泣きじゃくり、なかなか移動しようとしなない。

そして、フウリたちの事情などお構いなしに魔力食いが襲い掛かってくる。

魔力食いは、オークの変異のようだがほとんど原型を留めておらず、体中から黒い霧のようなものを撒き散らし、腕を振り上げて攻撃してくる。

「く、存外早い攻撃ですね・・・！」

避けると、後ろにいる子供たちに当たってしまったため、避けるわけにも行かず、フウリは魔力食いの攻撃を風で防ぎ、いなしている。

火精霊も隙を突いて攻撃するが、消耗が酷く有効打にならない。

魔力食いはすばやい動きで、消耗している火精霊を狙ってくる。

それをフウリがいなしながら、近づいて来ているであろう主の気配を探る。

「魔法に対する耐性も半端ないですねえ・・・まあ私は時間稼げばいいので」

そう言うと、フウリは突風を起こし魔力食いを吹き飛ばす。

しかし、魔力食いはすぐに木を蹴って戻ってきて、腕を振り下ろし

攻撃する。

「守りながら戦うのは久しぶりです。主はあまり守らせてくれませんからね。しかし、もう終わりです」

フウリは魔力食いの攻撃を風で受け流し、体勢が崩れた隙に風の刃を数発叩き込み、足止めする。

瞬間、魔力食いの姿がぶれたかと思うと、真つ二つになり崩れおち、黒い霧となって消えていく。

成り行きを見ていたリリイは何が起きたか理解できなかった。

「遅いです、主。落第点です」

魔力食いの消え去った後にはクリスが立っていた。

「厳しいな！フウリがいないし、魔力もろくにならない状態で、こんな急いできたのに！むしろピンチに来て颯爽と悪を倒した白馬の王子さまじゃないか！ってというか本当に切れてびっくりだわ！なんか黒いの出てたけど、呪われないよね！？もう呪いは嫌なんだけど！」

大分急いだのだろう、クリスは息も絶え絶えなのに、それでも大声で叫ぶ。

「次からもう少し早く来てください、危うく本気を出すところでした。あと、主の剣なら切れるって言ったじゃないですか。呪いは分かりませんが、魔剣が粗方吸ってたようなので、もしかしたら何かあるかもしれないですね。よかったですね、主」

「おいしいい、無理無理！魔剣何食ってるのおおお！ダメでしょ！ペってしなさい！」

フウリの発言を聞いて、クリスは大きく剣を振り回す。

その奇行の最中に、リリイと子供たちが目には入り、取り繕うかのようには襟を正す。

「ま、まあ、なんにせよ、無事でよかった。皆怪我はないかい？リリイも久しぶりだね？」

クリスはところどころ服がぼろぼろになり、枝が刺さっていたり、顔に傷ができてる。

そんなぼろぼろの状態でリリイに近づくと、キザったらしい笑みを浮かべ手を差し伸べる。

「主、その顔は気に障るのでやめてください」

「おま、気に障るってひどくない！？」

そんなクリスの行動をフウリはまるで無表情にばっさり切り捨てる。

そこで、目を白黒させたリリイがやっと答える。

「えっと、その女性が守ってくれたので皆怪我は無いですけど」

そして落ち着いてきたリリイは、助けしてくれたであろう青年の顔を見る。

「・・・あ、あー！クリス君！あれ！？何でいるの！？帰ってきたの！？その女の人だね！？っていうかさっきの化け物なに！？どうなったの！？」

リリイは村でも元気がよく、その容姿と相まって結構村の男にも人氣がある。

「おっと、帰って村長に報告しないと」

しかし、疲れているところでこの質問攻めに答えるのは面倒だとクリスは判断し、踵を返す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！置いてかないでよ！」

慌ててリリイはクリスに手を伸ばし、逃さないとはかりにその服を掴む。

「後は任せた、フウリ」

「面倒を押し付けないで下さい」

「め、面倒ってどうゆうこと！？クリス君！」

服をリリイに掴まれたクリスは、その場でフウリに向き直るとリリイを指差し、差し出そうとするも素気無く断られる。

そのやり取りをみて、リリイは掴んだ服を引っ張りながら問い詰める。

「俺、ここまで超特急で来て、本当になけなしの魔力まで使っ
てらふらなんだよフウリ」

「私も疲れました、帰って寝たいです」

「お前寝ると回復するのか・・・？」

「するわけないじゃないですか、気分です」

「ですよー。んじゃ、二人で帰るか。家まで飛んでく？」

「いいですね。面倒事はいつも後回しにする主のその姿勢、私は好
きですよ」

リリイを無視して仲良さそうに会話を重ねていくクリスとフウリに、
リリイが疎外感から叫ぶ。

「うがああああ！無視するなー！」

「うがーって年頃の娘が上げる声じゃねえぞ！慎みたまえ！」

「そうですね、うるさいですよ娘。主との癒しの時間を邪魔しない
てください」

叫ぶリリイを一瞥して二人はそれぞれ注意する。

「ふ、二人してなにさ！そんな怒鳴らなくてもいいじゃん！ってい
うか説明してよー！」

「俺は毎回あんまり癒されないんだけど、どうなってるの」

「仕方ない主ですね。今度とびつきりの癒しを私が提供しましょう」

「お、なにに？精霊の癒しなんて、俺想像つかないなあ」

駄々をこねるように、クリスの服の端を掴んだ手を振り回すリリイに、しかし二人は無視を決め込んで無駄話をはじめめる。

「無視しないでよお」

「落ちると、上がるの、どっちがいいですか？」

「おいまてや、なんか不吉な感じがするぞ・・・？」

「いえ、ただ急降下するか急上昇するかの違いですよ？どっちもがいいんですか？主も欲張りですね」

「あぶねえよ！？癒されねえよ！？欲張らねえよ！？」

「私はそれをするとう癒されます」

「お願いだから無視しないでえ」

リリイは段々と涙をためて、力なくクリスの服を引っ張る。

「やっぱ、癒されなくていいわ・・・」

「我がままな主ですね」

しかし、結局リリイに構うことなく二人は会話を続ける。

「うう……、クリス君が数年ぶりに帰ってきたと思ったら、私を無視して知らない女の人といちゃいちゃしてるうう」

黒い霧が晴れ、森はにぎやかになってきた。

第九話「魔法使いの飴」

やっと泣き止んで周りの状況を理解した子供たちに、クリスがいつも持ち歩いている飴をあげることで収拾を図る。

「ほら、王都でも有名なお菓子屋の飴だぞ！一個ずつやるから並べ！みんな食べたら出発だ」

クリスは飴を手に持ち、高く掲げて注目を集める。

子供たちは、泣いてたことも忘れて我先にとクリスの前に列を作る。

そんなクリスを見てフウリが感慨深そうに告げる。

「さすが主。昔は年下しか遊び相手がいなかったただけあって、そういうことは上手いですね」

「ど、同年代の友達もいたわ！」

「え？」

クリスから飴を貰おうと列に並んでいたリリイが疑問の声を上げる。

「いい度胸だ、お転婆娘！おまえにはやらん」

「ああ！嘘嘘！クリス君友達いっぱいいたよ！本当だよ！」

リリイは飴欲しさに、必死に嘘を並べてフォローしようとする。

そんなリリイを無視してクリスはフウリに顔を向ける。

「ところでフウリ、火精霊は大丈夫なのか」

「はい、先ほど指輪に少し溜まっていた主の魔力を頂いて、渡しましたので消滅はしないでしょう。あとは魔力食いもなくなったので、元の棲家にいれば、すぐ回復するでしょう」

契約していない人と精霊が魔力のやり取りをするより精霊同士でやり取りをしたほうが楽なので、クリスはフウリに火精霊の面倒を任せていた。

「あ、あの、クリス君、私も飴ほしいなー、なんて」

リリイがクリスの服を引っ張りながらその顔を見上げるが、クリスは知らん顔をする。

「ならよし。フウリ、火精霊をその棲家に運んできてくれるか？」

「分かりました。運び終わったら主の所に行ったほうがいいですか？」

「うーん。たぶん村長の家で説明会だから、フウリは先に家に帰って休んでていいよ」

少し考え込んだクリスが、フウリを先に家に帰そうとする。

「あの、飴・・・」

小さく呟いたリリイの発言はやっぱり無視される。

「また、私が倒したことにしようとしていますね」

「てへ」

クリスは拳を頭にのせ、舌を出す。

「気持ち悪いです主」

「すみません」

クリスはごまかそうとしたのだろうが、フウリに一刀両断される。

「うう……またクリス君がー！」

「うるさい子だな！ほら、飴あげるからちょっと黙ってなさい」

「やった！」

騒ぎ出したリリイに、クリスはポケットから飴を一つとりだし、リリイの手の平に乗っける。

嬉しそうに飴を手取るリリイを見てため息を吐くクリス。

「見た目だけ大きくなって、中身はあのままなのか」

外見はいい女と言ってもいい程なのに、中身は子供のころと変わらず、世話焼きでお転婆で向こう見ずなリリイに、クリスは懐かしそうに視線を向ける。

「んー？」

リリイは飴に夢中で聞こえていない。

「なんでもない」

もう一度、クリスはため息をつくとフウリに向かう。

「んじゃ、そっちは頼んだ。こっちは、フウリさんマジ半端ねえっす、って感じにしとくから」

フウリが呆れたように言う。

「たまには自分の手柄にすればいいじゃないですか。私は人間に尊敬されるのも畏怖されるのもどうということはないのですが。主が下に見られるのはあまり我慢できないんですよ？」

「ドラゴンキラーでお腹いっぱいなんだよ！あの時だって決闘申し込んでくる奴とか、闇討ちまがい狙ってくる奴とかいて大変だったんだから・・・」

やたらプライドの高い王都の騎士団員が、新しいドラゴンキラーが冒険者だと聞いて闇討ちするも逃げられ、その数日後に逆に闇討ちされたとか・・・

精霊に対抗意識を燃やす人間はまずいないので、手柄をフウリのものにしたほうが波風が立たないとクリスは思っている。

「まあ、いいでしょう、分かりました」

「助かるわ。さすが我が精霊さま、愛してるぜ」

「はいはい。それでは火精霊を運んできますので」

嬉しそうな顔をして、火精霊を抱えるフウリ。

「ほい、気をつけて」

「よし、こつちも行くぞー。森の入り口に村長たちがいるから、さつさと安心させてあげるぞー」

「ふぁーい」

飴を口にいれながら返事をするリリィ。

子供たちも、甘いものを食べて元気が戻ってきて、立ち上がって歩き出す。

「なあなあ兄ちゃん、その剣本物なのか!？」

「触らせてくれ!」

「あのお姉ちゃんたち大丈夫かな?」

「あ、あんな化け物、僕一人でも退治できたし!」

「お前泣いてリリィ姉ちゃんにしがみついていたくせにー!俺は泣かなかったぜ!」

「なんだとー！」

「ねえねえ、クリスマス君、飴玉もう一個頂戴？」

子供たちプラス1が騒ぎながら森を移動する。

「この剣は一応本物だぞー、ただ今抜くと呪われそうだから抜けないけど。あのお姉ちゃんたちは心配ないよ、家に帰って休めば良くなるんだと。あんな化け物一人で退治できるなんてすごいなー、けどこれから村長たちによる地獄のお説教大会で坊主が退治されちゃうかもなー。あとそっちの坊主は泣かなかったかもしれないけど、ズボンの染みをどうにかしような。そしてリリイ、再会して早々こんなこと言うのもなんだけど・・・」

子供たちの発言に律儀に答えたクリスマスは、最後にリリイのほうを真剣に見つめる。

「え、なに？告白？さすがに急すぎるよ？私困っちゃう」

「あー、うん。お前五年前と全然変わってないなー」

クリスマスは、リリイにあつてからここまでの感想を率直にのべる。

「そ、それどういう意味？」

「可哀想に・・・」

哀れみの視線をリリイに送るクリスマス。

「え？え！？どうゆう意味さ！？」

リリイを無視してクリスが子供たちに視線を向ける。

「さーて、入り口が見えてきたぞー。坊主ども、しっかりこつてり怒られてこいー。ついでにリリイも怒られる！」

「わ、私怒られないよね？助けに行っただけだもんね！？」

「さあなあ。つと、村長ー！」

クリスは、前方に見えてきた武装した村人たちの先頭にいた村長に手を振る。

村人たちは急いでクリスたちのほうに駆けてくる。

「く、クリス！みんな無事か！？」

「うん、みんな怪我も無し。健康そのものなので、しっかり頼みまーす」

「うむ、引き受けよう。しかしとりあえず、村まで戻らんな。子供たちの家族も心配してるしの」

村長先頭で、子供たちを囲うようにして村に戻る。

「これは久々に腕がなるぜ・・・！」

「初代以来の大仕事だな！」

「初代は更生できなかったからな、こいつらはあんなことにはさせない……！」

「もちろん、リリイも一緒に説教だな。あのお転婆娘が！」

「ローテーションは、いつも通りでいいか。まずは両親、次に村長、あとは順々にいこう」

等々、説教に妙なやる気を見せる大人たちに囲まれ、青い顔をする子供たち、プラス1。

「ね、ねえ、クリス君。私も説教されそうなんだけど。た、助けてくれないかなーなんて」

「しっかり受けておいで。骨は拾ってやるから」

「み、見捨てないでよお」

リリイはクリスの袖を掴む。

「ま、命があっただけいいじゃないか！あれも慣れてくるとなかなか赴きがあるよ。俺はもう一生分受けたから全力でお断りだけど！」

「だ、だけど。一応私は、皆を助けに行っただよ！」

リリイは情状酌量の余地はあるのではないかと何故かクリスに訴える。

「結果、家族にも村のみんなにも心配かけたんだぞ」

しかしクリスは、正論を武器にリリーの発言を粉碎する。

「むう！クリス君だって、村出て行ったとき、家族にすごい心配かけたんだよ！私も心配したし！」

「残念。それはもう昨日、母親に殴り倒され、弟に絞め殺されそうになって清算されました」

「私の心配は！」

「今日助けたのでちゃらです」

「ぐぬう」

「ほら、飴やるから、元気だせって」

「わー！ありがとー！」

（なんとというちよろさ。まあどうせ、リリーも子供たちも夕飯食えないだろうしなー）

村の篝火が見えてくる。

そして、村の入り口にはお母様集団が待ちうけている。

魔法使いが旧友と親交を暖めている中、そのときは刻一刻と迫ってくるのだった。

第十話「魔法使いとお風呂」

鬼の形相をした親たちと共に、村長の家に数年前にできた、通称説教部屋に子羊たちが引きずられていくところを確認すると、村長はクリスマスに言う。

「今回は長引きそうなの。とりあえず、疲れてるかもしれないが、こつちも話だけ聞かせてもらっていいかの？」

「了解、村長の家で？」

「うむ、あの様子だと第一陣は母親たちだろうから、順番待ちしてる者にも聞かせよう」

説教は親と村の主だった者たちがやるので、順番待ちの部屋は重要な話をするのに丁度いい。

「順番待ち・・・なんとという説教地獄」

「おぬしのせいで出来たのだがな」

「さて、行きましようか、村長さま！」

「はあ、これ走るでない」

村長はため息をついてクリスマスを追う。

村長の家で、時々漏れ聞こえる怒声や泣き声を聞き流しつつ、クリスは森であったことを、村長と順番待ちの部屋で説教に向けて各々作戦を話し合ったりアップしていた面々に、少し事実を曲げて説明した。

「ふむ。では魔力食いが魔物が森に住みついて悪さをしてたのかの。それである子たちはそれに襲われていたと」

「そそ。それで、それを森にいた精霊と、俺と契約してる精霊が倒したと」

村長が目を瞑って何か考え、ゆっくり目を開ける。

「昔、旅の人に聞いた話だと、魔力食いというのは精霊を食べるということだったんだがの」

クリスは、立ち上がって腕を振り上げ、捲くし立てるようにしゃべりだす。

「おいおい、村長さんよ。うちの精霊、フウリさまをなめないでもらおうか！ そんじょそこの精霊とは訳が違うんだぜ！ 風精霊ならではの用途に応じて使い分けられることができる機能に富んだ魔法、すばやい移動速度と魔法行使、気配察知、遮断もお手の物。風精霊という攻撃力が無いと勘違いする素人もいるが、あれは間違いであるところ断言しよう！ 風の刃による微塵切りから、突風による磨り潰しまでなんでもござれの多種多様な攻撃！ 他の精霊と組めばその脅威は更に増す！ それに加え、手前事で悪いけど、うちのフウリ

はそれはもう美人だし、気が利くし、やさしいところもあるし、実は最近料理に興味を持ったりと家庭的なところも見せ始めて、そこと普段とのギャップがそれはもう言いようのない気持ちを抱かせるんだ！ああ、もちろん欠点みたいなものもあるよ？主に対して口が酷く悪いとか、心の柔らかい部分を抉ってくるとか。けどそういうところも含めてもあいつと契約したこと俺は後悔してないよ？なんていうのかな、契約とは別に信頼っていうのかな、そんなものがあるかな？俺の間にはあるんだ。だからあいつには安心して背中を任せれるし、あいつも同じだと思う。はは、ちょっとくさかったかな、けど本心なんだぜ。まあ結論を言うと、フウリは魔力食いなんかには負けないぜっていうことなんだ」

周りの村人は呆然とそれを眺める中、クリスが座りなおす。

（（結論と関係ない話が間に長々と挟まっちゃったよ！？）（

我に帰った村人たちは、そんな感想を一樣に覚えるが、皆が突っ込む前に、村長が一息吐いて言う。

「う、うむ。お前と契約した精霊さまの話はよく分かったぞ。しかしどちらにせよ、お前のおかげで、本当に助かった。ありがとう」

村長と、集まっていた面々は深く頭を下げる。

煙に巻けたことにクリスは安心し、同時に謝罪されて妙に居心地が悪くなる。

「勘弁して。そんなことされると、散々迷惑かけて出て行った身としては逆に座りが悪いっす」

クリスがそう言うと、皆頭を上げて口々に好き勝手言い出す。

「確かに違和感あるな、昔はここでクリスをいかに反省させるかを考えてたわけだしな」

「世の中分らないもんだなあ」

「クリスのくせに俺らに頭下げさせるなんてな」

「いきなり惚気だすしな」

「そもそも、家庭的で気の利くちよっときつめな美人の精霊さまと契約だあ!？」

「しかもセルフで言葉責め!」

「クリ坊のくせに生意気だ!」

「うちのかかあと代えてくれ!」

「っていうか、元はといえば初代が悪いんじゃないかね?」

「お、それ俺も思った」

「おい初代、お前も説教参加していけよ、もちろんされる側で!」
「たまらず初代が絶叫する。」

「変わり身が早い上に、割とひどいなあんたたち!」

「うるせえ！お前が作ったんだろ、あのいたずら集団！責任とれ！」

「俺の色本も責任とってくれ！！」

皆、悪態を吐きつつも、嬉しそうにクリスマスをもみくちやにする。

「ほれ、クリスマスも疲れてるだろう。それくらいにせんか、お前たち」

村長がたしなめ、場を静める。

「まあ、こうやって言い合ってるほうが気が楽でいいかな。けど、雲行き怪しいからそろそろ帰るわ」

「うむ。明日は久々に狩に出れるから、馳走を期待してくれ。宴を開くぞ」

「はい、母さんと弟にも伝えとくよ」

「うむ、頼んだぞ」

そして、村長とその他の面々、あと怒声と懺悔の声に見送られてクリスマスは帰途についた。

「ただいま」

クリスが玄関を開けて家に入ると・・・

「に、い、さ、あ、ん、く」

ジョシュがタツクルしてくる。

と、それを寸前の所でマリアンが首根っこを掴み止める。

「おかえり、クリス」

「おかえりなさい、主」

玄関には、ジョシュを取り押さえたマリアンと、フウリが立っていた。

「ジョシュはどうしたの？」

「あんたが森に魔物退治に行ったって聞いて、自警団に無理やりついて行こうとしたのを私が止めたから、ずっと玄関で待ってたのよ」

「それはまた・・・心配掛けたな」

クリスがジョシュの頭を撫でる。

「ちゃんと魔物も倒したし、明日は宴だと」

「分かったわ。フウリちゃんもさつき戻ってきていろいろ手伝ってくれたのよ。お風呂も水入れ替えて沸かしてあるから入っちゃいな」

クリスはジョシュの頭から手をどかす。

「お言葉に甘えてお風呂に行こうかね」

「主、背中流しましょうか」

「兄さん、背中流すよー!」

「む?」「え?」

フウリとジヨシユの視線がぶつかる。

「あらあら。クリスもてもてじゃない」

面白そうに言うマリアン。

「とりあえずジヨシユは、昔俺の背中を力一杯擦って傷だらけにしたことを思い出せ」

「う、ごめんなさい」

ジヨシユが下を向いてしゅんとする。

「それはすごいですね。なかなか主の背中に傷をつけれる者はいませんよ。誇っていいです」

クリスの身体能力を知っているフウリが嫌味無しに言う。

「まあ、かわいい弟だしな。最初は我慢したんだけど、段々強くなっ
っていつてな……」

「あのときは凄かったわ。ジヨシユが大慌てで呼びにきて、行った
らあなたは血だらけで倒れてるし、なにがあったのかと思ったわよ」

「うづう……」

ジヨシユが涙目になってきたので、クリスがフォローする。

「ま、まあ、今日は疲れてるから、また今度一緒に入ろうな」

そう言うとジヨシユは、ぱあっと顔を輝かせて頷く。

それを見届けて、クリスは風呂へと向かう。

その後ろを当然のようについていくフウリ。

「おい、フウリ。ついて来るな。お前も少し反省しろ」

「おかしな主ですね。私はこれと言って、お風呂絡みで反省するよ
うなことは無かったと思いますが」

「ほうほう？昔、有名温泉地に突如謎の竜巻が発生して被害が出た
ことに関する弁明を聞こうか？」

「何を言っているんですか主。あれは事故です、自然現象です。乙
女の柔肌を見ようとした不埒者以外に人的被害も無かったからいい
じゃないですか。ついでに削られたところから温泉も出て万々歳。
いい事したあとは気持ちがいいですね？」

「阿呆か！その不埒者は一応一緒のパーティーを組んでたんだぞ！
再起不能一步手前まで追い込むなよ！せめて、おとりにできる状態

くらいで我慢しろよ！おかげで後に控えてた依頼を俺一人で処理しなくちゃいけないくて、指輪に呪われたりで俺も再起不能になりかわわ！」

「では主は私の肌を人間の男に見られてもいいのですか？見下げた主ですね」

「あれ、それはなんかむかつくな。今度あいつらに会ったら九割刻むか」

「いいですね、去勢しましょう」

「同じ男としてそれは許してあげて・・・」

結局、魔法使いとその精霊は言い合いながら、風呂場へと消えて行くのだった。

第十一話「魔法使いの指輪の秘密」

「やっぱり自分のベッドは落ち着くなあ」

お風呂から上がって、ご飯を食べたクリスは部屋のベッドにダイブしてごろごろしている。

「それはいいですが主、魔剣を抜いて見ましたか？」

フウリは机の椅子に座ってお茶を啜っている。

「おいやめろ、俺の今一番気にしたくない事ランキング第一位に堂々と突っ込みをいれるな。触れないようにしてたんだ。ちよつと時間置いて魔剣がああ黒いの消化してからでいいじゃん」

「消化するような器官はあの魔剣にはついていません。もう取り込んでしまったでしょう。抜いてください」

クリスはベッドから勢いよく起き上がり、部屋の隅に置いてある魔剣を指差さして言うが、フウリはお茶を置いてクリスに詰め寄り、剣を抜かせようとする。

「え、なんでそんな積極的なフウリさん」

「私の推察が正しければ、その魔剣、面白い事になってますよ」

「ちなみにその推察とは？」

興味を持ったクリスが身を乗り出して聞き返す。

「ふむ、説明したほうが主も安心できそうですね。それでは説明します。まず、あの魔力食いの黒い霧ですが、いろいろな説があります。あれが魔力食いの本体だとか、あれは取り込んだ魔力が大きすぎて体から溢れているとか。私個人の見解ですと、黒い霧は一種の消化器官だと思っています」

「消化器官・・・他の生物の魔力をあれで消化して自分のにしているのか」

クリスはフウリの講義を聞いて、自分なりに咀嚼していく。

「そうです。普通、面倒な手順を踏まないとできない生物間での魔力の取引を、一方的にできるようにしているモノがああ黒い霧だと推察します」

「あれけどそれなら、うちの魔剣もできないっけ？」

ふと思った疑問を、クリスは部屋の隅を見ながら問いかける。

「あれは相手を切って体内に刃が接触しないとできません。十分面倒な手順でしょう。ついでに吸引するだけで、その魔力で出来ることも限定されてますし」

「なるほどなあ」

「世界からの魔力供給を一切できない魔力食いが、あの黒い霧によつて他の生物から魔力を食らって生きている。そこまではいいですね？」

「さすがフウリ先生、教え方も上手くて素敵！」

学院時代、クリスの追試前には付つきりでフウリが勉強を教えたので、教えるのはお手の物だ。

「もつと褒めていいですよ？」

「続きを期待」

「仕方ない主ですね。それで、元々黒い霧と魔剣は似ているところもありますので、うまく吸収できていれば、黒い霧の力が使えるかもしれないと思うのです。魔剣からもほんのり魔力食いの力を感じますしね」

「フウリ先生質問があります！」

手を上げるクリス。

「はい主、そこで三回回ってワンと鳴いてから質問をどうぞ」

クリスを指し、ついで床を指差すフウリ。

「学院の変態教師どもでもなかなかそんなこと言わねえよ！？じゃなくて、結局うちの魔剣ちゃんは何ができるようになったの？」

「ふむ。黒い霧は取り込んだ魔力を完全に自分のものとして扱えるようにする器官だとするなら、本来なら魔剣に蓄積した魔力は切れ味向上と斬撃を飛ばすことしか出来なかったのが、主の好きにできるようになるんじゃないかと思います」

「おお・・・！？」

「つまり、擬似的に魔力量が増えて、しかも回復量も増えた上に、切れれば切るほど魔力が回復する、ということになってるかもしれないですね。さあ、主の研究がまた一歩進むかもしれないのです、すぐ抜きましょう」

フウリはクリスに剣を抜くよう急かす。

「お、おう。それじゃあ、抜くぞ？抜くからな！？」

クリスは、部屋の隅から剣を取り、恐ろしいものを触るかのようにその柄を握る。

「早くしてください、へたれ主」

「あはい」

意を決したようにクリスは剣を抜く。

しかし、特に何も起こらない。

「ん？何もなさそうだよ？」

折角意を決めて抜いたのに何も起きないことにクリスは気が抜ける。

「本当にお馬鹿さんですね主。魔剣の魔力を使わないと分からないでしょう。そうですね、剣を握って私に魔力を送るイメージをしてください。どうも私からは奪えそうに無いので」

「ほほう」

クリスは目を瞑って、契約で出来ている自分からフウリへの魔力の流れに、剣からも魔力が流れるようにイメージする。

「ふむ。これはこれは」

フウリが楽しそうに呟く。

「お？できた？」

クリスが目を開けて聞く。

「ええ、ばつちりですね。しっかり流れ込んできて、主の魔力の味がします」

「え、どういうことなの」

「簡単に言うと、魔剣は自分の魔力を主の魔力に限りなく味を似せているのです。なので、剣を通して魔力を使う他に、主は簡単に剣の魔力を自分の魔力として取り込んで使うこともできるようです。けれど、魔力の所有者は魔剣なので、いくら味が似ていても直接私が奪うことはできないのです」

「おおー！自由にできる魔力がふえたのか！」

クリスは喜び剣を抱く。

「そうです、よくできました。けど、主が魔剣から魔力を吸い取れ

ばそれは主の魔力なので、私の好きにできます。喜ばしいことです」
フウリの言葉を聞き、剣を置きながらクリスがつぶやく。

「なんか魔力が増えたと思ったら、結局そうでもなかったような感じになつてる件」

「いえいえ、切れば切るほど魔剣の上限までは使える魔力が増えますよ。よかったですね。早速ドラゴン狩りに行きましょうか」

「過激発言禁止！！そもそも魔剣は今お腹いっぱいなので切っても取り込めません！」

クリスが腕を交差させ、フウリを止める。

「魔剣から主を通してその指輪に魔力を送って、魔剣の空きを作ればいいじゃないですか。ああけど、ちょっと容量が足りないようなので、その指輪を量産しないといけませんね」

「無茶言つな！この指輪の元、どんなもんか知ってるだろ！一時期この指輪に呪われて大変な思いしただろうが！」

「そういえば、主が遺跡にあつた指輪を何の疑いも無く手にとって、危うく契約が切れそうになりましたね」

しみじみと思い出し、フウリが言う。

「その節は大変ご迷惑をおかけしました、すみません」

クリスはすぐにフウリに頭を下げる。

「まあ、いいでしょう。魔剣の確認も出来たことですし、そろそろ寝ましようか」

「おう。今日は一緒に寝ないからな！」

「主は私に床で寝るというのですね」

「おい、現在進行形で浮いてるだろうが」

「馬鹿なこと言わないでください、浮いてるのは主の存在ですよ」

「そっちの浮くじゃない！！たく、さすがに疲れてるからもう寝るぞ」

そう言ってベッドの端に寄る魔法使い。

精霊が空いたところに潜り込む。

結局、一緒に寝るのだった。

第十二話「魔法使いと周りの国々」

晴れ渡った朝、クリスとフウリは魔力の都合がついたので、火精霊が養生している洞窟へ向かう。

クリスは昨日はほとんど見れなかった森の風景を懐かしそうにみながら歩く。

フウリはクリスに合わせてその横を浮きながら移動している。

「ところであの火精霊さん、格高いの？」

「なんですか主。私以外の精霊に興味津々ですか？浮気ですか？」

「突拍子も無いこと言うねお前！」

フウリは蔑む様にクリスに顔を向けて言い、それを聞いたクリスの叫び声が森に響き渡る。

「冗談です、半分くらい。あの精霊はなかなかの格ですよ、私と同じところにおいても逃げないくらいには」

「そう考えると、凄いやな。大抵の精霊はフウリにあんまり近寄ってこないからなあ」

「似たもの同士ですね、主と私。少し照れてしまいます」

フウリは表情を一切変えずに言う。

「真顔で言わないでくれる？しかも俺は別に人が寄ってこないわけじゃないよ!？」

「何を言うかと思えば、主、良く思い出してください。あのいろいろぶっ飛んでる友人たち以外に主に友達がいますか？人間の、ですよ」

フウリに顔を向けてクリスは自分たちの認識の違いを正そうとするが、フウリの質問に答えが出ずに焦る。

「えっと・・・あれ・・・？吸血鬼とか竜人とかもだめ？人間に似てるじゃん、あ！エルフ！エルフはセーフでしょ？」

クリスはギルドの関係で変な人脈はあるのだが、まともな友達が少ない。

「一般的な友人はほとんどいませんね、それが現実です」

「う、うそだと言ってよフウリ・・・」

がつくりと膝をつくクリス。

「大丈夫です、主。例え主が世界を敵に回しても、私は主の味方ですよ?？」

ひざまずくクリスの肩に優しく手を置いてフウリは諭すように肩を叩く。

「え、なにこれ、うれしい」

クリスがぱつと顔を上げフウリを見る。

「一度世界を壊してみたいと思っていました。二人の楽園を築きましようね」

フウリが薄く笑って言う。

「過激すぎるわ！普通でいい、普通の友達がほしい」

地面を叩きながらクリスが言う。

「あのぶつ飛んだ人たちと付き合っている以上無理でしょう。主もぶつ飛んでますしね」

「他国ならできるかもしれん！」

クリスは精神によく無い自分の交友関係を思いだし、友達を国外に求める。

「頑張ってください。ただ、ガイエン帝国では、主は要注意人物としてマークされてるので、気をつけて旅行しましょうね」

ガイエン帝国は、クリスのいるオーカス王国の西に位置している大きな領土をもつ軍事国家である。

「て、帝国以外にも国はあるし！」

「ほうほう。あれですね、主のせいで停戦交渉してるグルーモス王国ですか？あつちはまだ交渉中なので危ないですよ？」

グルーモス王国はオーカス王国の南にあり領土問題で何度か戦争をしている。

戦力的にはオーカスが圧倒するのだが、帝国が支援しているため、なかなか決着がつかずにいた。

「トライン聖王国が・・・！」

トライン聖王国はオーカス王国の北にある宗教国家だ。

「ふむ。お姫さまを主が誑かした国ですね。王様が親馬鹿でしたね。あその王族は天使の気配もほんのりしたので、あのときは生きて出れただけでも有難いと思いますよ」

「勘違いだあれは！！っていうか、あれ。俺がこの国から出るの、大変じゃね？」

クリスが考えるように呟く。

「さて、主が現実を認識できたところで。あの洞窟が火精霊の棲家です」

前方を指差してフウリが言う。

「はい・・・」

クリスはフウリの先導で洞窟の奥へと進む。

「ほー、これは結構魔力が溜まってるな」

ごつごつとした岩肌を歩きながら、クリスは周りを見回し関心したように呟く。

外よりも少し気温が低く、ひんやりとした空気に歩いて汗ばんでいたクリスは心地よさそうにしている。

少し歩くと前方から火精霊がふわふわとやってくる。

「ぼんやりと人型を取ってるということは、かなり高位？」

「そうですね、今は消耗しているので、ぼんやりですが、回復すればくつきりするかもしれないですね」

「すぐに魔力を渡すんだ、フウリ」

何かにぴんと来たらしいクリスは、真剣な表情をしてフウリの方に手を置き揺らす。

フウリは揺れながら、クリスの発言の意図を考える。

「何で急にやる気になってるんですか主。ああ、そういうところですか、相変わらずむっつりですね。私と初めてあったときも拳動不審でしたよね」

「ちちち、違うし、別に裸目当てとかじゃねえし、勘違いするなし」

「主、盛大に自爆してます」

ある程度、人の世界に興味を持っている精霊以外は服というものを

知らない。

知っていても、理解できない精霊がほとんどだ。

フウリも契約当初は全裸だった。

クリスが必死に教えて、やっと魔力で服を作るようになったのだ。

クリス曰く、ちょっと見れるのはどきどきするけど、四六時中となるとその限りではない、そうだ。

そんなフウリも最近では、料理と共にファッションにも凝るようになってる。

「それでは魔力を渡しますよ」

そう言うと、フウリはふわふわ浮いていた火精霊を抱き込む。

すると段々二人が光っていく。

クリスは期待に満ちた目でその光景を見守る。

光が収まると、そこには子供の姿の火精霊が立っていた。

「くそ！ 幼女じゃねえか！ 責任者呼んでこい！」

絶望した魔法使いの声が洞窟にこだまするのだった。

第十三話「魔法使いと火精霊」

フウリは絶叫するクリスの方を向く。

「主は本当にどうしようもないですね。少し黙っててください」

「だけど！俺の期待が！」

駄々をこねるようにフウリに向かって言うクリスに、フウリは無表情に続ける。

「それ以上言ってるどねじきりますよ？」

フウリは視線を少し落として言うと、クリスは意図に気づいたのか急所を手で覆う。

「黙ります！」

「よろしい」

どちらが主かわからないようなやり取りをしてクリスが落ち着いたのを確認すると、フウリは火精霊に近づき、膝を落としおでこを合わせる。

火精霊は再度光に包まれると、今度は白いワンピースを着て立っていた。

それを確認すると、フウリは火精霊から離れる。

こうして見ると、人間の四、五歳くらいの子供にしか見えない。

「ふむ、白い肌と服の色が合っていて似合いますね。我ながらいい見立てです」

「かぜの　せいれいさま　ありがとう」

「うお、幼女精霊が話とる」

クリスは火精霊がたどたどしく礼を述べるのを見て、昨日から先ほどまで話していなかったので驚いたようだ。

「ええ、言語と服の情報を伝えたので」

「さすが、風精霊。情報の伝達はお手の物だね！」

「私ほどになると、マッチした服を着せることもできます」

クリスのおだてに、フウリは胸を張って自慢げにする。

火精霊はそんなフウリとクリスを交互に見る。

「こちらが私の主です。ぶっ飛んだ変態無職のダメ主ですが、やればできる子なんですよ」

「いいところを一切言わないだと！」

手で火精霊に示して聞かせるフウリの横で、クリスが何か少しはあ
るだろうと言う。

「主のいいところですか。あまり難しい話を振らないでください、困ります」

「一個も出てこないどころか難しい話扱いかよおおおお」

本当にこまったかのように首をかしげるフウリに、クリスは絶叫する。

「興奮しないでください、火精霊が怯えてしまいます」

「む、精霊とは言え、子供に怯えられるのはいい気がしないな」

怯えるようにフウリの後ろに隠れた火精霊を見て、クリスは居住まいを正すと口を開く。

「森の精霊さま。村の子供たちを守って頂いたこと、感謝致します。ありがとうございます」

丁寧に謝辞を述べるクリス。

しかし火精霊は首をかしげる。

「わたし かぜの せいれいさまに たすけられた けど やくそく まもれなかった」

フウリの後ろから少し顔を出した状態で、たどたどしく火精霊が言う。

「うん？約束？フウリ、何か約束したの？」

「ええ。助けたときに、森に入ろうとする人間を止めるように」と
クリスは何も聞いていなかったようで、不思議そうにフウリを見て、
フウリは思い出したように言う。

先ほどより少しフウリの後ろから出てきた火精霊が続ける。

「にんげん もりに はいったから そとに だそうとした」

「それで、魔力食いと遭遇して戦ってたのか。いや本当に子供たち
を守ってもらって助かりました」

昨日の状況の理由がやっと分かり、クリスは改めて火精霊にお礼を
述べる。

火精霊は完全にフウリの後ろか出てきて告げる。

「わたしは にど たすけられた」

「ふむ。主、この火精霊と契約しませんか？」

何か考えている風だったフウリがクリスに突如提案する。

「この流れでなぜそうなる」

まったく流れが読め無いフウリの発言にクリスが呆れた顔をする。

「いえ、火精霊から主への感謝の念が伝わってきたので、この際ど
うかなと。折角魔力もあることですし。あと私、火精霊とは相性い
いので」

「まあ確かに、戦力はあつて困るものでもないしな」

クリスはこれまでの経験から、たまに物騒な考え方をしてしまうことがある。

「けど、容量は剣の分だけで足りるのか？」

「主は私とその少ない魔力で契約してるんですよ？得意のインチキ魔法を使えば十分足ります」

「インチキ言うなし。節約は大事なんだ」

「そういうことは、お師匠さまに値段も言えないような物を賣のをやめてから言いましょうね」

クリスの師匠は古代魔法や遺跡の研究をしているので、クリスはよく遺跡の発掘品や古代魔法の本を師匠のところに持って行っている。

珍しいものなのでかなり高いのだが、師匠は名門貴族の出なのでお金の感覚が鈍く、結構気にせず嬉しそうに貰っている。

クリスは師匠が嬉しそうに受け取ってくれるのが嬉しくて、結果その出費が続くのである。

おかげで最近では、フウリがクリスの財布を握れるほどに、物価に詳しくなってきた。

「よ、よし。森の精霊さまさえ良ければ、契約しましょう！そうし

ましよう!」

これ以上は藪蛇だと焦ってクリスが火精霊に向きなおる。

「けいやく あの おいしいまりよく もらえる ?」

フウリ経由で貰った魔力の味を覚えた火精霊が首をかしげ尋ねる。

「ええ、ええ、それはもう!ただ少し契約魔法をいじりたいのですが、よろしいですか?」

勢い込んで火精霊に向かうクリス。

「けいやく いじる ?」

火精霊はクリスと契約しているフウリを見つめる。

「大丈夫です、私も主とそれで契約してますので。あなたに害を成すものではありませんよ」

「けいやく する」

フウリがやさしく火精霊を諭し、その言葉を聞いた火精霊が決断してクリスを見上げる。

「それでは失礼しまして」

クリスは手ごろな棒が無かったので、魔剣の鞘に魔力をこめて洞窟の床に魔法文字をすらすらと書いていく。

鞘が通った床はほんのり光っている。

普通の精霊との契約なら、人間が魔力を提示し、精霊が了承ならそれを取り込むだけの原子的な魔法なのだが、節約魔法を契約に組み込むには、クリス考案、師匠監修の魔法文字の上でそれをやる必要がある。

無事書き終わったクリスは火精霊と共にその上に立つ。

精霊は、生物との契約方法を生まれたときから自然と知っていると言われている。

「それでは、契約をしますね。その文字の上に立つてもらおう以外は普通の契約方法です。」

「わかった」

火精霊が文字の上に立つと、クリスは魔剣から魔力を吸いだし、それを火精霊の前に持っていく。

薄く発光した魔力が、洞窟の薄暗さと相まって幻想的な輝きを放つ。

火精霊がその魔力の塊を両腕を広げて、まるで大事なものを包むようにその腕に抱くと、段々と光の塊は吸収されて消えていく。

やがて魔力の塊が完全に消滅し、火精霊と魔法使いとの間に契約が

成立した。

第十四話「魔法使いの娘」

「ふう、無事契約出来たな」

人生二回目の契約が終わったことにほっとするクリス。

「私のときよりスムーズでしたね」

見守っていたフウリが口を開く。

「けいやく できた」

火精霊はほとんど表情が読み取れないが、若干うれしそうにも見える。

「よくできましたね。ずっと子供がほしいと思ってたんです」

「おい、なんでそうなる」

フウリの予想外な言葉に反応するクリス。

「戦力なんてこれ以上いると思ってるんですか主。私と主で魔王にも喧嘩売れますよ、そして完勝します」

「物騒なこと言うな！っていかかどういいうことなの！？」

「いえ、ですから子供が欲しかったのです。私と主の子ですよ。名前はどうしますか？」

「なまえ？」

火精霊が首をかしげる。

「ええ、あなたの名前ですよ。持ってないようなので、今から考えましょう」

「おかしい。知らない間に子供ができた」

「現実を見てください主。私に似て美人になりますよ」

「種族的に俺には絶対似ないよね!？」

精霊は女神が作ったとされ、格が上がると全ての精霊は女性の形をしている。

「自分の子供が嫁に似ているからといって嫉妬ですか、可哀想な主」

「落ち着けや!まず俺の子供じゃないうえに嫁もまだいない!！」

「主が落ち着いてください。これからいつも一緒の主と私とこの子、並んだらどう見えますか？」

「え・・・あれ・・・ちょっと若い親と子？」

少し想像して、結果を口にするクリス。

「正解です。主がどう思おうと、世間の目が真実を照らします」

「え、けど、あれ?え、え?」

クリスがしきりに首をかしげる。

「私がお母さんで、あつちで首をかしげている少し間抜けな顔をした人間がお父さんですよ、わかりましたか？」

クリスを放って刷り込みを開始するフウリ。

「おかあさん おとうさん」

フウリとクリスを交互に見て口ずさむ火精霊。

「さて、名前はどっしりしましょうか？主になにか案はありますか？」

「え、あ、うん。名前だよ、名前。どっしりしょうか？」

思考を放棄したクリス。

「主はネーミングセンスがありませんから。風の精霊だから、シルフと言いだしたときには契約を引きちぎろうかと思いました」

私はあいつが嫌いなんですよ、と続けるフウリ。

「結局、フウリも自分で考えたからな！火精霊に考えてもらおうか？」

「馬鹿なこと言わないでください、この子は人間の言語をさっき伝えたのですよ」

「すみません・・・」

「仕方ない主ですね。私が考えます、大事な子供ですからね」

なんだかんだとフウリは嬉しそうに考えだす。

「あのそれなんだけどやっぱ・・・」

クリスが子供発言に対して疑問を呈そうとする。

「うるさい主ですね、少し考えるので黙ってこの子を見ててください」

フウリが一刀の元に疑問を切り伏せて、火精霊をクリスの前に押す。

「おとうさん？」

火精霊がクリスを見上げて首をかしげながら言う。

「な、なんだこの気持ちは・・・！幼女に見上げられてお父さんと呼ばれただけなのに、このときめきは！・・・も、もう一回言ってくれるかな？」

火精霊に向かってお願いするクリス。

「おとうさん？」

火精霊は再度同じ行動を取る。

「よし。俺が君のお父さんだよ！何か欲しいものがあればすぐに言うんだ！お父さん何でも買って上げちゃおうよ！」

クリスは、父性が湧き上がり、それまでの疑問を彼方へと吹き飛ばす。

「ほしいもの？」

「うんうん、何かあるかい！」

「ん おとうさんの まりよく おいしかった」

少し考えて、火精霊が言う。

「よし、魔剣の魔力を上げよう。しかし、契約で減ったしドラゴン狩りに行くか」

クリスの思考が火精霊を中心に回りだす。

「ドラゴンなら帝国のあの山にまだ養殖場が残ってたっけか。しかし、マークされてるとなるとあそこまで行くのは面倒だなあ。そもそもあいつらが・・・」

ぶつぶつと、娘への贈り物のために思案する父親。

ちなみに、帝国の主戦力といってもいいのがドラゴン騎兵である。

グルーモスとオーカスの国境戦争で、グルーモスに帝国がドラゴンを貸し出した事によりオーカスの被害が増大し、オーカスはギルドに依頼しそのドラゴンを討伐する。

次に、下位とはいえ人に飼われる同種を恥じていた高位のドラゴンに交渉を持ちかけ、竜人の取り成しもあって、オーカスはそ

の助力を得て、新しいギルドのドラゴンキラーに帝国のドラゴン養殖場を襲撃する依頼を出す。

帝国の養殖場のいくつかが壊滅したが、ドラゴンに襲われたインパクトでギルドのドラゴンキラーは目立たず仕事ができ、帝国も疑わしいとしてマークだけはしているものの、手配書などは出回っていない。

「主、やっと父親としての自覚が芽生えたようで嬉しいです、あと三人は欲しいですね」

名前を考えていたフウリがクリスたちの方を向く。

「とりあえず魔剣の魔力を入れても、人型になってる精霊を維持するのはつらいので一人でいいです」

「甲斐性なしですね主。世界征服できるくらい子供がほしいとか言えないのですか？」

「どんだけ甲斐性あるんだよお前の中の俺は！」

「ふむ、良く考えたら、すでに世界征服できますね。よかったですね、主。私の中の主は等身大ですよ？」

フウリは少し考えて頷く。

「よくないだろが！！物騒すぎるわ！世界征服なんてしないからな！」

クリスが叫ぶ。

「ふむ。ところで名前なんですが、いいのを思いついたので、それにしたいのですがいいですか？」

フウリは頷くと、話題を変える。

「さらっと流された・・・名前はぶっ飛んだのじゃなきゃ、フウリの好きでいいよ！」

「分かりました。それでは、今日からあなたの名前は「フィリス」です」

フウリは火精霊の前にしゃがむと視線を合わせる。

「わたしのなまえふいりす？」

火精霊はたどたどしく聞き返す。

「はい、そうです、フィリス。私たちの可愛い娘です」

フウリは愛おしそうに火精霊の名前を口にする。

「うん わかった ふいりす」

フィリスはうなずいて、口の中で自分の名前を暗唱する。

「ちなみにどんな意味があるんだ？」

安全第一を唱えていたクリスがフウリに聞く。

「さすが主、いいことを聞いてくれました、花丸をあげますよ。」
「ファイ」は古代の言葉で「照らすもの」という意味があり、「リス」は主の名前から頂きました」

嬉しそうにフウリが説明する。

「おお！俺の名前使ってくれるなんて感動した！」

「はい。見た目はどうやっても主には似ないので、せめて名前だけでもと思ひまして」

「感動を返してくれ！」

「うるさい主ですね。フィリス、ああってはいけませんよ？」

「うん うるさく しない」

フィリスはこくりと頷く。

「よしよし、えらいですねー」

フウリがフィリスの頭を撫でる。

「おかしい、何かがおかしいんだが！」

「はいはい、主。今日は宴もあるんでしょう？結構時間使いましたから、そろそろ戻りましょう。フィリスもお披露目しないといけませんね」

「くっ。俺も何か父親らしいことをしないといけない気がする！よし、手を繋ぐぞフィリス！」

「て つなぐ？」

「そうそう、お手を拝借してっ」と

フィリスの左手を取るクリス。

「て あったかい」

繋がれた手を見てフィリスが呟く。

「それじゃあ、私とも繋ぎましょっね」

「ん」

フウリがフィリスの右手を取る。

仲良く手を繋いで森を歩くその姿は、若い夫婦とその子にしか見えなかった。

第十五話「魔法使いと精霊の評判」

「よし、皆の衆、飲み物は行き渡ったかの」

村の広場の中央で、大きな焚き火を囲んで皆が村長の言葉に耳を傾ける。

クリスとフウリ、フィリスは村長と向かって立っている。

「それでは。森に巣くっていた強大な魔物を倒していただいた精霊さま方に感謝致します。ありがとうございました」

村長に続いて皆が口々に感謝を述べる。

やがて、それが静まると、また村長が話だす。

「そして、その精霊さま方の祝福を運んでくれたクリスにも感謝を
！」

こちらは罵声混じりの感謝が飛ぶ。

「それでは、精霊さまと森の恵みに感謝し、乾杯！」

村長の音頭で皆がコップを掲げ、中身をあおる。

そこらかしこでおいしそうな匂いと共に料理が振舞われる。

そして、精霊二人を見た村人から様々な反応が飛び交う。

フウリを見た村人たちは・・・

「くそ！まじで美人じゃねえか！」

「あの容姿で家庭的・・・！圧倒的じゃないか！」

「おい、なんだあのスタイルは。人間とは思えない」

「精霊さまだろうが！しかしすごいな・・・」

「あの容姿で罵倒してくれるのか。天国じゃね？」

「それがクリスと契約してるだど・・・」

「これは制裁を加えないといけないな、色本の件を含めて」

「我ら、トリエ村独身貴族を敵に回したこと、後悔させてやる」

「着てる服も綺麗よねえ」

「肌も真っ白、すべすべしてそう」

「髪の毛も真っ白で長くて綺麗だわ」

「スタイルも良すぎ。何か秘訣とかあるのかしら」

「私、さっき目が合ったわ！きつと今夜呼ばれるわ！」

「それは私を見てたのよ！お風呂に入っておかないと！」

「っていつか、目も綺麗ね。水色できりっとしてて」

「お姉さまって呼びたいわ」

そして、フィリスを見た村人たちは・・・

「お父さんって呼ばれたい！」

「俺はお兄ちゃんがいいな」

「年齢考えろ。わしはおじいちゃんだな」

「あれが・・・天使か・・・」

「おい、精霊さまだつてさつきから言ってるだろうが！しかし天使と言われても違和感がないな」

「あの子もクリスと契約してるんだろ・・・くそ！俺も魔法使いになる！」

「お前二十五だろ？あと五年辛抱しろ。しかし、これはトリ工村お兄ちゃんと呼ばれ隊が制裁行動に移らないといけなくなるな」

「クリスお前はいい奴だったよ、しかしお前の精霊がいけない。可愛すぎる」

「なにあの子！お人形さんみたい！」

「髪の毛真っ赤でふわふわしてるわ、顔を埋めたい」

「肌も白くて、もちもちしてそう！」

「目も真ん丸よ。可愛いわぁ」

「こつちをじいっと見てたわ。私のことが気になるのかしら？」

「後ろの焚き火を見てたのよ。火の精霊なんて、どんな怖いものか
と思ったらあんな可愛いなんて、お持ち帰りしたいわ」

「服も似合ってるわねえ、どこか貴族のお嬢様みたい」

「貴族さまなんて見たこと無いけどね。精霊さまのほづが百倍可愛い
と思うわー！」

等々、皆ヒートアップしていく。

しかし、当の本人たちは我冠せずと料理を食べている。

フィリスはクリスの膝の上で、出された料理を口一杯に頬張っている。

左隣では、フウリがクリスに酒を注いでいる。

右隣では、リリイがクリスを質問責めをしている。

「結局、五年も何してたの？」

リリイは噂でクリスの話を聞いたのだが、木の棒を振りまして年下の子供たちと遊んでいたクリスが印象的で、どうにも現実感が湧かず、同じ質問を何回か繰り返していた。

「おつとで、まほうの、おべんきょうを、してたんだよ、ふうりも、そのときに、けいやくしたんだ」

そんなリリイにクリスがゆっくりと答える。

「な、なんでそんな喋り方なの！？」

「なんでって、それはもちろんリリイにも理解ができるようにだよ？」

さも当然のようにクリスが言う。

「普通の喋り方でも理解できるよ！？」

「じゃあ、何度も同じ質問をするな」

呆れたようにクリスは言う。

「だ、だって！あのクリス君だよ！？村で一番訳の分からない行動をしてたクリス君だよ！？それが、それが！うがー！」

何かに耐えがたかったかのように叫ぶリリイ。

「お前のほうが訳分からんぞ？」

「にんげんの むすめ うるさくしちゃ だめよ？」

クリスのツツコミに続いて、膝の上からフィリスのお叱りが入る。

「いい子ですね、フィリス。言われたことをちゃんと守れて、他人にも注意できるなんて。こっちのサラダもおいしいですよ」

フウリがフィリスを褒めつつ、サラダをつぎわける。

「ね、ねえ、クリス君。フィリスちゃんっていくつなのかな？なんか娘って呼ばれると違和感が・・・」

リリイはそんな二人を暫く見つめてクリスに尋ねる。

「ん？精霊に時間の感覚は無いらしいからなあ。年なんて数えないだろ。まあここまで格が高いと、千年は生きてるんじゃないかね？」

クリスは、膝の上のフィリスがこぼしたサラダをつまみながら答える。

「せ、千年！？じゃ、じゃあフウリちゃんは！？」

驚愕の眼差しでクリスに質問するリリイ。

「ああ。こいつは・・・」

クリスが話そうとしたところでストップがかかる。

「主はいつから女性の年齢をぺらぺらしゃべるようになったんですか？」

すさまじいプレッシャーと共にクリスに言い放つフウリ。

「すみませんでした、フウリさま。フウリさまはいつまでもお若く美しい存在であります。それ以外のことは存在いたしません。精霊一の美女であると不肖この私、クリスは確信しております。まさに天使もかくやという清廉さでございます！」

クリスは一瞬固まると、即座にフウリに謝る。

「ふむ。そんなこと言われると照れますね。主、杯が空いてるじゃないですか。どうぞ一杯」

クリスの言葉を聞くと、嬉しそうに酌をするフウリ。

「お、ありがと。しかしフウリも大分人間らしいこと言うようになったよね」

注がれたお酒を飲みつつクリスはしみじみ言う。

「主が人間の中では浮いていたので、せめて私くらいは仲良くしてあげなくてはと思ひまして、勉強したんですよ」

フウリがフィリスの口を拭きながら言う。

「クリス君のことを大事に思ってるんだねえ。っていうか、クリス君はやっぱり王都でも浮いてたの？」

いつもならクリスが叫ぶところだが、リリイが即座に反応したため口を挟めなくなる。

「ええ、それはもう。主ときたら魔法使いの卵なのに、剣がつよすぎて、剣の弟子までいたんですよ」

「剣の弟子・・・クリス君の弟子っていうことは、やっぱり突き抜けてた？」

「いえ、それが礼儀正しい子でしたね。今は騎士になっているはずですよ」

「あはは、騎士を剣の弟子にする魔法使ってどうなのよ」

「主くらいなものでしょうねえ。あとは他にも・・・」

・
・
・
・
・

口を挟む隙が無くなり、言われるがままにして、一度夜空を見上げ、結局膝の上の娘の世話に専念する魔法使いであった。

番外一「魔法使いと傭兵団」(前書き)

感想欄見て、序盤で多そうだなあと思ったのを、動画見つつ書いて
たらできたので置いておきます。おっさんいいよおっさん。

番外一 「魔法使いと傭兵団」

その日、クリスは魔法学院の寮の部屋で目が覚める。

昨日やっと地獄の追試験が終わり、部屋に戻ったクリスは夕方に寝てしまったので、まだ早朝だというのに二度寝をする素振りを見せない。

隣に寝てるフウリをおこさないように起きようとするクリス。

「おはようございます、主。今日は早起きですね、槍でも降らせて王都を壊滅に追い込むつもりですね、さすが主です」

クリスが起き上がる前にベッドから起き上がったフウリがクリスに向かって挨拶する。

「おはよう、フウリ。いつも思うんだけどフウリは寝てるの？あとそんな大規模魔法、俺の寝起きで使えたら不便しないんだけどね」

クリスはいつも自分が起きる直前に起き上がるフウリに疑問を投げかける。

「私は出来た精霊なので主より遅くねて主より早く起きてるんですよ。あと、主がご希望でしたら、槍ではなく刃なら無数に降らすことができますが、どうしますか？主が早く起きたら王都全体に、主が遅く起きたら主の上でいいですか？」

フウリが首をかしげたずねる。

「おいしい！俺の寝起きにやばいもの付属させないでええ！どつちにしる俺死ぬじゃんそれ！」

クリスが絶叫する。

「ふむ、いい案だと思ったんですが。まあ折角早く起きたのですし、朝食を取ってギルドのほうへ行きませんか？」

「お、いいね。久々に依頼を受けに行こうか！やっと長期休暇だし、元気に腕を振り回してクリスが言う。」

「そうですね、主は皆に遅れて休暇ですからね」

「はい、すみません。テスト勉強教えてもらって助かりました」

「それでは朝食を取ったら行きましようか。市場なら何か食べるものもあるでしょう」

「へーい」

支度をして二人は連れ立って市場に向かった。

「クリイイイス！待ってたぞ！」

「あ、やべ。師匠に用事があつたんだ」

ギルドを入った瞬間に首に腕を回してくる竜人に、確実に厄介事が待っていると思ったクリスは、ありもしない用事を思いだす。

「おいおいおい！このベアードさまが直々に指名してやるんだ、有難くついて来い！」

「おいまで、おっさん。指名ってなんだ、おい引きずるな、待って！本当にちよつとまって！た、助けてー！攫われるうう！」

クリスがギルド職員に手を伸ばして、恥も外聞もなく助けを求めるも、職員は手を合わせて祈るだけだった。

そして、馬車に詰め込まれるクリス。

馬車の中には精鋭の傭兵団が待ち構えていた。

「よっし、ほら最後の一人だ。もう少し遅くなると思ったんだがな。こいつめ、ちゃんと早くにきやがった。さすが俺の一番弟子だな」

「お、クリスカ。おせーぞ。団長待たせるなんて、いい身分になつたもんだな！」

「ったく、お前はこのギバル傭兵団員としての心構えがなっていないな」

「帰ったら一から叩きなおすか」

好き勝手に言う馬車の住人たち。

ギバル傭兵団員は全員が竜人という恐ろしく精強な傭兵団だ。

団長のベアードはその体躯に見合った豪腕の持ち主で、身の丈以上の大剣を自由自在に振り回す。

クリスは何度かギルドの依頼でこの傭兵団と組んでいて、何故かベアードや団員たちの覚えがよく、指名で依頼を受けることも多い。

「おい、おっさん！俺は傭兵団と仕事なんて一切入れてないはずなんだけど！っていうか弟子でもなければ傭兵になつた覚えもねえ！あんたら本当に好き勝手だな！」

やっと自由になった体を振り回してクリスは叫ぶ。

「おお？フウリの嬢ちゃんに言つたはずなんだけどな」

「ええ、確かに聞きました。なので朝からギルドに誘導したのですよ主。ちなみに私が夕飯を買って帰るときにベアードから依頼を聞いたのですが、帰ったら主は寝ていたので折角ですので、長期休暇初日のサプライズイベントにしてみました」

姿を消していたフウリがすつと出てきて言う。

「おっ、そついうわけだから行くぞ」

クリスが口をパクパクしてる間に馬車が走りだす。

「まあそんな訳で依頼は簡単だ。国境にドラゴンが出た、お国のドラゴンキラーの騎士さま方は体調が悪いのかドラゴンを倒せない、だから俺たちが倒す」

馬車の中でクリスに説明するベアード。

「体調がわるいなら仕方ねえな」

「おう、戦場の水が合わなかったんだろ」

「温室育ちどもが」

「騎士団なんて名前だけじゃねえか」

騒ぐ団員。

「うるせえぞ！どうせ帝国の生ぬるいドラゴンもどきだろ。」「うち
は派手に稼がせてもらえて万々歳じゃねえか！」

そういつてクリスに向き直るベアード。

「とういうわけだから。そろそろドラゴンキラーの一つでも貰ったと
うぜ、クリス！」

クリスの肩に手を置き、楽しそうに言うベアード。

「うっさいわ！脳筋にもほどがあるだろ！？ドラゴンだよ！？くさ

「つても魔物の王者だよ！？あんたら蜥蜴とは違つんだよ！あいつら羽もはえてるしでけえし！」

ベアードの手を振りほどき身振り手ぶりで喚くクリス。

「蜥蜴だとお！いい度胸だクリス！俺らと、あの羽がついた蜥蜴どもの違いを見せてやるぜえ？なあおい！」

ベアードは団員に向き直り同意を求める。

「おう！あんな、ちょっと火が吐けるからって調子のってる蜥蜴は、切り刻んでやるよ！」

「飛んで逃げねえように、しっかり羽も切り落としてな！」

笑い声が馬車を支配し、進んでいく。

「だめだ、この脳筋ども……どうにもできねえ」

クリスは隅で頭を抱えるのだった。

結局それから馬車で数日で、国境の戦場前につく。

ベアードは軍のお偉いさんのところへ顔を出しに行き、配置が教えられる。

「軍のやつらは、敵の増援をドラゴンどもと合流する前に叩く。俺らの役割はドラゴンの排除だ。戦場に出てきた温室育ちの蜥蜴ども

を食らいつくすぞ!」

「」「」「うおおおおお!」「」「」

「くそつ、脳筋が!」

皆が気炎を上げ移動を開始する。

そして国境の前線につくと、数体のドラゴンが舞っているのが見え
てくる。

「おいおい、やっぱでかいって。俺丸呑みされちゃうって!」

クリスがドラゴンを見て及び腰になる。

「おいおいクリス、ここまで来てなんて様だよ!」

団員がクリスをちゃかす。

「黙れ脳筋ども!!俺は強制参加だぞ!!」

その様子を見ていたベアードが号令を掛ける。

「よし、お前ら!あつちはドラゴンはあるがまだ騎兵は乗ってねえ。
帝国も騎兵の貸し出しまではしてねえみてえだな。連戦で護衛の数
も少ねえ。フウリの嬢ちゃんが、風である蜥蜴どもを叩き落してく

れる。奇襲を掛けて一気に叩くぞ!!」

そう言うとベアードたちは恐ろしい速さで戦場を駆けていく。

クリスもフウリに魔法を掛けてもらいベアードに追いつく。

「クリスは俺について来い!!」

ベアードは並走するクリスを一瞥して言う。

「へいへい。お供しますよおっさん!!」

ぐんぐんスピードを上げる一団。

途中で帝国の警備が気づくも、時既に遅し。

叩き落とされたドラゴンに向かって剣を振り上げる一団。

護衛が必死に防ごうとするも、それごと食いちぎる勢いで攻撃を仕掛ける傭兵たち。

と、そこでドラゴンが一匹だけ走って逃げる。

「おいおい、ドラゴンってあんな早く地べた走るんだなあ」

クリスが護衛と切りあいつつ、走るドラゴンを眺めて口を開く。

「暢気に言ってるねえで、あれ切ってこい!!」

ベアードが走るドラゴンをあごでしゃくって言う。

「くそっ！俺は団員じゃねえぞっ！」

クリスは叫びながら護衛を切り倒し、走るドラゴンに向かって行く。

「フウリ！足止めできない!？」

走りながら聞くクリス。

「きついですね、ドラゴンが飛べないように上空の空気を乱してますので」

「了解。んじゃ急ぐかね！」

魔力を使い一気に加速するクリス。

やがてドラゴンに追いつくと、勢いよく羽を切りつける。

「ぐおおおお」

ドラゴンが雄叫びを上げて倒れる。

そこで、前方にグルーモスの軍隊がこちらに向かってきているのが見える。

「おいおい、冗談じゃねえぞ！うちの国の軍は足止めもできないのかああ」

「主、ドラゴンはどれも飛べる状態ではないようなので、上空の魔法を解いて、あっちを私が足止めしますのでドラゴンを頼みます」

言うが早いか、軍隊のほうへ飛ぶフウリ。

クリスはドラゴンに立ち向かう。

「この！蜥蜴が！！倒れるやああああ」

ドラゴンは尻尾を振り回し攻撃するが、クリスはそれを巧みに避けて切りつけていく。

「硬すぎるだろ！！」

クリスの剣は鱗に阻まれ、かすり傷しかつけない。

「このおおおお！」

クリスが渾身の力で魔剣を振るうと、さっきまで鱗に阻まれ致命傷を与えられなかった剣が尻尾を両断する。

これはいけると思ったクリスは、頭をかち割ろうと剣を振り上げ飛び上がり、力いっぱい振り下ろす。

すると、頭どころか胴体まで真っ二つになって、ついでに魔剣の斬撃が敵の増援の手前まで地面を抉る。

一瞬戦場が静寂に包まれる。

次の瞬間には、敵の増援は壊走していくのだった。

遅れてきたオーカスの軍に後始末を任せて引き上げる傭兵団。

軍の陣地近くに陣取り、宴会を始める。

「我が弟子、クリスのドラゴンキラー獲得を祝って、乾杯！！」

「「「乾杯！！」」」

団員たちが密かに持ち帰ったドラゴンの肉が焼かれる中、一人いじけているクリス。

「くそつ、脳筋どもにはめられた拳句、魔法使いがドラゴンキラーとか、また学院で浮いちまう！！」

「主、もう手遅れですので、お肉を食べましょう。おいしいですよ、主が一刀両断にしたドラゴンの肉。あそこまで綺麗に切れていたのは無かったので、皆あれから肉を剥いてましたから」

「うおおおおおお！やけ食いじゃあああ！肉持って来い肉ううう！」

「おお！クリスが復活したぞ！」

「おら、酒も飲め！」

「おいその肉まだ焼けてねえぞ、こっち食え！」

「つたく、野菜も食べよ」

「祝いにドラゴンの鱗、何枚か持ってきてやったから」

「あ、俺ももってきたわ」

「俺心臓剥いてきたぞ」

「養殖物の心臓はどうもなあ」

「肉は結構うまいのにな」

「っていつか、団長なんてクリスのために目玉くり抜いてたぜ」

「うへえ。俺爪な」

錬金の材料になりそうなものをクリスの前につんでいく団員たち。

その日は遅くまで宴会が続き、翌朝に王都へと戻る傭兵団。

「くそ、おっさんの依頼は金輪際つけねえし!!」

爪やら鱗やらがはみ出てる大きな袋を抱えて膨れっ面のクリス。

「おいおい、そう言うなよ。今回も生き残ったじゃねえか」

しみじみとベアードが言う。

「おかしいだろうが！…学生が町で拉致されて気づいたら生き死に掛けて戦場駆けずり回ってドラゴン退治とか普通ないよ！？」

「がっはっは。いい経験できただろ！！また行こうな！」

「そのピクニックにでも誘うような軽いノリをやめるおおおおお
おお」

馬車の中で魔法使いの魂の叫びがこだました。

番外一「魔法使いと傭兵団」(後書き)

最終結果

複数書かれてた方のは、一番上のを集計しました。

ドラゴン	3票
師匠	3票
フウリ	2票
リリイ	1票
王様	1票
木の棒	1票
闇討ち	1票
トライン姫	1票
貴族	1票
弟子	1票
父	1票

でした。

明日は師匠を。

番外二「魔法使いの相棒」(前書き)

仕込んでおいたのさ！

アクセス解析なるものを見たらお昼時にアクセスが跳ね上がるようなので、書き貯めていたやつを予約投稿してみました。やっぱり昼休みに携帯で読みますよね！

少しでも楽しんでいただければ嬉しいですが、この話はいつもとノリが違うので注意してください。

番外二「魔法使いの相棒」

遙か昔、世界は魔法技術の発達により栄華を極めていた。

ある大陸で、人々は戦争を繰り返し、やがて大きな一つの国家となった。

しかし彼らは、それだけでは満たされなかった。

別大陸に侵攻するための、更に強大な力を求めた。

そしてその結果、世界を揺るがす出来事が起こった。

彼らは力を求めるあまり、魔界との間に扉を作り、それを開いたのである。

出てきた悪魔たちは、力に目の眩んだ人間を狡猾に騙し、世界での自由を手に入れ、人々を攻撃した。

悪魔は魔力食いを作り、大陸のあらゆる生物の魔力を集め、その力で魔物を創造した。

悪魔と魔物によって大陸は滅ぼされた。

そして、悪魔と魔物は別大陸に侵攻した。

別大陸では、悪魔召喚の地から逃げ延びてきた人々によってその地で起きたことが伝えられ、対策が練られた。

天界への門を開き、天使を呼び出したのである。

天使は人々の願いを聞きいれ、力を貸した。

天使は精霊を創造し、魔物に対抗した。

天使と悪魔、精霊と魔物の力は拮抗した。

しかし、魔物の中の知性の高い種族が、悪魔を裏切った事により拮抗は破られた。

とうとう、天使と精霊は悪魔と魔物を退けたのである。

しかし、まだ悪魔召喚の地には魔界との扉が存在していた。

悪魔との戦いで疲弊した天使には、扉を破壊するだけの力が残っていなかった。

人間、精霊も同様にほとんど力が残っていなかった。

その状況を打開するために、人間は魔界の扉の技術を応用し、別の世界から力を持った人間を召喚する扉を創り上げた。

そして扉は開いた。

扉のある神殿の中央には、奇抜な格好をした人間の女が立っていた。

短い腰巻の割に、上はしっかりとした出来の服を着、髪と目が真っ黒な特徴的な女だった。

女は最初、混乱した様子で喚き散らした。

しかし、人間の王自らの説得と説明によって状況を理解すると、元の世界に自分を返すことを条件に扉を破壊することを承諾する。

女のために人間の王は、天使から与えられた知識と、それまでの魔法技術を融合させ、聖剣を作り渡した。

女は、恐ろしいほどの魔力を有し、四大精霊と契約し、聖剣と共に悪魔召喚の地へと旅立った。

かの地で女は、密かに生き残った人間たちや、知性のある魔物、また不思議な術を使う男の力を借り、とうとう城の中にある魔界の扉の前まで辿り着いた。

そこには、初めて世界に渡った悪魔、魔王がいた。

魔王と女の戦いは苛烈を極めた。

精霊たちの力もつきかけ、女もまた魔力も体力も使い果たそうとしていた。

女はこのままでは勝て無いことを悟り、最後の賭けにでた。

自分目掛けて聖剣を振り下ろたのである。

女は王から聖剣を渡されたとき、聖剣は切ったモノの力を得ることができると聞いていた。

自分がこの世界を救うことができる力があるのなら、聖剣にそれを

吸わせれば魔王を倒せると考えたのである。

そして聖剣は女に突き刺さり、光を放ち女を飲み込んだ。

女の意図を正確に読み取った風の精霊は、透かさず風を操り聖剣を魔王に突き立てた。

魔王は女の前に敗れ去った。

残った門を、精霊たちは自らの身で塞いだ。

風の精霊だけは、このことを伝えるために聖剣と共に、女を召喚した大陸へと戻った。

そして、風の精霊は事のあらましを伝えると、女の魂までも食らった聖剣を王に預け、彼方へと飛び去って行った。

王は女の死を悲しみ、聖剣、魔界の扉、天界の扉、異世界の扉に関する全ての知識を封印し、この悲劇が二度と起こらないようにした。

女は勇者と呼ばれ、その偉業は長く語り継がれることになる。

聖剣は、長くに渡り力を封印された状態で、代々の王に受け継がれていったが、やがて歴史の闇へと消えていった。

そうして、あるときは屋敷に飾られ、あるときは魔物を切り、あるときは人を切った聖剣は、ボロボロになって武器屋の樽に入れられていた。

その聖剣を一人の男が掴みあげた。

男は嬉しそうに店主にお金を払うと、聖剣を貴族の屋敷へと持っていった。

その後、男はボロボロだった聖剣を綺麗にし、いつも腰にさげるようになった。

そして聖剣はまた様々なものを切った。

ゴブリンやオーク、ドラゴンや亡霊、長い時を経て生き残っていた悪魔も切った。

聖剣に意思はない、しかし女の魂だけはずっと残っていた。

ただ、絶望の中に希望を見出した人々を守りたかった勇者の魂だけが。

その魂が、今の聖剣の主にかすかに反応するのだった。

「ん？なんか魔剣から聞こえた気がする」

「何を言ってるんですか、主。魔剣はあくまで魔剣です、しゃべるわけ無いでしょう？いくら友人が少なく寂しいからと言って、魔剣にまで期待するのはどうかと思います。頑張ってもしゃべりだしませんよ？私との会話で我慢してください」

「と、友達くらいいるよ!? まあフウリとの会話は楽しいけど。そうじゃなくてだな、なんかこう語りかけてくるような、そうでないような」

「主、何度も言いますが、それは幻覚、幻聴、幻です。気のせいです。もし本当だとしても、それは呪いというものではありませんか? だとしたらあまり寄らないでくださいね、こっちにうつりそうです。あと、私も主との会話は好きですよ」

「の、呪いなんてあるのか!? 師匠に見てもらいに行こう! あと、会話はもう少しお手柔らかにお願いします」

「ふむ、お師匠さまなら何か分かるかもしれませんね。まあ十中八九、主の寂しさからくる病だとおもいますが。おっと、柔らかくでしたね。主、可哀想に、頭を患ってしまったて・・・大丈夫、私がついてますからね。いざとなれば主の頭の中身を一回綺麗にしますの
で」

「やさしいけど、根本的に間違ってる! そしてさらりと怖いこと言うな! あとその慈愛に満ちた視線やめて!」

「わがままな主ですね、とりあえず師匠の家に行きますよ」

「はい・・・」

とぼとぼと歩きだす今の主の腰で、聖剣がかすかに震えるのだった。

番外二「魔法使いの相棒」(後書き)

ということ、これが真ヒロインさ！永遠に未実装ですが。
ツンギレ系ヒロインです、ツンツン突いて、ばっさりキレます。
本編でも出所不明で変な力を持つてるミスティアスウェポンであり、
お役立ちアイテム兼主人公の主な攻撃手段として活躍してるのに、
あまりの人気のなさに咽び泣いて、書き貯めてたやつから引っ張り
出しました。

番外三「魔法使いの師匠」(前書き)

アンケートでドラゴンと並んで多かった師匠の話です。

番外三「魔法使いの師匠」

日も暮れてきて、オーカス魔法学院の教師にして古代魔法の使い手、遺跡のスペシャリストであるフェンリー・アスクルクは、王都近郊の遺跡の調査をして家に帰る途中だった。

彼女の家は、代々宮廷魔法院に勤める貴族の家柄で、実際彼女の父や兄も勤めている。

しかし、彼女は遺跡をこよなく愛し、両親の持ってくる縁談の話をことごとく断って、学院で教師をしつつ、遺跡や古代魔法の研究をする毎日を送っている。

本当にたまにある、断れないお見合いには行くのだが、相手が彼女の容姿を見て戸惑うことが多い。

いき遅れのおばさんとの見合いかと思つたら、百四十センチに届かない身長、メガネが似合う少女がそこにいるのだから、当然の反応である。

見た目は若い、というよりも幼いと表現できるほどなので、見合いで気に入られて結婚なんて話もありそうなのだが、如何せんフェンリーは見合いの場にありがちな趣味の話題への食いつきが半端ないので、相手を遺跡愛でノックアウトしてしまい、結果見合いの戦績に白星がつく事はない。

フェンリーにしてみれば、実家が断り切れない見合いだから受けるだけで、向こうから断ってくれるなら大助かりというふうにはか思っていないのだが、親はいい加減結婚してほしいと思っている。

「ふう、少し遅くなってしまいました。まさか空に浮かぶ島の記述があるなんて……」

ぶつぶつと今日の成果を独り言でまとめていくフェンリー。

前も見ずに歩いていて、何かを踏みつける。

「ぐえ」

フェンリーの足元から聞こえる奇声。

「ぐえ？」

フェンリーは首をかしげて足を上げると、そこには木の棒を持った少年が倒れていた。

「え！？い、行き倒れですか！？大丈夫ですか！？」

フェンリーは膝をついて子供を揺らす。

「お、お、お、お、世界が、ゆ、れ、て、る」

やがてぐったりする少年。

「ああああ、大変です！どうしたら！！」

おろおろするフェンリーだが、少年のお腹から盛大な虫の音が聞こ

え、落ち着いて自分の体を魔力で強化し、少年を家に運ぶことにする。

「ぬぐう、飯の匂いがするっ」

ゾンビのように、ベッドから這い出て匂いのするほうへ移動する少年。

「ちょ、ちょっと待ってください」

ベッドの脇にいたフェンリーが慌てて止める。

「ぬ、俺に止めを刺した幼女じゃないか！」

少年がフェンリーを見て声を上げる。

「幼女じゃありません！あなたよりずっと年上ですよ！」

フェンリーが怒る。

「じゃあいくつだよ！」

少年もむきになって聞く。

「女性に年齢を聞くなと習わなかったのですか？」

フェンリーが嗜めるように言い放つ。

「なんという理不尽・・・圧倒的理不尽」

少年は俯いてつぶやく。

フェンリーは、メイドに用意させたご飯を少年に与え、落ち着いたところで自己紹介と事情を聞いた。

「クリス君は、騎士団に入るために王都まで来たんですね」

思案顔のフェンリー。

「おうとも！トリエ村騎士団の団長さまだからな！王都の騎士団にもきつと入れる！」

自信に満ちた顔でクリスが言う。

「と、トリエ村から一人で来たんですか！？道中魔物はどうしたんですか！？」

驚愕の眼差しをクリスに向けるフェンリー。

実際は王都から周りの村々までしっかり街道が整備されていて、危険な魔物は排除されるのだが、繁殖力の高いゴブリンなどは、定期的に駆除してもすぐに湧いてしまうので、子供一人で歩くには危険すぎるのだ。

「この聖剣があれば魔物なんて一発さ！」

そんな驚愕を他所に、木の棒を掲げ聖剣と言つてのけるクリス。

所々魔物の血らしき跡がついていて、フェンリーもクリスを運ぶときに放置しようと思つたのだが、意識の無いクリスが頑なに離さないで仕方なく一緒に持つてきていた。

「ついでに弓もあるし」

こっちは作りのいい弓なのだが、クリスにとっては聖剣のおまけのようだ。

「いやいや、それだけで子供が一人で街道を……ん……？」

クリスをじっくり見ていたフェンリーが、おもむろに立ち上がると更に近くで観察する。

「あれ？君魔法使えるんですか？」

微弱な魔力で体を強化しているように見えなくも無いクリスに質問するフェンリー。

「え？魔法？」

フェンリーの言葉に首をかしげるクリス。

それに対して、研究者の魂に火がついたのか激しく質問を繰り返すフェンリー。

結論を言うと、クリスは無意識に魔力による身体の強化を使っているようだった。

普通はありえないことなのだが、クリスが嘘を言ってるようには見えないフェンリーは、珍しく強引に自分を納得させる。

そもそも、そんな微弱な魔力での強化だけで、子供が王都まで魔物を倒して歩いてくるなんて、到底無理なのだ。

クリスに、何か言いよつたの無い理不尽なものを感じ取ったフェンリーは研究者魂を引っ込める。

しかし、そんな理不尽なものを感じる少年に少しやり返してやりたいたと思つたフェンリーは、自分がおもっているより強烈な一撃を少年に見舞つた。

「知ってましたか？騎士団つて、貴族の出じゃないとよつほどのことが無い限り入れませんよ？」

実際、平民で入ろうとすれば、戦場で目覚ましい功績を上げるか、それこそドラゴンを倒せるほどの実力がいる。

天使のような笑顔で言うフェンリーを見て、一瞬目を見開き、次いで呆然とフェンリーの顔を見るクリス。

さすがに可哀想になつたフェンリーはフォローをするも、クリスが再起動する様子を見せない。

どうも、クリスにはクリスなりの深い事情があるようだと思つたフ

エンリー。

それから数時間かけて、やっと動き出したクリスに、フェンリーはあることを心に決める。

「クリス君、折角魔力を無意識にでも使えているのです。魔法使いになってみませんか？私が一からしっかり教えますよ？」

見た目少女の魔法使いの慈愛に満ちた言葉に、魔法使い未満の少年は、なぜか母を思いだし、泣きながら頷くのであった。

それからというもの、フェンリーの周りにはぎやかになった。

なんせクリスは何をしでかすか分からないびっくり箱のような弟子である。

いろいろな事件を引き起こし、巻き込まれ、中には死ぬんじゃないかと思うことも多々あったのに、そのたびにしっかり生きて、フェンリーに何かしらの研究材料を持ってくるのである。

その後始末はフェンリーに回ってくるのだが、なぜかフェンリーはそれを楽しく処理してることに気づいく。

「子供がいるとこんな感じなのかな」

そう呟き、結婚もいいかもと思うフェンリーだった。

そして、フェンリーに弟子が出来てにぎやかになったところも一つある、国の魔法関係機関だ。

そもそも、古代魔法の数少ない使い手でありながら遺跡研究ばかりし、弟子を取らないフェンリー・アスクルクが弟子を取ったのである。

なまじ名門貴族の出であるために、学院も魔法関係者も弟子を取れと言いつらかったので、その弟子取りに喜んだ。

しかし、いざ箱を開けると、その弟子は破天荒すぎた。

あのフェンリー・アスクルクの弟子がよりにもよって冒険者ギルドに出入りする、それだけで関係者は卒倒する光景だ。フェンリーの弟子ならば、ただ肅々と魔法学院に通い、卒業すれば宮廷魔法院には入れるのだ。それが彼らの弁で言う、二流三流の集うギルドになど出入りするなんて、ということである。

そして、その弟子は遺跡を崩壊させかけたり、崩壊させたり、傭兵紛いの仕事をしたり、あまつさえドラゴンキラーの称号を国から授与されている。ドラゴンの鱗は非常に抗魔力に優れ、人間の魔法ではまず倒せないのにだ、どうやって倒したかなんてのはそれまでの所業で明確である。

明らかに魔法使いとして間違っている、それが国の魔法関係者の結論であった。

どうにかクリスの方向性を修正できないかと魔法関係者は考えた。

しかしクリスは、高位の精霊と契約しており、フェンリーの弟子で

もある、そしてなぜかクリス自身変な人脈を形成しており、手出しができない爆弾と化していた。

もう卒業を待つて取り込むしか無い、魔法関係者はそう結論付けた。

そんな爆弾が今日も剣を下げて王都を闊歩する。

「師匠！めずらしい本もってきたよ！」

「あら！ありがとうございます、クリス君。けど、いつも思うのですが貰っていいのですか？」

「なんて言いつつ既に手が伸びている件」

「えへへ。おお！これは面白そうな本ですね！！どこで手に入れたのですか！？」

「連休中に遠出して、その行商人から買ったんだ。そのあと聖王国まで行ってたから少し遅くなったけど。安かったから気にしないでいいよ！」

「おおー！ありがとうございます！早速読まさせていただきます！ところなんですが・・・聖王国ですか・・・」

「おっと、これからフウリとデートだったんだ」

「あの風精霊さんと仲良くやっているのは良い事ですが、逃げない

でくださいね。聖王国といえば、最近、姫さまに無礼を働いた賊の手配書が回ってるようなのですが、人相書きはありませんでしたが、特徴がクリス君に似ていますね、身に覚えありませんか？」

「無礼なんて働いてないし！！ただちよつと羽・・・ハッ！」

「ほう？ただちよつと？なんですか？」

「くっ、あばよ師匠！」

「待ちなさい！！！」

王都にじゃれあつ師弟の声が響くのだった。

第一章 エピローグ

宴が終わり数日がたった。

その数日の間に、クリスの周りではいろいろあった。

宴の後、クリスがフィリスを連れて家に戻ったことで一騒動あった。

「お義母さま、この子は主と私の子供でフィリスと言います。さあ、フィリス、お婆ちゃんに挨拶しなさい」

フウリがフィリスを促す。

「お婆あちゃん？」

フィリスがマリアンを見、フウリに向き直って聞き返す。

「そうですね、お父さんのお母さんなんです」

フウリがやさしく教える。

「お婆あちゃん よろしく おねがいます」

ぺこりとお辞儀付きで挨拶するフィリス。

「か、かわいいわ……。何かあったらお婆ちゃんに言っただよ！」

一瞬で骨抜きにされるマリアン。

「母さんが婆ちゃんってことはジヨシユは叔父さんか。しかしそもそも俺の子供だと、どうしてこうなった・・・」

疑問がぶり返してきたクリス。

ちなみにジヨシユは既に酔いつぶれて、兄が部屋に運んだ後である。酔いつぶれた村人は基本放置なのだが、なんだかんだと弟に弱い兄である。

「主、何を言っているのですか。この子は主と私の子供です、しっかり認めてください、往生際が悪いですよ」

「あなた！こんな可愛い子を前にしてよくそんな事が言えるね！表出な！再教育だ！」

マリアンとフウリが結託し、クリスを責めたてる。

「おとうさん ふいりす こども いや？」

フィリスがただ見上げてくる。

「そんなことあるわけないじゃないか！！お父さんはフィリスの味方だからね！世界を敵に回してもいいよ！？」

即座に方向転換するクリス。

「さすが主です。家族で新しい世界を作りましょう」

「なんで一度更地にすること前提!？」

「私は綺麗好きなので。しかし、こうなると主のベッドは少し手狭ですね、どうしましょうか」

「綺麗好きが高じて世界を更地にするのはやめてください……。ベッドはフウリが浮いて寝ればよくね」

「何馬鹿なこといつてるんだい、あんたは。ベッドならウルバのが私の部屋にあるから、持っていつてくつ付けな」

マリアンが口を挟む。

「さすが、お義母さまです。早速運ばさせていただきます、主が」

「あはい……」

酔っているのか、よろよろとマリアンの部屋に向かうクリスだった。

翌日、叔父さんと言われて苦悩するジヨシユの姿があったとか……

フィリスはマリアンによく懐き、一緒に寝ることさえある。

そのときは、ベッドが二つあるクリスの部屋では、なぜかベッドの一つが空いているようだ。

ジヨシユは畑仕事に精を出し、クリスも手伝おうと思ったのだが、弟の畑を手伝う兄の図を想像し躊躇する。

結局、得意の錬金で村の農具や生活用品などを修理して回ることにするクリス。

村人たちは、ここにきてやっとクリスが魔法使いだということを認識する。

「クリ坊、本当に魔法使えたんだなあ」

「俺はてっきり嘘かと思ってたぜ」

「っていかフウリ様とはどういう関係だ!？」

「むしろ、フィリスちゃんを俺に下さいお義父さん！」

回る所々でいろいろ言われて、そのたびに叫ぶクリスが見られた。

子供たちも面白がってクリスの後をついてくるようになり、ついだと村長に頼まれたクリスが健全な遊びを教えたりしている。

「いいか、的から目を逸らすなよ。しっかり狙いをつけるんだ。一番的に当てた数が多い子には豪華景品があるぞ！」

子供用の弓を作り、皆に扱い方などを教えているクリス。

「子供を物で釣ろうとするなんて、さすが主です。しかし、あの吸血鬼の前例もあります、あまり多用しないほうがいいですよ」

横からフウリが現れる。

「あ、フウリ姉ちゃんだ」

「姉ちゃんも一緒にあそぼー」

「おっばいさわらせてー」

「俺が一番弓うまいだぜ」

「一本も的に刺さってないくせによく言うな！」

「お前だって刺さって無いだろ！」

「矢はずしちやいけないときに当てればいい、そう、意中の女を射止めるときだけな、って父ちゃんが言った」

子供たちが騒ぎ出す。

「物で釣るとか人聞きの悪い事言わないでくれる！？少しでもやる気をださせようとしてるだけだし！しかしあのちびっ子吸血鬼はちよっといじめすぎだな、元気にしてるかねえ。それとおっばい言っただやっ、後で個別に特訓な。それにお父さんの迷言を暴露した坊主、そっとしておいてやれよ、お父さんもきつと後悔してるからさ・・・」

このように、クリスが無職ライフを堪能する一方で、フウリは村の娘たちとよく話をしていた。

フウリはクリスのせいなのかかなりの水準で世間を把握しているので、娘たちが話を聞きたいとせがむのだ。

流行の服の話をしたり、読み物の話をしたりと、精霊らしからぬ引き出しが多いフウリは、面白おかしく話すのでよく盛り上がっている。

「ところでフウリさんは、クリスのどこが気に入ったの？こう言っちゃなんだけど、変わってるじゃない？彼」

「あら、その変わっているところも魅力的なんですよ。長年生きていると、変わったものに興味がでてくるんです」

「ええ！フウリさん若く見えるのに！」

「あらあら、いけませんよ。年齢は秘密です。それに主はああ見えて結構情熱的なんですよ」

「たとえばたとえば？」

「あれは、パーティーのメンバーが遺跡につくまえに脱落してしまい、主と私だけで遺跡に潜ることになったことがあったのですが、ちよつとしたミスで主が呪いにかかって私との契約が切れそうになったんです。そしたら主ったら、私との契約を維持するために呪われた自分の腕を切り落とそうとしたんですよ」

「きゃあ！クリス君勇前ね！」

「腕が無くなってもフウリさんと一緒にいたかったのねえ」

フウリがそんな感じで村娘たちと親交を深める中、リリイは森に入った罰としていつも以上の畑仕事をしていた。

「クリスマス君が帰ってきたのに、ほとんど話す時間がない！フウリちゃんの話も聞きたいのに！うがー！！」

少女の叫びが広い畑に響き渡った。

こうして、魔法使いは故郷に平穏を取り戻し、自分もまたその平穏を楽しんだ。

そう、つかの間の平穏を。

番外四「魔法使いと幼馴染」(前書き)

オチに使ってしまったリリイの株を上げるために。

番外四「魔法使いと幼馴染」

リリイは、子供たちに弓を教えるクリスを見て、昔のことを思い出す。

小さいころ、リリイとクリスは、そこまで仲がいいと言うわけではなかった。

今でこそ、クリスとの仲をしきりに聞いているリリイの両親だったが、昔はいたずらばかりして、騎士になると夢ばかり言っているクリスを、娘にあまり近づけようとしなかったからだ。

リリイも、クリスのことをいつまでもいたずらをしている子供と思っており、そこまで関心も持っていなかった。

そんなリリイがクリスを意識したのは、ある晴れた日のことだった。

リリイは今と変わらずお転婆で、面倒見の良い少女だった。

その日、妹のユリイが風邪をひき、いつもは一人で行くのを禁止されている森へ、りんごを取りにいったのだ。

りんごを取って意気揚々と帰ろうとしたリリイは、茂みから近寄る魔物にようやく気づく。

しかし、気づいたときには魔物はリリイの目前まで迫っていた。

恐怖に目を瞑るリリイ。

そこに風切り音と共に奇声があがる。

「ひゃっはあ！！今晚の肉ゲットだぜえ！！」

その奇声の主であるところのクリスは、矢で頭を貫かれた魔物を掴みあげる。

そこで、へたれこんでるリリイを見つける。

「あ、あれ？これ、もしかしてお前の獲物だった！？」

獲物を横取りしたかもと焦るクリス。

しかし、ショックで口からうまく言葉が出ないリリイ。

仕舞いには泣き出してしまふ。

「おおい！泣くな！こいつ上げるから！な？」

頭を矢で貫かれた魔物をずいっと差し出すクリス。

それを見てより一層泣きじゃくるリリイ。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図である。

数分後。

なんとか落ち着いたリリイにクリスが話かける。

「だめじゃん、一人で森入ったら」

偉そうにクリスが言う。

「クリス君だって入ってるじゃない！」

真っ赤な目をそのままに反発するリリイ。

「俺はほら、これがあるし」

弓を掲げるクリス。

「けど、大人と一緒にじゃないと入っちゃだめなのはクリス君も一緒でしょ」

すぐにリリイがクリスの自信を打ち砕く。

「よ、よし、お互いこのことは内緒にしよう。すぐ森から出よう」

クリスが慌てて言うと、リリイの手を取って歩き出す。

手を繋ぎながら、リリイはいろいろな話をクリスとする。

クリスの話は、いたずらの自慢話を中心だったが、面白おかしく話すクリスにリリイは妙に惹かれてしまった。

結局、帰ってから二人は、それぞれ手に持っていた物で、どこに行っていたか判明し、こっぴどく叱られることとなる。

それから、クリスとリリイは時々会っては会話するようになる。

しかし、それも長くは続かず、クリスはある日、村を出て行った。

何も相談せずに出て行ったクリスに最初腹が立ったリリイだが、段々心配になってくる。

その心配も過ぎると、あのクリスだしそのうちひよっこり帰ってくるだろうという、妙な信頼がリリイの中で生まれた。

それからリリイは、クリスの手下だった子供たちの面倒を良く見るようになる。

「リリイ姉ちゃん、よくこっちくるけど友達いないの？」

「しかたないなあ、リリイ姉ちゃんは。ほらりんごあげるよ」

「おい、リリイ姉ちゃん、俺たちはトリ工村騎士団なんだぜ。カッコイイだろ」

「将来お嫁さんにしてあげてもいいよ？」

「スカートめくっていい？」

「姉ちゃん、そっちはあぶないって。初代団長が畏放置していったから」

「おい、言ってる傍から姉ちゃんが罠にかかった!」

「なんとという一本釣り」

「スカートをめくる前に姉ちゃんが自ら逆さづりだと・・・」

「サービス精神旺盛すぎる」

「おい馬鹿いつてないで、リリイ姉ちゃん下ろさないと」

「あぶなっ!姉ちゃん暴れるなっ!」

どっちが面倒を見るかわからないような関係が結構続いた。

それでも、年下の面倒を健気に見るリリイに、段々村の男連中は魅了されていく。

そして、面倒を見られた子供たちも惚れていく。

ここ最近の、トリ工村お嫁にしたい女性ランキングと初恋の人ランキングで堂々一位を飾っている。

ちなみに村長の息子調べである。

そんなリリイは、男連中の熱い視線に気づくことなく、今日も畑仕事に精を出して、帰りに見かけた森に行く子供たちを注意しようと

追って行く・・・

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」(前書き)

私の組織票がおっさん枠に注ぎ込まれた結果！
少し違った感じで書いてみました。

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」

その日、少し遅くなったが依頼を終えた俺はギルドへ報告し、寮へと帰るところだった。

最近の俺は、錬金にはまりだしてかなり金欠気味で、今日の飯代にも困る様になっていた。

師匠に言えばすぐにでもお小遣いをくれるだろうが、あの幼女師匠にそこまでしてもらうのは、見た目的にも気が引ける。

そもそも、幼女師匠には日々の寮での生活だけなら困らないような額を、援助してもらっている。

これは絶対返そうと思っているのだが、あの師匠がお金をただ返すだけじゃ受け取らないことは目に見えている。

なのであの遺跡マニアの嗜好をくすぐる物品で返していこうと思っている。

お金が無い、師匠に恩を返す、この二つを解決するのにギルドでの仕事はとても有効だと思う。

研究者の依頼で、遺跡に潜って魔物を倒しつつ何か珍しいものもあれば、交渉次第では貰えたり、勿論給金もでる。

なので、最近は休日になるとほとんどをギルドの依頼でつぶしている。

今回は丁度、国からの遺跡探索の依頼があったのでそれを受けていた。

国からの遺跡探索の依頼は、安全確保、確認が目的なので、遺跡に何か残っていれば持って帰ってもいいという暗黙の了解になっており、俺にしてみればとても有難い依頼である。

休日冒険者の俺がそんな旨い仕事にありつけるのはまれなので、張り切りすぎて予定にない階層まで探索してしまった。

日も落ちてきて、寮の夕飯に時間に合うか微妙だったので、ショートカットするつもりでいつもは治安がよさそうじゃないのであまり使わない薄暗い路地裏を足早に歩く。

そこに、やつぱりというか、脇道から出てきたチンピラが三人ほど道を塞いでニヤニヤ笑っているのが見える。

面倒事を起こして学院に知られるのはまずいと思い、もと来た道に戻ろうとする。

しかし、すでに後ろにも二人のチンピラが道を塞いでいるのを見てどうやってやり過ごそうかと考える。

すると、俺が考えてる間に距離を詰めてきたチンピラの肩を掴むでかい手が目に入る。

「おい、何してんだ？」

低く渋いその声は、さして大きい声でもなかったのにとっても耳に残る。

「な、なんだてめえは!？」

チンピラがうるたえながら答えてるのを見て、度胸があるなと思う。なぜなら、チンピラの肩を掴んでいたのは竜人だからだ。

俺なら絶対に一目散に逃げ出す、そう思えるほどの迫力を持った竜人だ。

そして、案の定、肩をつかまれたチンピラから異音が俺の耳に聞こえてくる。

あと少しで肩がつぶれそうだが、そう思いながらも竜人から目が離せない俺がいる。

「俺が質問してるんだ、分かるか？」

もの凄い迫力だ。

竜人がチンピラを離すと、すぐに五人のチンピラが逃げ行くのを俺は見送る。

「おう、坊主、大丈夫か？」

こちらを気遣うように竜人は言葉を向けてくる。

「あ、はい、大丈夫です」

圧倒されて敬語になってしまう。

「ならよし！こころ辺はあぶねえからな、気をつけな！」

「わ、分かりました、それでは失礼します！」

どうみても、あんなチンピラなんて目じゃないほど危ない匂いのする竜人にそんな気を使われると困ってしまう。

さっきのチンピラなら、最悪どうにでもできたが、この竜人だけは絶対に勝て無い、いや死ぬ、そんな確信めいたものが胸中を渦巻いて、俺はお礼も言わずに逃げ出してしまふ。

その一週間後、連休を使って依頼をこなすためにギルドへと向かう。

今回は、相当実入りのいい仕事をしないと、過去にないほど金欠になると思ふ。

なんせ、試験が迫っているので、試験中の休みは勉強しないとイケないからだ。

なぜ、あのとき、あの露店であんなものを買ってしまったんだと、自分の浪費癖をあれこれ後悔しつつギルドへ入る。

馴染みになっているギルドのカウンターのお姉さんに、そこらへんの話をお返してお涙頂戴、訴えかける。

すると、お姉さんは一ついい仕事があるとカウンターの奥に引っ込

んで、なにやら依頼書を持ってきてくれたので拝見する。

短期の商隊の護衛依頼だ！

この手の依頼は、大体町から町にいく間に盗賊などの危険がある場合に、長期の護衛以外に護衛を強化するために出されることが多いはず。

もちろん、道中も、帰りも危険が付きまとうのだが、その分実入りが良いので、人気があり、僕は一度も受けた事が無い。

今回はどうも、王都と近郊の町の間には少数だが盗賊団が出るらしく、その間の護衛の強化が目的のようだ。

そんな依頼書が目のある・・・！

「普通は何日も前に埋まって、当日に受けれることはまずないんだけど。受けてた五人組パーティーが急に断っちゃったみたいで、商隊の人が直前まで募集してくれて言いに来たのよ」

残り一個よ、とウインクするお姉さん。素敵だ。

「ありがとうございます、お姉さん！今度デートしましょうー！」

「あら、嬉しいわ。もちろんクリスマス君持ちよね？」

僕がどれだけ毎日金欠か知っていてこんな返しをするお姉さん、素敵すぎる。

「すみません、学院卒業後に出なおしてきます」

だがデートできるほどの甲斐性すらないのが事実なのでこつ返すしかない、無念。

依頼書に必要な事項を書いて、俺はギルドを出て門へと向かう。

護衛の依頼を受けた僕は、門の前で商隊の人と合流する。

「君で最後の一人かな？」

護衛のリーダーが確認をとってくる。

「はい、ギルドで商隊の護衛の依頼を受けてきました」

俺はギルドの依頼書を渡すと、リーダーは少し考えるようにこちらを見てくる。

「ふむ、たしかに。すまん、少し幼いようにみえたが、実力はあ
るようだ。君の剣の腕に期待しているよ」

おかしい、なぜ剣の腕なのだ。

確かに、剣を引っさげてはいるが、依頼書の必要事項の職業の欄にはちゃんと魔法学院在学と書いたはずなのに。

納得いかないものを感じながら、俺は護衛に割り振られた商隊の荷車に向かう。

列を成した商隊の前方付近にある所定の位置に向かうと、なにやら大きい影がみえる。

どうみても、一週間前の竜人さんです、本当にありがとうございます。

無意識にお金と命を天秤にかける。

何故か、あの竜人を前にすると問答無用で死ぬと思ってしまう。

「おう！なんだなんだ、坊主もこの依頼を受けたのか！さっきまで坊主に絡んだチンピラどももいたんだがなあ、何故かどっかいっちゃまって、知り合いもいなくて寂しかったぜ。ほらこっちこい、隣座れ！」

竜人が俺を見つけて、うれしそうに馬車の椅子をぱんぱんと叩くのを見て、逃げる気も失せ、隣へとむかう。

絞首刑台に上がる罪人はこんな気分なんだろうな、そう思いつつ竜人の隣に腰を下ろす。

「よ、よろしく・・・お願いします」

怖くてどもってしまふ。

「おう！そんなびくびくすんな。あと敬語もいらんぞ、やり難くしょうがない、折角短い間だが一緒なんだしな、向こうで用事がないなら帰りも一緒にどうだ？」

助けてもらっておいてお礼も言わないこんな小僧に、大らかに言う
竜人を見て、俺の直感も当てになら無いなと思い、ちよつと心を許
してしまう。

「敬語苦手だから助かるよ、この前は助けてもらったのにお礼を言
わないでごめんなさい。俺クリスって言うんだ、帰りも良かったら
一緒に頼むよ」

なんていい竜人なんだ、俺はつい口が軽くなる。

「おう、ガキはそのくらいふてぶてしいのがいいんだよ、この前の
ことは気にすんなよ！俺はベアードっていうんだ。こっちこそ頼む
ぜ！」

それから、商隊が出発し、周りを見張りながらベアードといろいろ
話をした。

周りの雇われた護衛の人たちは何故かベアードを避けているようだ
ったが……

竜人だからかと勝手に思っていたが、どうも違うらしい。

ベアードの話を書めると、ベアードは傭兵でドラゴンキラーである
とともに、傭兵団の団長であり、今回はちょうど戦場帰りで休暇だ
ったのだが、酒代が無くなったために小遣い稼ぎで参加したのだそ
うだ。

傭兵のドラゴンキラーってだけでも、冒険者は気が引けるのに、戦
場の匂いをぶんぶんさせている竜人はそれは避けられるな、と心の

中で思い、やっぱり自分のこの竜人への直感は正しかったのではないかとも思う。

まあ、基本いい人っぽく、身の丈以上の剣を持っていて実力者でもあるようなので、俺の粗い剣術をどうしたら直るかなど、俺のほうからも話題を提供してそれなりに楽しく護衛任務を消化して行く。

ちなみに先の質問への返答は「戦場でなんでも切ってれば、段々自分にあつた剣になってくるぞ！俺もそうやって身につけた剣で身を立てるからな！お前は剣の才能がありそうだし、どうだ？うちにこないか？ちよっとむさ苦しいがいい奴ばっかだぞ。まあ人族はお前だけが問題ないだろう」とのことだ。

この返答はある程度予測がついたのでどうでもいいが、後半がいただけない。ちゃんと魔法学院で学生をしていると言ったのにこの扱い、俺の中でベアードは、おっさん呼ばわりすることに決定する。

そうして、なぜだか移動中だけでなく野営中も絡んでくるベアードに、言葉遣いなんてこのおっさんは絶対気にしないだろうと段々ぞんざいな話し方になっていき、しかしそれを聞いてうれしそうにするベアードにまた少し俺は心を許してしまふ。

おっさんと仲良くおしゃべりしているうちに目的の町までもう少しのところまできた。

しかし、商隊は止まっており、護衛である俺たちは臨戦体制である。

前方にいるのはどうみても盗賊団だ。

こんな開けたところで襲われ無いだろうと、見張りも油断していたのだろうと思う。

堂々と眼前に陣取る盗賊団に、逃げることも出来ずその口上を俺たちは聞いている。

曰く、立ち向かってくるのなら殺す、後ろを向いて逃げるのならば殺す、荷と商人を置いて引き下がるのなら見逃す、すぐに返答しろ、とのことだ。

盗賊団はどう見ても依頼書の内容より人数も多く馬もいる、ここから町までは少し距離があるので増援は見込めない、こんな拓けているところで商人を逃がそうとしてもすぐ捕まる、俺じゃいい案が思い浮かばない。

皆も同じらしく、依頼人に視線を向ける。

依頼人を放り出すことも出来ず、結局依頼人に判断を委ねるしかないと思う。

が、隣からなにやら物騒な声が響く。

「なんだあ、あいつら偉そうに。全部ぶった切っていいんだろう?」

皆が啞然とする、俺も啞然とする。

その妙に響く低い声と共に、一気に駆けだす竜人をただ見送る。

我に返って、俺は防護の魔法を詠唱する。

俺が魔法使いだということをしつかり見せようと、無駄に強固な防護をおっさんと自分に向け、剣を抜いておっさんの後を追う。

その間に、他の護衛の人たちも、各々、防護の魔法を詠唱したり、剣を抜き駆けていくのが横目にうつる。

おっさんが弓矢なんて気にも止めずに突っ込んで、盗賊団の頭らしき人間を中心に周囲一帯を薙ぎ払うのが見える。

ありえない、あれはどうみてもありえないと思いつつ、俺も片手に剣を持ち、もう一方で魔法を放つ。

やっとこさ俺はおっさんの横に並ぶ。

「おう！クリス、遅かったじゃねえか！罰としてあそこのちょこまかと矢を飛ばしてくる馬鹿どもを切って来い！」

「おっさんの突進力がおかしいんだよ！なんで一回剣振るっただけで盗賊何人も吹き飛んでるんだよ！あとあそこまでどんだけ距離あると思ってるんだよ！！」

そこまで距離はないが、間の賊の数を考えると突きすすめる気がしない。

「弓があると他のやつらや荷車にかけた防護がきれたときがこわいだろ。俺にかけてる防護いらねえから。自分にその分かればいけるだろ？」

「なんで囲まれてる中で、俺が魔法使いなのをみせてやるって頑張ってかなり強く張った防護いらねえとかいえるんだこのおっさんは

ああああああ

「がっはっは。そおら行って来い！」

盗賊と切り結びながら俺とおっさんは作戦にもならない叫び合いをする。

結局、俺は防護の魔法を自分にかけておして、弓を射っている一団へと飛び込んでいく。

必死に走る最中に思う。

ああ、やっぱりこのおっさんに感じた直感の間違って無かったんだ。

おっさんは絶対これから俺に、それこそ生死を分つような厄介事を持ってくるだろうと。

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」(後書き)

投票結果

姫さま	10票
砂糖を吐く話	4票
フウリの話	3票
金髪友人	2票
会場爆破	2票

おっさん 1000票
でした。

次は姫さまの話を書いて本編に戻ると思います。

番外六「魔法使いと姫」(前書き)

投票で一番多かった姫さまの話です。

マッドなキャラっていいですね。

しかしおかしいな、この「コーヒー」、ブラックだったはずなのに・・・

番外六「魔法使いと姫」

そこは綺麗な花が並び、噴水のある庭園だった。

クリスマスとフウリは、その美しい庭園を眺めながら散歩している。

「うわぁ、綺麗だなぁ、癒される。来て良かったね」

まるでデートの定番文句のようなことを口にするクリスマス。

「そうですね。仕事で無ければもっとよかったですかね」

フウリが冷たい視線をクリスマスに向ける。

「あはい、すみません。本当に反省しています」

クリスマスが必死に頭を下げる。

「口ではなんとも言えますね？今度やったら主が何故か大事に寮に飾っている木の棒をへし折りますよ？」

フウリは冷たい視線のまま言い放つ。

「まあ、いいです。ここが綺麗なのはたしかですからね、主のお財布の中身くらい綺麗です」

フウリは相変わらず、冷たい視線をクリスマスに向けている。

「す、すこしは残してるんだ……ぜ……？」

「何かいいましたか？どうしようもない主さま」

「すみませんでした！」

なぜこんな険悪なことになっているかと言うと、数日前に遡る。

学院が連休に入ったので、王都から遠い、トライン聖王国との国境沿いの町まで護衛の依頼を受けたクリス。

依頼自体は難なくこなしたのだが、そのあと立ち寄った町で、師匠が欲しがりそうな本を見つけてしまう。

つい最近、クリスは遺跡一個潰してしまい、師匠を涙目にしてしまっている。

そんなことを考えていると、気づいたときには、持ち金のほとんどを使い本を購入していて、乗り合い馬車にすら乗れなくなってしまうっていたのだ。

そこで別行動をしていたフウリが合流。

事の次第を聞いて呆れるフウリに、謝るクリス。

飛んで帰ってもいいのだが、フウリと契約したばかりで少々不安のあるクリスは、どうにかそれ以外の方法がないか考える。

「（歩くには少し距離があるし、道中の宿代や食費もない。飛べば

結構近いのだが、契約したばかりの風精霊なので少し怖い。どうしたもんか。もう一仕事するかなあ」

クリスが考えていたところに声が掛かる。

クリスの学院の友達、アレン・コンクールである。

アレンはオーカス王国の貴族で、クリスとは学院の同級であり頭がよく、そして変人だった。

ただひたすらに、その頭に入っている知識をもとに怪しい実験を繰り返す、実験に足りないものがあれば躊躇なく親の権力だろうがなんだろうが使う人間だ。

そのアレンがクリスに、トライン聖王国に姫さまの誕生会に行くから、それについてきてちょっとした頼み事を聞いてくれれば謝礼を出すと持ちかける。

アレンは、クリスがこの町まで仕事に行くことを、本人から聞いて知っていたので、ダメもとでさがしていたのだ。

そして、クリスはアレンの考えた中でも一番いい状態で見つかった。

すなわち、クリスがお金に困って、どんな仕事でも受けてくれる状態だ。

アレンの願望通り、クリスはその仕事に飛びついた。

そして、数日かけてこのトライン聖王国聖都の王城につき、アレンがパーティーに参加しているので、クリスは庭園を散歩してゐるのだ。

フウリは、この王城に入った途端に雰囲気が悪くなった。

「どうしたんだ、フウリ？」

「すみません、主。ここは天使の気配が強いので、どうにも調子がでないんです」

「えなにその悪魔みたいな台詞」

「ふふ、主は本当に命知らずですね。調子が出なくてもこの城を吹き飛ばすくらい頑張れば出来ますよ？そうですね、そうすれば天使の気配も消えていいかもしれません」

「すとおおおっぷ！！落ち着いてくれフウリ！」

「私はいつでも冷静です。ただやっぱりこの雰囲気は慣れません。少し浮いてきますね」

「それがいいね！けど間違っても攻撃魔法はぶつ放さないでね！」

「ふふ」

薄く笑って急上昇するフウリ。

「天使の気配で調子がでないって、どんな精霊だよ」

最近契約した精霊の後姿に向かってぱつりと呟くクリスだった。

その後、フウリは戻ってこず、クリスは一人であてがわれた部屋へ戻る。

そこにはアレンがすでにいた。

「クリス、例のちょっとしたお願いなんだけど、いいかね？」

アレンが神妙に言う。

「おお、もちろん！」

クリスが暗い気持ちを払拭しようと明るく言う。

「それでは、姫さまの背中から羽を一本でいいので採ってきてくれたまえ」

しばし、部屋に静寂が満ちる。

「は？」

そしてクリスが聞き返すが、アレンは同じ言葉を繰り返す。

「え、人間に羽って生えるっけ？」

「ふむ、ここの王族は天使の血を引いてると言われていてな。特に彼女はその血が濃いらしい。噂はあったのだが、今日、パーティーでちらっとだけ見たが、羽は本当に生えていたな。ただ、ガードが固くて私には採取することができそうになかった」

どこも王族はガードが堅いか、と悔しそうに呟くアレン。

「おいまで、マッド。姫の背中から羽を筆るとか、下手したら戦争になるぞ」

「何を言っただいクリス！技術の進歩に戦争はつきものだよ！さあ、私の研究の更なる進歩のため、あの羽を筆ってきてくれたまえ！」

アレンは腕を広げ天を仰ぐ。

「本物の馬鹿がある・・・」

クリスも天を仰ぐ。

「馬鹿とは失礼だね、君より数倍頭はいいつもりだよ？」

「頭のいい馬鹿ほど性質の悪いものはないな」

「まあ、君の風精霊なら気配遮断も完璧だし、すぐ筆れるのではないかな？」

話を強引に引き戻すアレン。

「いや、あいつ調子悪くてなあ」

「なんと！それは困ったな」

あまり困ったよう見えないアレンが言う。

「明日まで待つとしよう。もしかしたら君の精霊の調子が元に戻ってるかもしれないしね」

「いやいや本当に筆る気かよ!？」

「ふははは！本当は喉から手が出るほど欲しい触媒だが、まあ無ければ無いでどうにかなる。しかしあると私は嬉しい、もちろん君も嬉しくなれる」

分かったかね？と言ってそのまま部屋を出て行くマッド。

「俺にどうしろと言うんだ、あのマッドは・・・あれで優秀でさえなければ!!--」

マッドだが優秀すぎるために、アレンを止めれるものは極端に少ない。

そのアレンにほいほいついてきた自分を呪うクリスだった。

夜。

雲が薄く広がり月明かりを隠している。

フウリがまだ帰ってこないので、心配になったクリスは庭園へと足を伸ばす。

と、そこには一人の少女が立っていた。

クリスは今日のパーティーに来た貴族かと思い、その場を立ち去ろうとする。

しかし、逃げる前に何故か少女に腕をつかまれてしまうクリス。

「待ってください」

少女が必死そうに言うので向きなおってしまうクリス。

「あー、すみません、俺はパーティーに呼ばれた貴族の従者なので・・・」

とりあえず、クリスは貴族で無いことをアピールしてみる。

「呼び止めてごめんなさい。よければ少しお話しませんか？」

潤んだ瞳で見上げられ狼狽しつつうなづくクリス。

「よかった。それでは、あなたのお国のお話を聞かせてくれませんか？」

期待に満ちた目をし、手を組んでお願いする少女。

クリスは仕方なしに、ギルドの話などをしてみると、これがどうも好評のようだった。

「まあ！空に島が浮いているのですか！私も飛んで見たいです」
クリスが空の島の話をする、少女は思いの他食いついてきた。
と、そこで雲が流れ、月が顔を出す。

月の光を浴び、まるで天使のような美しい容姿と羽を持った少女がクリスの隣に座っていた。

「（つて姫さまじゃないかあああ！ありえないよ！？なんでお付きも連れずこんなところいるのおおお！だれかたすけてえええ！）」
ムードもへつたくれもなく、クリスは叫びだしそうになる口を押さえて、心の中でシャウトする。

「どうしたのですか？」

姫さまは、クリスが口を押さえてるのをみて、顔に手を伸ばす。
それを止めようとクリスが手を出し、あまつさえ手と手がぶつかった瞬間、風が吹き二人の体が飛び上がる。

「きゃあ！」

クリスには覚えのある感覚だが、少女は混乱したようでこちらに抱きついてくる。

「大丈夫ですよ姫さま。これはさっきお話した俺の風の精霊の仕業ですから。姫さまが飛んで見たいと言ったのを聞いてたようですね」

それまで実は、敬語を使っていなかったのだが、さすがに姫さま相手だと分かった以上、慣れない敬語を使うクリス。

「あら！そんなのですか。とても良い精霊さまと契約してますのね。あと敬語はいりませんわ」

姫さまは空に浮いてることがとても嬉しいのか、クリスから手を離さないままぱたぱたと体を動かす。

「しかし夜空の旅をするにはちょっと薄着だね」

クリスはそう言うと自然な動作で上着をかけて、ついでに羽を筆ろうとするも、少しバランスを崩し失敗する。

「ありがとうございます。とってもやさしい方なのね。このまま連れ去って欲しいわ・・・お願い・・・」

うつとりとした声で言う姫さま。

「（これは高貴な少女特有の白馬の王子さま願望病か！下手な答えはまずいぞ！）」

貴族のお姫さまが、たまに本当に平民と駆け落ちして、大騒ぎになることがある。

何度か捜索に加わった事のあるクリスは、彼女らの、男ではなくその状況を愛している様子を見ているので対処に困る。

下手な事を言うと、好いている設定のはずの男にまで向かっていく

のだ。

「（いやしかしまだ軽度だ、返答を間違えなければ生き残れる！）」
クリスは引きつりそうな顔を堪えて笑みを作る。

クリスは、慎重似に姫さまに言葉を返す。

「しかし姫さま。姫さまも俺も帰る場所がある、そうだろうか？」

心の中でいつそ殺してくれと絶叫するクリス。

「そう……ですね……、けどいつかきつと迎えに来てください」

目に涙を貯めて言う姫さま。

「そのとき、まだ君が飛びたいと思っていたら、空を見上げてごらん、俺が迎えに行くから」

心でひたすら涙するクリス。

それ以上は何も話さず、ただ姫さまの部屋のテラスまで風が運んでくれる。

そしてとうとう別れの時が……

「もう行ってしまふのね、せめてお名前だけでも」

ここまで死守してきたものを、クリスはなんとか守りきろうとする。

「名前なんてものは飾りさ。君と俺がただいる、そつだらうっ。」

クリスはいろいろと捨ててまでも、それを守り通そうとする。

精神が崩壊する音がクリスから聞こえてくる。

これ以上は無理だと、テラスから自分の魔力で離れようとする。

「待って！これを私だと思って持って行って！」

そついうと、姫さまは羽を一本自ら手折ってクリスに渡す。

「私は忘れないわ！あなたのこと！あなたもそれを持って私のことを忘れないで！」

クリスはただ笑みを称えてテラスからぐんぐん離れていく。

すると不幸な事に、姫さまの大声を聞いた衛兵と王が部屋へと入ってくる。

「貴様！！どこの者だ！！」

王が大声をあげ魔法放つも、すでにかなり離れていたクリスは、なんとか逃げ切る。

結局、クリスはそのまま飛んで王都までもどることになる。

「主、なかなかいい見世物をありがとうございます。おかげで大分調子が戻りました」

「阿呆かあああ！何で姫さまを飛ばしたし！！」

「面白そうだったからに決まってるじゃないですか。あと、あの傲慢な天使どもの末裔が、空も飛べないと嘆いているのがどうにも気に障りまして。つい」

フウリが悪びれずに言う。

「フウリの思いつきで俺が犯罪者一直線だったよ？！けど調子が戻ったのはよかったね！！」

やけくそ気味に叫ぶクリス。

「主のおかげです、ありがとうございます。今ならキスしてあげますよ？」

そう言ってフウリは後ろからクリスに抱きつく。

「何か釈然としないものがあるんですが！キスはいらん！」

クリスはなんとかフウリから逃れようとする。

「照れ屋さんですね、可愛い主」

フウリはまったくクリスの言葉を聞かずに顔を近づける。

「やめろ！飛んでる最中に引っ付くな！落ちる落ちる！」

耳元で聞こえるフウリの声に怯えるクリス。

「ふふふ、落ちたくなかったら暴れてはいけませんよ、主。私の加減が間違っってしまうかもしれません」

「こわいわ！ああ！顔を近づけるな！むぐう」

動きの止まったクリスの口をフウリの口が塞ぐ。

「ふふ、可愛い主。まだ契約したばかりですが、私はそれなりに主を信用しているのですよ？キスしたいくらいには」

だから主も信用してください、とフウリは続ける。

フウリはクリスから離れる。

「すまん、最初から飛んで帰ってればよかったな」

クリスはフウリのほうを見て呟くように言う。

「少し悲しかったんですよ？主は、私にとって、あの空の牢獄から助け出してくれた、白馬の王子さまなんですから」

そつとクリスの手を握り、いつになくしおらしい言葉を口にするフウリ。

「う、本当にすみませんでした」

その様子にたじたじのクリス。

「言葉ではなく、行動で示してほしいです、主」

そう言うと、クリスの前に回り込むフウリ。

そのままクリスのほうを向き、目を瞑る。

魔法使いは意を決したように、風精霊の肩に手を置くと、二人の距離が縮まっていく……

なんやかんやあって、帰りの空の旅の途中。

「ふうむ……。フウリ、昔話でもしながら帰るかあ、考えたらついこの間契約したばかりで全然お前のこと知らないもんなあ」

少し考えたクリスが提案する。

「なんですか主、私の事ならなんでも知りたいのですか、仕方ないですね。まずはそうですね、私の嫌いな嫌いなシルフの話からしましょうか」

そう言いながらフウリが嬉しそうにクリスに後ろから抱きつく。

「最初からえらい飛ばすね！ビッグネームだよそれ！？フウリの名

前にしようとしたら怒られるし！」

フウリとクリスは、星が輝き、月が照らす夜空を進む。

「そうですね、それも含めて話をしましょう。天使に創られた私たちが……」

・ ・ ・ ・ ・

二人の関係は少しずつ変化するのだった。

その数日後、帰ってきたアレンに、黙って先に戻った事を詫びを入れに行くと、アレンは何故か上機嫌だった。

「聞いたぞ！あの王相手に大立ち回りをしたそうじゃないか！えらい騒ぎになってたぞ！犯人は分かってないようだったが、私はすぐにぴんときたよ！さすがは我が友人だ、私より狂気を孕んでいるぞ！」

その言葉を聞いて隅で丸くなるクリスだった。

そして更にその数年後、 比喩表現ではない風の噂で、 姫さまの病気も完治したことを知り、 安堵する魔法使いの姿があったとか・・・

番外六「魔法使いと姫」（後書き）

投票いただきありがとうございます。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

次回から本編更新しますが、ストックがほぼ尽きた上に年末なのでゆっくりになると思います。

今年は赤い服をきたお爺さんたちを国へ帰す仕事が例年より忙しいので、前話を含めて、誤字等ありましたら明日修正します。すみません。

第二章プロローグ

そろそろクリスがトリエ村に来て三ヶ月が経とうとしていた。

「ふう。フィリスも大分話がうまくなったよなあ」

クリスはフィリスを膝に乗せて絵本を読み聞かせていた。

「ほんとう？」

時折絵本の質問をするフィリスは、たどたどしいなりにも上手く話すようになっていた。

「おう、本当、本当。しかし平和だなあ、村の農具は粗方直し終わったし」

伸びをするクリス。

それを真似するようにフィリスも両腕を伸ばす。

「久々に平和な日々ですね、主。去年の今頃は王城に侵入してやらかしたりしてましたよね」

昼飯の後片付けを終えたフウリが、エプロンを取りながら部屋に入ってくる。

「思いださせないでくれよ！しかもやらかしたのは俺じゃないし！あの馬鹿がどうしてもっていうから！」

フィリスが落ちないように手でガードしつつ器用に頭を抱えるクリス。

「友人の頼みだからと理由も聞かずに、王城と一緒に忍び込むなんて普通じゃないですよ。付き合いが良すぎるのも考え物です。気をつけてくださいよ」

珍しく心配顔で言うフウリ。

「お、おう。なんかフウリに普通に心配されるのがこんなに不安になるなんて思わなかった」

予想外のことにクリスは本音がだだ漏れになる。

「ええ、少し注意しておいてください。何か大きな風が舞い込んできそうです」

クリスの本音を聞いて、更に不安を煽るフウリ。

「おいしい、不吉すぎる！！も、もう少し詳しく分からないの！？何か食べないほうがいいとか！鏡をどこかにおいたほうがいいとか！」

怯えたクリスはまじないにもすがる勢いだ。

「落ち着いてください主、必ずしも悪いものとは限りません。あと、主は巻き込まれるのは決定してますので、巻き込まれないように対策をしても仕方ありません。前向きに行きましょう。注意しなければいけないことは、巻き込まれたあと、主が死なないかということです」

「なんで巻き込まれて死ぬか死なないかが前提なの！？前向きじゃねえ！！！」

「ふむ。これまでの経験から避けれない運命というのが主の場合、少々多いように思えますので、今回も順調に巻き込まれるでしょう。むしろこの三ヶ月平穩だったのが不思議なくらいです。もし万が一悪いものだとしても、天使くらいならフィリスの炎と私の風を合わせれば打ち落とせますので、安心してください」

フィリスを撫でながら物騒なことを言うフウリ。

「ん、がんばる」

フィリスは拳をつくる。

「思い返せばそんな気もするけど！この三ヶ月はとても貴重だった気がしてきた！！あとフィリス、天使見つけても焼いちゃだめですよ！！」

クリスが三ヶ月もほとんど何も無く、平穩にすごすということとは、彼を知っている人物には信じがたいことなのだ。

「私は主の傍なら、平穩でも戦場でも別に気にしませんよ？あとフィリス、主を守るためなら躊躇してはいけませんよ？」

しっかりフィリスに言い聞かせるフウリ。

クリスが災いの神に溺愛されていることを理解しているので、自分の力が及ぶ範囲ならなんでもござれなのだ。

「ん、わかった」

二人の注意を聞いて、普段は天使を見かけても焼いても焼いてはダメだが、クリスが危険になったら天使を焼いてもいいと理解するフィリス。

本物の天使というのはこの世界にはもういないのだが、子孫が残っていると言われ、奇跡的な偶然で背中に羽の生えている人間もいる。

「俺は平穩無事がいいなあ。まあフウリといるのは嫌いじゃないが。つていうかさりとそんなこと言われると照れちゃう」

フウリの発言を聞いて少し顔の赤いクリス。

「主は照れ屋さんですね。そんなところもからかい甲斐があつて素敵ですよ」

フウリが面白そうに言う。

「ふいりすは？」

若干むくれたようにフィリスが二人に尋ねる。

「フィリスも私たちの可愛い子です、愛してますよ」

「もっちろん！！フィリスも好きだよ！当たり前じゃないか！よし、変な事に巻き込まれる前に国外逃亡しよう！」

親馬鹿二人は、娘を撫で回しながら愛と展望を語る。

「そしてまた厄介事に巻き込まれるんですね。あまり難易度の高いのはやめてくださいね。神クラスが出てくるとさすがの私も本気を出さないといけなくなりますよ」

「おいしい！巻き込まれねえよ！？難易度選択できるの！？神クラスじゃないと本気ださないってフウリさん何者なのおお」

「冗談です、主」

お茶目に無表情に言うフウリ。

「どこからどこまでが冗談なの！？ねえ！？」

クリスは不安が胸中を席卷し、質問する。

「さあフィリス、主はこれから厄介事に巻き込まれる準備をしないといけませんので、本の続きは私が読んであげますよ」

フウリは、クリスの膝の上からフィリスを抱き上げ、椅子に腰掛けると本を開く。

「ん、わかった、おかあさん」

フィリスは嬉しそうに膝の上からフウリを仰ぎ見て返事をする。

「俺は絶対巻き込まれないからな！くそ、どうするか。まずは情報収集か、こんな田舎じゃ情報なんて入ってこねえ、一回王都に行くか・・・」

風精霊が火精霊を抱え、本を読み聞かせる横で、魔法使いがぶつぶつと対策を練るのだった。

そして、魔法使いが対策を考える間にもその平穏を破壊する使者がトリエ村へと近づいてくるのだった。

第一話「魔法使いの弟子」

「ここがトリエ村か。あの人がここに引き籠もって約三ヶ月。周辺にクレーターもないし、何かが暴れた様子もないですね。本当にあの人は平穩無事に過ごしているんでしょうか・・・？」

トリエ村の前で馬に乗って佇む男が一人。オーカス王国の印が目立つ鎧を着込み、剣を腰にさげている。

男はこの国ではさして珍しく無い金髪であるが、顔は整っており、どこか品のある高級感を漂わせている。

男の名前はジョン・タリエールエ、オーカス王国の貴族タリエール工家の次男にして、王国騎士を拝命し、王子の親衛隊に所属している。

なんでも王子自らの指名ということで、貴族間でも一時期話題にあがったほどの男である。

実際は、王子の友人が弟子の自慢をよくしていたのを覚えていて、引っこ抜いただけのだが、そんなことを知らない貴族たちの間では、今年とうとう社交界に現れた王家の王子とその騎士は、ただならぬ関係ではないかという噂まである。

オーカス王国では、王族は基本的に成人するまでその存在自体が秘匿とされ、極一部の人間以外、その容姿すら知らない。

そのやっと顔を見せた王子の一番信をおいている騎士がジョンなのである。

普通、国の騎士が田舎の村に来ることなど滅多にないのだが、ジョンは自分の主である王子から命令を受けてここへ来た。

この命令に一番適任なのがジョンだからである。

やっと到着した目的地の前で、ジョンは命令を受けたときの事を思い出さず。

「おい、ジョン。お前はあいつの弟子なのだから、ちょっと面白いトラブルに巻き込まれて来い」

僕は今日、急な呼び出しで王城の中にある、王子の執務室に出向いている。

最近ではここで、王子の学院時代の親友たちや一部の重臣たちが集まって日々悪巧みが行われているので、あまり近寄りたくなかったのだが。

少しは自重していただきたいのだが、止める立場である王はあまり王子のすることに興味を抱かず、妻である王妃が亡くなってからは、後宮に通いつめていると聞く。

重臣の方々も、そんな王を放って、自分たちに都合のよい政に日々忙しそうである。中には真に国を憂う重臣の方々もいるのだが、何

を思ったのか、王子の悪巧み会議に参加しているようだ。

そんな執務室で我が主、ステイン王子がどこか楽しそうに言っているのほうを見る。

この言葉だけで、我が主が僕の師匠をどう見ているかが分かる。

「師匠はトラブル体质ですからね、危険なトラブルが向こうから花束を持って、それこそ師匠の精霊より速く迫ってきているに違いありません。心配ですよ僕は」

我が主も相当変わっている方で、あまり堅苦しい話方をすると怒られてしまうので、最低限の敬語で話をするようにしている。

まあ、師匠の友人だからちよつと変人でも仕方ない。

そして、我が師匠はというと、王宮魔法院の推薦を蹴って田舎に引っ込んだのだ。ありえない、師匠を知らない人ならばそう思うだろう。

しかし、僕は師匠が傭兵になっていないだけ、まだままだと思っ
ている。

もし、あの人が傭兵になってグルーモスにでも雇われたら本当に危
ない。

そうだったら、僕が騎士を辞めて田舎に引っ込んで畑を耕していた
ところだ。

そんな忠義あふれる僕だが、今日はなんで呼ばれたのかよく分から
ない。

無駄話をするために呼ぶような王子ではないし、何かばれてしまっ
たのか。

いやしかし、第一騎士団と揉め事を起したのは、しつかりもみ消したはずだ。

第三の連中をぼこぼこにしたあれが今になってばれたのか？

しかしあれはかなり昔だし師匠がほぼ全部やったわけだし、僕は関係ないな。

あとやばそうなのは……

「……ジヨ……ジヨン、ジヨン！」

「いえ、第五の馬鹿どもに正義の鉄槌と称して下剤を盛ったのは僕ではないです。勘違いはやめてください」

考え込んでいると王子が僕を必死に呼んでいたので、呼び出しの一番可能性の高いものを否定してみる。

「ほう？あいつらに薬を盛ったのはやはりお前か。よくやったぞ」

どこか楽しそうに目を細め僕を見て王子は言う。

さすが我が主、正義の定義が僕と同じだ。

「しかし、その件で呼んだわけでは無いぞ。ただその件についても聞かなくてはいけなくなっただがな。まったくお前はやるならばちゃんと殺るんだ。中途半端に薬を盛るなんてのはいかんぞ」

再起不能にくらい追い込まなくてはな、そう続けて言ってくる王子。

これぞ師匠の友人だ、僕の正義よりも更に固い意思をもっていらっしやる。

「はい、すみません。次からは王子のご意向に沿えるような正義の鉄槌を下して見せます」

「うむ、しつかりな。それで今日の用件だが、最近よくここに重臣や私の友人が出入りしているだろうか？」

王子は一つ頷くと、最近のこの部屋の使用状況について私に確認を取ってくる。知ってはいるが、あまり巻き込まれたく無いという僕の意味までは伝わらないのだろうか。

「ええ知ってますよ、夜な夜ないかがわしい密会をしてることですよね」

「うむ、それだ。その密会に我が一番の友人も呼ぼうと思ってな。あいつめ、まさか田舎に引っ込むとは思わなかった」

「師匠ですか。もうそろそろ三ヶ月になりますね。僕は師匠の故郷のほうから正体不明の大爆発や、天変地異が無いかといつも朝起きると見てしまいます」

王子でもあの師匠の行動は分からないようで悔しそうにしている。

しかし、弟子でもある僕もいまだに師匠はよく分からない。

そもそも、僕のことを弟子と思っているかも怪しい。

僕は師匠師匠と言っていたが、あまり何かを口で教えてもらう機会は無かった気がする。

実地で教えられることは多々あったけど。剣の師匠と言うよりか、戦場の師匠と言った感じだ。戦場でドラゴンをぶった切っておいて、本人は魔法使いのつもりなのだから笑える。

「私もそろそろ他国で問題を起してやばいことになっていないか心配だが、そんな話も聞かないので大丈夫だろう。お前が行けば、無下に扱われることもあるまい。最悪、骨だけは私自ら拾ってやる、行っって呼んで来い」

なんとも、有難いお言葉である。涙が出そうだ。

師匠とのお嫁さんがいちゃいちゃしてるかもしれないところに行けだなんて、もしその蜜月を邪魔する者だと分かったらどこからか吹くそよ風に刻まれてしまうということがこの王子には分からないのか!!

確かに師匠も怖い、しかし一番怖いのはその嫁なのだ。

「我が主のお望みとあらば是非ありません。ご命令たしかに受け賜りました」

しかし、王子の騎士としてこれ以外の答えはない。

「うむ、素早くな」

王子は膝をつき礼を取る僕の肩に手を置き、一度叩くとそのまま執務に戻るのだった。

そんな理由でジヨンは今、トリエ村の門をくぐるうとしている。

馬から降り、門のところにいる子供たちに話をかける。

「すまんが、君たち。ここはトリエ村であっているかな？」

村に看板がかかっているわけもないのでジヨンは子供たちに確認をとる。

「うお、騎士さまだー！」

「おー、かっくいいー！」

「本当だ、剣持ってる」

「あの剣高そうだな」

「兄ちゃんのは大違いだな」

「あれ所々ぼろっちい感じるもんな」

「おいだれだ、僕の将来のお義父さんの悪口言った奴は！」

「だまれ！フィリスちゃんは俺の嫁だあああ」

「おい、トリエ村騎士団の姫に対して嫁とはなんだ！」

「騎士団の掟を破ろうとするとはいい度胸だ！」

「フィリスちゃんは皆の姫、それ以外は認めない！」

「制裁だー！」

ジョンを無視して、年長の子供たちは取っ組み合いの喧嘩に発展している。

年少の子供たちは、ジョンにまとわりつき、剣を取ろうとする子ま
でいる。

あまり怒らないので年下に好かれるジョンも、ここまで躊躇いなく
子供に引っ付かれるのは久しぶりだ。

剣を必死に守りつつも、ここが自分の師匠が育った村だろうと確信
する。

少し時間を置いて、なんとかお得意のスマイルと口先で子供たちを
宥めすかし、ジョンは村長のところへと案内してもらった。

こうして魔法使いの平穏を破壊する使者がその一步を踏み出すのだ
った。

第二話「魔法使いと親子」

「よし、聖王国に行こう！あそこなら何かあっても、神さまとかが守ってくれそうじゃない！？」

フウリがフィリスに絵本を読み聞かせしてる横でクリスが声を上げる。

クリスは信じていない神にも縋りたいほど追い詰められている。

「急に声を上げないで下さい。神に祈ったらこれまでにないほどのトラブルが舞い込んでくるんじゃないですか？主には災いの神が背後霊のようにはりついてますからね。けどいいですね、聖王国。あそこは天使の末裔がいましたね。ふふ、主も分ってるじゃないですか」

本を置いてフウリは思いだしたように薄く笑う。

「てんし、やく？」

フィリスが、フウリの膝の上で首をかしげて聞く。

先ほどの会話のクリスが言った大事な部分を忘れてしまったようだ。

「ごめん、やっぱ無し。今の話無しで。俺の背後に四六時中張り付くってどんだけ暇なんだよその神さま！あと、フウリが物騒なこと言うからフィリスまで言動が物騒になっちまったたる！どうするんだ！」

クリスはちらちらと自分の後方に視線を向けつつ、フィリスの発言がフウリに似てきた事を嘆く。

「はて？フィリスもそれなりに生きていますからね。天使の一人や二人……」

フウリは首をかしげつつ語尾を濁す。

フィリスは真剣な顔つきで考えているように見える。

「なんでフィリス考え込んでるの！？そんなことしてないよね！？冗談だよね！？冗談って言って！」

クリスはフィリスの仕草を見て、昔にそんなことをしたことがあるのかと戦々恐々だ。

「冗談です」「じょうだん」

フウリとフィリスは笑いながら、お互いの手を合わせ悪戯の成功を喜びあう。

二人の声が重なるのを聞いてクリスは、本当に二人が似てきてしまったことに、ただただうなだられる。

と、そこで玄関のドアを叩く音が部屋に響く。

フィリスがそれに一早く反応して、ドアに駆けていく。

最近フウリやフィリス目当てこの家にいろいろ持ってくる客が多い。

その対応をフィリスが自分の仕事と思い、いつも誰よりも先に出ようとすることだ。

客は大抵家に上がってお茶を飲みながら話をしていくので、フウリはお茶を二つ入れ、クリスは更にうなだれ、部屋でフィリスがお客様さんを連れてくるのを待つ。

「おきやくさん、つれてきた」

「すまんの、お邪魔するぞ」

すぐに戻ってきたフィリスは、すこし自慢げにそう二人に告げ、それと同時に村長が上がってくる。

「村長が来るのは珍しいね。あとフィリスえらいぞ、将来は美人さん間違いなしだな。」

「いらつしゃいませ、村長。あとフィリスは将来、気の利くお嫁さんになる事間違いなしですね」

クリスとフウリは村長を立てて迎え、フィリスの頭を撫でる。

うれしそうに撫でられているフィリスを見ながら、クリスは極当たり前のようにに言い放つ。

「馬鹿な、フィリスを嫁に出すわけが無いだろう。俺を倒せるやつになら任せても・・・いやしかし・・・!」

「む、そうですね。最低でも主と私を倒せる程度の力を見せていた

だかないと。それで手を握る権利だけはあげるとしましょうか」

まだ見ぬ強敵をどうやって倒そうかと苦悩する親馬鹿と、娘の手を握らせるためだけにまだ見ぬだれかに命を賭けさせることを決定する親馬鹿。

「よしちよつと鍛えてくる」

「私も少し鍛える必要がありますね」

「ふいりすも」

自分が強ければ何の問題もないと結論を出す親馬鹿二人と、理解しないで手を上げて賛同する娘。

「よし、それじゃあ三人で国外逃亡だな。ということで追って来るなよ、馬鹿弟子」

そう言つて窓から逃亡を謀るクリス。

村長は慣れたもので、お茶を飲みながら成り行きを見守っている。

そして部屋の前の廊下では、居間から見えない位置に隠れていたジョンが慌てる。

ジョンは村長の家に行き、クリスのことを尋ねたのだ。

そうしたら、彼にとっては信じられないことに、来て早々に魔力食いなんてレアな魔物を倒して以降は、本当に信じられないことに平穩無事な毎日を送っていることを聞く。

思わずそれは本当にクリスという男か、確認をとってしまったほどだ。

村長によってその事実が肯定されると、ジョンは絶望する。

三ヶ月も平穩に過ごしていた師匠たちに、その平穩を壊すようなことを自分が言いに来たと知られれば、よくて師匠に逃げられる、悪くて師匠の精霊に消される、絶望の中でどうにか生き残れ無いか考えを巡らせるうちに、気づいたときには村長に先導され、クリスの家の前にいた。

村長が扉を叩くと軽い足音がして、フィリスが出てきた。

ジョンは、自分の師匠の家族構成は把握してなかったので、フィリスは師匠の妹なのだろうと判断した。

フィリスに案内され廊下を歩き、すぐに居間の入り口に辿り着き、村長はフィリスと一緒に入っていくが、ジョンは怖気づいて入るのを躊躇ってしまった。

クリスとフウリは、ジョンが家に来る大分前から、ジョンが来てい

ることには気づいてた。

正確に言えば、ジョンが村に入ったときにフウリが気づき、家の前の道を歩いてるときにクリスが気づいた。

フウリはジョンが主や村の人に直接害を成すような愚か者ではないことを知っていたので、特にクリスにそのことは告げなかった。

クリスは、ジョンが家の前に来たとき、確実に件の大きな風だと判断し、どうしたものかと頭を抱えた。

フウリは、二人の客人にお茶を用意しながら、ジョンがどんな厄介事を持ち込みに来たのか、考えを巡らせた。

こうして、魔法使いの平穏を破壊する使者は、その姿を表すのだった。

第三話「魔法使いと精霊と弟子の関係」

居間の入り口の前に、おずおずとジョンが姿を現す。

「お、お久しぶりですね。フウリさん、師匠」

挨拶の順番から、ジョンの中でどちらがより怖い存在かよくわかる。

ジョンはフウリのことを、様々な情報に精通して、人の機微にも鋭い変わった精霊だと思っており、師匠のためなら割と無茶をすることろ見てきているので、つつい恐縮してしまいがちなのだ。

そんなジョンの挨拶を聞いて、クリスは窓に向かっていた体を反転させ、今の入り口に向き直る。

「おい馬鹿弟子！お前が厄介事を運んできたことは分かっているんだ！俺の平穏な日々は渡さんぞ！！」

クリスはフィリスを後ろから抱きしめながらそう吼えると、ジョンを睨みつける。

まるで威嚇する犬のように、目を怒らせ、今にも唸りだしそうだ。

「師匠、落ち着いてください。と、ところでよく分かりましたね、僕が隠れてたの。結構自信あったんですが」

ジョンはクリスを落ち着かせようと、厄介事ではない別の話を咄嗟に振る。

ちなみにジョンが気配を消すのが得意なのは、それができないとま
ず死ぬようなところにクリスによって連れて行かれることが多々あ
ったからだ。

「だれがお前に教えたと思ってんだ！っていうか隠れてたってこと
は何か後ろめたいことがあるんだろ！それ以上寄ったらこの超絶可
愛い娘の頭を撫でるぞ！撫で回すぞ！」

そっぴいなながら、クリスはフィリスの頭に手を置く。

フィリスは嬉しそうにクリスの手に叩いている。

藪をつついて蛇を出したジョンは、この訳の分からない状況を打開
しようとする。

「それ脅しになってないですよ。ところでその可愛い娘さんは誰で
すか？」

ジョンは自分の師匠が抱きついていて、おそらく相当可愛がってい
るであろう妹の話を見せて、少しでもクリスを落ち着かせようとす
る。

「ほほう。師匠に厄介事を運ぶ馬鹿弟子にもフィリスの可愛さは分
かるか！しかしお前なんか娘はやらんぞ！！俺とフウリを倒せた
ら、四十秒だけ会話できる権利をやるう！」

「ふむ。主の弟子は、いくら可愛いからと言って私たちの娘を嫁に
欲しいのですか？仕方ないですね。少し本気をだしましょうか」

とうとう娘と喋る相手すら命を賭けさせることを決定する親馬鹿と、

アップをしだす親馬鹿。

別の方向でぶっ飛んだ自分の師匠と師匠の精霊の会話を聞いて、ひたすら頭を悩ますジョン。

「し、師匠とフウリさんの娘ですか？無茶がありませんか？いくら師匠だからって種族は超えられないでしょう？」

ジョンは、ふとした疑問を何の気なしに口にする。

「フィリスは実の娘だ！なぜなら血はつながっていなくても、魂は繋がっている！！あと魔力も。いいか馬鹿弟子！大事なのは血じゃない！心だ！！」

「ふむ、主の弟子なのに、少し道理が分からないようですね。この子は主と私の娘です。家族になるのに必要なのは血ではなく心なんですよ」

「こころだー」

クリスが目を血走らせて魂の叫びを、フウリが冷静にものの道理を、ほぼ同時にジョンに向かって口にする。

それに遅れて、クリスに抱きしめられていたフィリスが両手を振り上げ大事なことを強調する。

そしてジョンは、何も考えないで疑問を口にした自分を恨む。

「す、すみません。どうも僕もまだまだ修行がたりないようで」

ジョンはなんとか取り繕うとする。

「まったく、こんなことも分らないなんて、お前は本当にどうしようもない馬鹿弟子だな！そんなんじゃ、この災い渦巻く世界を生きていけないぞ！」

「そうですね。もう少し精進するべきでしょう。魔法使いである主に、あなたが剣で勝てるくらいに」

クリスがフィリスを抱っこして、まるで大切なことを言うように世界で生きていくことの大変さを弟子に言い、フウリがぱっさりと自分の主の弟子を切り捨てる。

「その子が師匠とフウリさんの娘だつてことは分かりました。ただ、災いの中心はいつも師匠じゃないですか！！何度巻き込まれたと思ってるんですか！それでも生き残ってるんですよ僕は！！そして、精進しただけで勝てるなら魔法使いを剣の師匠にはしません！！」

理不尽な説教と理不尽な事実を言われ、ほんのり涙目になりながら反論するジョン。

いつもは冷静なジョンも、この二人と話すときは大抵こんな感じに、感情むき出しになってしまふ。

「だれが災いの中心だ！そもそも、師匠の面倒事は買ってでもするのが、弟子つてもんだろ！まったくこれだから近頃の若い者は」

「あんたの面倒事は生死に直結なんですよっ！！」

まるでクリスの無職っぷりを見た村の老人のようなことを、クリス

が弟子に言う。

それを聞いてジオンは、歩く死亡フラグ量産機の師匠の後ろでその旗を取って歩く作業なんて、死んでもごめんだと思い、形振り構わず叫ぶ。

「そ、そんなことないぞ・・・？」

「なんで目を逸らすんですか」

クリスのもその自覚はあるらしく、さっきまでの強きが嘘のように汗を流し、視線を明後日の方向へ向ける。

ジオンはそんなクリスをジト目で見つめる。

「そうだ、おい！馬鹿弟子！俺はこの三ヶ月平穩にすごしていたんだ！それが証拠だ！！」

「よかったですね、これから三ヶ月分の厄介事が待ってます」

まるで鬼の首を取ったかのように言うクリスに、冷静になってきたジオンはいつも通りに返答する。

「やっぱり厄介事を持ってきたのかあああ！逃げるぞフウリ、フィリス！」

「あ、しまった」

クリスが慌ててフィリスを抱え上げ、フウリに手を伸ばす。フィリスはよく分かっているが、抱えられてくすぐったそうに笑っている。

る。フウリは手を握られ、しかしクリスを留める。

ジョンは自分の失言に手で口を覆う。

「主、弟子いじりはこの辺にしましょう。何か重要な用事があつて来たのでしょうか？それで無ければ、五寸刻みになる危険を冒してまで、主のところにはこないでしょう」

真顔でそう言うフウリに、ジョンは收拾をつけてもらったことにほつとすると同時に、何か気にさわるものがあれば五寸刻みだったのかと、恐々とする。

「ちつ、命拾いしたな馬鹿弟子！それで何の用があるんだ！？俺はやらんぞ！」

「なんで用件聞いといて、結論を一緒に言っんですか！」

「そうですね、主。折角弟子が尋ねてきたのですから、少しは寛容に対応してあげればいいじゃないですか。まあ、つまらない話題ならば少しの間喋れ無いようになるかもしれませんが」

「な、なんですかそれ！どこも寛容じゃないじゃないですか！師匠からも何か言ってください！弟子の口がピンチですよ！？」

慌てて師匠に助けを求める弟子。

「お前、口が無くなるとあとは腹黒さしか残らないからなあ。だからこいつから口を取るのはやめてやってくれフウリ」

クリスは、しみじみと思いだすように口にする。

「たしかにそうですね。主の弟子は、礼儀正しいですがお腹が真っ黒ですからね。フィリス、あまり見ちゃいけませんよ」

「はい」

フウリがフィリスの目を両の手で隠し、フィリスは嬉しそうに返事をする。

「何か僕が口と腹の悪さでしか評価されていない気がしますよ!?! 師匠としてそれはどうなんですか!?! 剣の腕とかあるでしょう!?!」

「それは置いといて、結局なににきたんだ?」

「置いておかないでくださいよ!?!」

ジヨンは目的も忘れて叫び倒す。

まるでクリスが王都にいるときのような光景が広がっていた。

すなわち、クリスとフウリがジヨンをいじり、ジヨンが叫び、さらにクリスが悪乗りしてフウリが諫め、またクリスとフウリがジヨンをいじるというエンドレス、だいたいいつもこんな感じの三人組だった。

王子の懐刀、冷静沈着な騎士と噂され、自分の主である王子相手ですら腹黒毒舌を忘れない魔法使いの弟子も、魔法使いとその精霊に

かかれば、その仮面をあっけなく剥がされるのだった。

第四話「魔法使いと弟子の用件」

「で、どんな厄介事を持ってきたんだ？」

先ほどの騒ぎからやっと落ち着いた面々が、テーブルを囲う。

フィリスはクリスの膝の上でご満悦だ。

「えつとですね。師匠は僕が騎士になったのしっていましたっけ？」

「ああ？ああ！そういえば、いい鎧着てるな？」

クリスはジョンが騎士になることを一片も疑っていなかったが、実際その姿を見たのは初めてだったことを思いだす。

そして、まるで田舎のチンピラのように、テーブル越しに下からねめつけるようにジョンを見る。

「やめてくださいよ。僕だって騎士団に入っている苦勞してるんですよ？師匠はそれが嫌で騎士団に入らなかったじゃないですか」

推薦はもらっていたでしょう？とジョンが続ける。

確かにクリスは魔法院の推薦を蹴ったあとに騎士団の推薦ももらっていたのだが、騎士団とは馬が合わないことはこれまでの出来事で確実だったので、そちらの推薦も蹴ったのだ。

ギルドの名づての冒険者、ドラゴンキラーであり、凄腕傭兵と組んでの実戦経験も豊富、国の難易度の高い依頼も何度か受けて、その全てを成功させている。

国境争いでは、ドラゴンを一刀の元に両断し、敵増援すらその姿を持って引かせた男は、いくら平民の出とはいえ、名門貴族の弟子でもあるのだ、騎士団上層部にお欲しいと思わせるのに十分であった。加えて騎士団の上層部に息子を鍛えてもらった父親がいて、息子もってくるその他の武勇伝を聞き、たるんだ騎士団に是が非でもほしいと思っていた。

そしてその「魔法使い」が、魔法院の推薦を蹴ったことを聞き、騎士団が推薦を出したのだ。

ちなみに、当初クリスの話が上がったとき騎士団上層部は、それが魔法学院の生徒だということを頑なに信じようとしなかった。

クリスは騎士団を戦場で見て、そのあまりの頼りなさと、あまりの特権階級意識の強さに辟易していたのだ。

「冗談だ。すまんすまん。騎士叙勲おめでとう」

一転、真面目な顔でクリスはジョンを祝辞を述べる。

「ありがとうございます。騎士になれたのは家柄ですが、自信をもって自分が騎士だと言えるのは、師匠のおかげです」

今の王国の騎士は、ほとんどが家柄で決まっている。それを良しとしなかったジョンの父が、ジョンに課題を出して冒険者をさせたのだ。クリスとの出会いもそのときである。

そして、その父の思いの通りにジョンは名実共に騎士となったのだ。ジョンは自分を真の意味で騎士にしてくれた、父と師匠のことを実は誰よりも尊敬している。

「それですね、配属は親父のところだと思っていたんですが、何故か王子の親衛隊に配属されたんですね。師匠そこらへん何か心当たらないですか？」

「王子の親衛隊なんて大出世じゃないのか！？俺は特に何もしてないぞ」

特に心当たりのないクリスはそう答える。

「え？いや、あるでしょう？王子ですよ？」

ジョンはクリスが王子の正体を知っていると思ひ込み、念を押して聞く。

「しらんがな！そんな偉い知り合いなんぞおらん！そもそも、いたとしてもうちの国って王族は成人するまで分からないだろ」

「い、一般的にはそう言われていますが・・・、本当にしらないですか？」

「さつきから知らないって言ってるだろう!」

クリスの返答を聞いて、天を仰ぐジョン。まさか自分の主が正体を明かさずにクリスと友達付き合っていると思わなかったのだ。

「何を考えてるんだあの馬鹿王子・・・!」

予想外のことに、悪態が口をつく。何時もはそんなことしないのだが、あまりにシヨックだったようだ。

「おいおい、一応主人なんだから、黒いのを隠せ!」

突如黒い雰囲気を出しはじめた弟子にクリスは驚き、いさめる。

「いいんですよ、あんな人。こっちは師匠もそれなりに事情を知っていると思って来たのに・・・」

いきなり用件に入らなくて良かった、とジョンが続ける。

友人が呼んできると言えば師匠も無碍には断らないと思うが、何も知らないで王子が呼んできると言った場合

逃げられていたな、とジョンは想像する。

「それで、その王子なんです。我が主、ステイン王子は今年魔法学院を出て、成人の儀を終え、正式に我が国の第一王子として即位されました」

「おいましてステインと言ったか今?聞き間違いだよな?」

クリスの脳裏に、野外実習で死にかけたこと、パーティー会場を爆破しようとしたときのこと、貴族の馬鹿な子弟たちをはめたこと、王城に侵入したときのこと、その他にもステインと学生時代やらかしたことが浮かんでは消える。

「間違いありません。師匠の今頭に浮かんでいる人物ですよ」

「これは王都に行く必要がでてきたな。あいつはよく隠し事するけど、これはとびつきりすぎる！」

「よかったです。僕もそれしか言われて無いので」

クリスはいつも厄介事を持ってくるステインを一発殴るために王都へ行くと言い、ジョンはにっこりと微笑み自分の仕事が終わった事に安堵した。

「え、よかったです？」

「師匠を王都に連れて来いって話でしたよ。僕が受けた命令は」

「な、なんだと……。どうかでなんか倒してこいとかじゃないのか。そうになると、会いにいくと厄介事に巻き込まれ、会わないこの胸に渦巻くもやもやを発散することができない……。！どうするべきか」

クリスは悩む。確かにその馬鹿王子は一発殴っておきたい、しかし良からぬことに絶対巻き込まれる、どうするか……。と。

「主、何を迷う必要があるのですか？」

それまで黙って成り行きを見守っていたフウリが口を開く。

「おお！何か言い案があるのかい！？さすがフウリだね！」

「ふふ、そんなに褒められたらいろいろしちやいますよ。それでですね、主。迷う必要は無いんですよ、どうせ何をしたらって三カ月分の災いの神の愛が主を待ちうけてるんですから」

クリスの膝の上で眠そうにうとうととしていたフィリスを引き取りながら自慢にフウリは断言する。

「褒めて損した！！解決になってねえ！！」

「ひどいですね主。けど、主はステインの頼み事断った試しがないじゃないですか。どうせ今回も引き受けるのでしょうか？」

クリスの行動を見てきたフウリは的確に指摘する。

「あいつは断ると捨てられた子犬のような雰囲気をかもし出すからなあ。はあ、仕方ない」

盛大なため息をついてクリスは王都へ行きを決心する。

「よかったです。ありがとうございます、フウリさん、師匠」

ジオンは任務を達成できたことを喜び、後押ししてくれたフウリとどんな用事かまでは王子から聞いていないが、確実に普通の人間なら命を賭けることになるだろう厄介事に巻き込まれる決心をしてくれた師匠に礼を言う。

「いえいえ、面白そうなことになりそうですので」

「今回だけだからな!!」

クリスはとこあるごとに毎回言うが、その通りにはまったくならない言葉を叫ぶ。

「それでは師匠、準備が出来次第の出発でいいですか?」

「ううむ、急だな」

ジヨンの提案に、もう村でやり残した事が無いか考え込むクリス。

「それでは、明日宴でも開いて、明後日の出発でよろしいのではないかな」

今まで黙っていた村長がそう提案する。

「分かりました、そうしましょう」

「了解」

クリスとジヨンが頷き了承する。

「話がまとまったようで何より。騎士さまはうちに泊まってもらえますかの。ちと狭いですがご容赦を」

村長が立ち上がり、そう締めくくる。

こうして魔法使いは、平穩を捨て災いへと身を投じるのだった。

第五話「魔法使いの知らない裏事情」

王子の執務室に集まった面々が、その部屋の主に注目している。

年齢も様々な集まった面々は、しかし一つの志を持ってこの執務室のテーブルの席に座っている。

執務室は重い雰囲気に入れられ、誰一人として口を開くものはいない。

「皆集まっているな」

その静寂を破り、部屋の主であるステイン王子が口を開く。

「それでは会議を始めろ」

王子の厳かな宣言によりその話し合いは始まる。

「まずは、各々どこまで準備が進んでいるか、確認しよう。宮廷魔法院のほうはどうだ？」

王子に話を向けられた魔法院の長が口を開く。

「宮廷魔法院は、三分の二以上は私と息子で掌握しておりますが、やはり宰相派に近い者たちも多いですからな。これ以上動くとは勘付かれてしまってもいいかもしれません」

魔法院長、グウエン・アスクルクがそう答える。

グウエンは白髪混じりの頭に深い皺の刻まれた顔、しかし今だ衰えない力強い目を王子に向ける。

アスクルク家は、代々続く魔法の名門貴族だが、それ抜きにしてもグウエンは魔法院で信望を集めている。

グウエンは誠実な男で、自身が名門貴族の出であることを鼻にかけない行いが多い。

能力の高いものが難癖をつけられて貶められるのを救ったりと、能力がない者が家柄だけで、能力のある者の足をひっぱるのがきらいなのだ。

そうして部下には能力の高い人間が多く集まり、結果魔法院の長に就いている。

宰相派とは、オーカス帝国の宰相ガルンド・アザシルを中心とする派閥である。

ガルンドは元々、前宰相の補佐をしていたのだが、前宰相とその有力な派閥後継者が相次いで死に、後を次ぐ形でその地位についた。

そうして、王妃が死に王が後宮に引き籠もりがちになると、その権力を使い好き勝手を始めたのだ。

その甘い汁を吸おうとする貴族によって、一気に宰相派は大きくなった。

今では政治だけでなく、騎士団や魔法院にまで派閥があり、気づくと誰も止める者がいなくなっていた。

「魔法院のほうは、そこまで押さえられれば十分だな。数でも質でも勝っているのではあるう？」

王子はグウエンの言葉を聞いて一度頷き、確認をとる。

「勿論です。もしもの時でも、家柄だけしか取り得の無いものに負けることはまずないでしょう」

グウエンはその力強い目で、自身満々に言う。

「ならばよし。次は騎士団だな」

その質問を向けられたのはマッシュ・タリエルエ。

第二騎士団の長であり、王子の近衛騎士、クリスの弟子でもあるジヨンの父親に当たる。

マッシュは成人してからずっと常に第一線で活躍して来た騎士だ。

彼は最近ではほとんど戦場にも出ず、たまに行われるちゃんばらごっこを演習と呼ぶ騎士団を憂いていた。

そんな折に、息子経由で王子に呼ばれ、その考えに賛同し、この会議に参加している。

「こちらほとんどが宰相派に属しているようなものですからな。第二騎士団は私の指揮下なので問題ないですが、あとは第四がこちらにつくかどうかというところでしようね。他のところは宰相につくと見て間違い無いでしょう」

騎士団は貴族の数が多く、宰相派の人間が必然的に増え、今ではかなりの数に達している。

そうして、実力よりも家柄が重視される傾向に拍車がかかり、今では騎士団と言っても装備がいいだけというのが共通認識になっていた。

「やはりか。いざというときは傭兵がいるが、第四騎士団に関しては引き続き取り込み工作を頼む」

「はっはっは、武以外のことは苦手ではな、期待せずにお待ちください」

王子は想定された答えに、しかし落胆したように答える。分っていたこととはいえ、国の戦力の要でもある騎士団も政治の力が入り込んでい事実を突きつけられ、やり切れないといった様子だ。

その王子の気持ちを読み取り、マッシュは殊更明るく答える。

その答えを聞いて、王子は少し笑うと別の方に顔を向ける。

「軍のほうはどうなっている？」

王子に顔を向けられた男、タール・エンダールは緊張したように答

える。

「軍の方は、混乱に乗じて帝国やグルーモスに攻め込まれないために国境方面の守備強化を行っています。宰相が帝国と繋がっているという噂もありますから」

「タールは年若く、家柄だけで軍の高官になったような男であるが、自分自身その出世をよしとせず、その地位に見合うように努力をする人間だった。」

「この中では、王子を除き一番年少のため、何度も参加している会議だが、毎回緊張している。」

「なるほどな。派閥は大丈夫なのか？」

「軍は騎士団ほど貴族の比率が高くないので、政治色もその分薄いですから」

「他の中央にいる軍高官は仕事をほとんどしないため、タールの意見は自動的に採用されることが多い。おかげで軍をある程度好きに動かすこともできた。」

「よくわかった。後は宮廷内はどうか？」

「タールの言葉に頷いた王子は、次に宮廷内で調査を頼んでいる、ローア・コンクルールに話を向ける。」

「ローアは国の財務を担当する貴族の一人であったが、宰相派の使途不明金に容赦しなかったためにその不興を買い左遷され、今は国の図書を管理する仕事をしている。」

本人は今の仕事も気に入っているのだが、未だに残る宮廷内のネットワークに目をつけられ王子に引きずり込まれた。

「宮廷貴族もほとんどが宰相派ですが、下の者は多くがその被害を被っておりますから、やつらの不正の数々の証拠も続々と集まっております」

「そちらは順調か。重要となるからな、しっかり頼む」

「お任せを」

こうして会議は進んでいく。

全ての確認が終わり、これからの行動指針を告げた王子は、皆を見回す。

「さて。父は王としての志を失い、国は一部の者が好き放題。私は王族として、この国を想う一人の人間として、これ以上この状況を座視することはできず、想いを同じにする皆に集まってもらったわけだ。それから何度も会議を重ね、そしてようやく動ける段階まできた。少ない時間でよくここまでやってくれた。あとは実行するだけだ。しかし、宰相も馬鹿ではない。何かしら準備をしているだろう。しかしやらねばならぬ！皆の一層の忠誠を願う！」

(後少し、後少しでお前を外の世界に出してやれるからな)

動乱の 때가 近い!

「む、何かものすごく嫌な予感がする。やっぱ帰るか・・・」

「馬鹿言わないで下さいよ師匠。あんなに盛大に送り出されたのにすぐ戻ったら、赤っ恥かきますよ?」

「それに予感も何も、厄介事に巻き込まれるのは決定じゃないですか。今更どうこう言っても仕方ないですよ。私はフィリスに都会を見せれるのが嬉しいですけどね」

「いっぱい、ひといる」

「む、それはあるか。人もいっぱいだし、おいしいものもあるし、綺麗な服もあるぞ」

「服は私が気に入ったのを作ってあげますからね」

「い、一応王子の命ということをお忘れなくくださいね? 観光は後ですよ?」

「ステインなんてちょっと待たせてもいいんだよ！馬鹿弟子はフィリスと命令とどっちが大事なんだよ！？」

「そうですね。フィリスの情操教育に勝るものがあると言っただけ言ってみなさい。その命を賭ける覚悟があるならですが」

「し、仕方ないですね。先に観光しましょう。まあこんな無茶をやらされたんですから、少しくらい寄り道してもいいでしょう」

「わかってるじゃないか！そのまま海外旅行に行くか！」

「それはだめですよ！？もう諦めてください」

「お前は俺に何を諦めるといつてるんだああ！命か！？命なのか！？」

ほのぼの魔法使い一行が王都につくまであと少し。

第六話「魔法使いの思い」

「しかし、師匠も隅におけませんね」

街道をのんびりと歩いていると、ジョンが思い出したかのようにクリスに話しかける。

「いきなりどうした、馬鹿弟子」

クリスは、ジョンの横でフィリスと手を繋いで歩いている、フィリスはもう片方の手でフウリと手を繋いでいる。

「いやいや、師匠が王都に行くとは知れ渡ったら、女性が師匠の家に来て話してたじゃないですか」

かなりの美人さんでしたね、とジョンがニヤニヤ顔をクリスに向けて言う。

ジョンはこの道中での扱いがどうにも気に入らないのだ。

魔物に襲われたときにクリスがジョンを気遣うように動くので、ジョンからすれば未熟者扱いされている気がするのだ。

フウリはともかく、フィリスにもほとんど気を配らずに戦闘をしているのになぜ自分だけ、とジョンは思っている。

なので、クリスを困らせようと思い、ジョンの先の発言がある。

「ん？リリイのことが。話をしたというか、一方的に怒鳴り込んで

きたというか」

「またまた、師匠といい関係だったんじゃないですか？」

特に気に止めた感じではないクリスに、フウリを気にして無理にポーカーフェイスを保っていると思ったジヨンはニヤニヤと追い打ちをかけるつもりで言う。

「とは言ってもなあ。ちょっと話したら、なんで私こんなに勢い込んできたんだろうって首かしげて帰ってったぞあいつ。俺が知るかつての！前回みたいに黙って出て行くわけでもないのに。そもそもなんでお前そんなニヤニヤしてんだ？」

リリイがその謎を分かる時が来るのか謎である。

「おそらく、道中ずっと主に気を使われたことに気づいたのでしよう。それくらいには弟子も成長しているということですよ、主」

本当に訳がわからないといった感じに首をかしげるクリスに、フウリが的確にジヨンの内心を言い当てる。

「む、そうなのか。成長したなあ、前は全然気づかなかったのに」

「まったくですね。主は過保護ですからね」

二人が逆にニヤニヤとジヨンに視線を向ける。

あたらしいおもちゃを見つけたようなその視線に、ジヨンは即座に自分の発言が間違いだっただことに気づくも後の祭りである。

「あのギルドのチンピラに絡まれておろおろしてたジョンがなあ」

「まったくですね。戦場でいろいろなものを体から流しながら、必死に主の後ろをついてきていたのがついこの間のことのような気がしましたが。人間の成長とは早いものですね」

クリスとフウリは、まるで道行く人たちにも聞こえるかのような音量で隣を歩く王国の印を纏った男の過去を暴露する。

最初は我慢していたジョンだが、段々と内容がエスカレートしていく。

「もう勘弁してください」

結局、ジョンが音を上げるまでその暴露大会は続いた。

257

「しかし、ジョンもそこまで成長したか、師匠として嬉しいぞ。うん」

「もう勘弁してくださいよ！」

クリスが頷きながら言った言葉にジョンがまたからかわれるのかと焦ったように向き直る。

「いや、本当に。昔は余裕なんて毛ほどもなかったろ」

「まあ確かにそうですね、言われてみれば焦っていたのもあったとおもいますが、周りを気にする余裕なんてなかったですね」

やたらと難易度が高い依頼ばかりを受けていたクリスに、ジョンはそれまで王都からほとんど出たことが無かったので、それはもう大変な思いをして必死について行っていた。自分と年齢が近い、それも魔法使いにまったくついていけないというのはジョンのプライドが許さなかったのだ。

「それが今ではしつかり余裕をもって周囲を観察できているんだから、三ヶ月ちよつとの間の成長を感じれたよ」

「騎士団に入って、父の言っていることが身にしみてわかりましたしね。あそこはいるだけで腐っていきそうなので、自分なりに努力もしたんですよ、一応」

王子の近衛騎士となったジョンは、騎士団を社交場と勘違いした貴族を相手にすることが多くあり、こんなところではいつも何かしらの厄介ごとに巻き込まれている師匠に置いて行かれるばかりだと考え、必死に努力をしていた。

「その意気で頑張ってくれよ、弟子！俺が育てたって胸張って言えるくらいに！」

「はいはい、頑張らさせていただきます、師匠」

この三ヶ月をクリスに評価されたことが嬉しいジョンはそれまでが嘘のように、上機嫌に歩を進める。

「しかし主が弟子に気をつかっているのは昔からですが、フィリスは戦闘中でもあまり心配しませんね？」

「いやだってフィリスはなんだかんだで高位精霊だからなあ、俺が心配してもどうにもならんし」

「ふいりす、つよいよ」

夜、街道沿いの村の宿の部屋で、ランプの光が揺れる中、二つのベッドに腰掛けたクリスとフウリが向いあって座り話をしている。

フィリスはフウリの膝の上で上機嫌にクリスを見上げている。

「そういうところは相変わらずですね、主。フィリスが強い子というのには同意ですが」

「そもそもジョンも心配し過ぎるのはいかんかと反省したところだし。しかしあれはもう癖みたいなものだからなあ」

口ではいろいろ言うが、自分のことを師匠と呼んで慕ってくれているジョンのことを心底大事に思っているクリスは、弟子入り当初からいろいろなことに気を使って面倒をみている。

戦闘中も毎度ついつい視線を向けてしまっていたのだが、とうとう気づかれたことにクリスとしては嬉しくもあり、少し寂しくもある。

「主は心配事が多いですからね、減らしていけないと大変なことになるそうですね？」

「これから先のことを考えると心配でなりませんフウリ先生」

フウリの心配そうな声を察知したクリスはわざとおちゃらけたように手を挙げて答える。

「ふふ、大丈夫ですよ。何かあっても私とフィリスが守ります」

「おとうさん、まもる、よ？」

二人に守ると言われて、難しい顔で上を向くクリス。

「ううむ。守られるよりは守りたいんだけどねえ、男としても、父としても」

「精霊封じでも使われれば主に頼るしかないですが」

「あれ？昔単独で脱出してるフウリを見たことがあるよ？おかしいね！」

「ふふ、あれの百倍ほど魔力がこもっているものなら少し足止めされてしまいますよ？」

「あれの百倍でも時間かければ単独なのかよ・・・」

いつものごとく、嘘か本当かわからないことを言うフウリに、クリスはげんなりと足元を向き、ブツブツと呟く。

「しかし主、男としても父としても、ですか？」

「おっとそろそろ寝ないとな」

面白そうにフウリはクリスに向けて笑顔を向け、クリスはしまったという顔をして、急いで毛布にくるまり横になる。

「ふふ、ごまかしてもダメですよ、主。私も身の危険を感じないとはいけませんね？」

「おい、どういう意味だ！」

眠そうにしているフィリスをベッドに寝かせて、自分も一緒にベッドに入り、フウリは体をクリスのベッドのほうに向け、わざとらしく身をよじる。

それを見てクリスは毛布を跳ね上げ声を荒げる。

「ああけど、主が守ってくれるのですでしたか。しっかり守ってくださいね、期待していますよ」

「くっ、もう知らん！寝るぞ！」

フウリは落ち着き払って、しかしどこか可笑しそうにクリスを見て、クリスはそんなフウリを見て毛布を乱暴にかぶりなおす。

そうして、精霊の風が静かにランプの炎を消す。

「ふふ、本当に期待してますよ？」

果たしてそのつぶやきは魔法使いの耳に届いたのか。

夜は更けていった。

第七話「魔法使いのお買い物」

クリスたちの前には大きな壁がそびえ、門は多くの人が行き交っている。

「やっと着きましたね、行きは馬だったので、歩きでの帰りは長く感じました」

ジョンが村まで乗ってきた馬は今、皆の荷物を積んで引かれている。

「さてまずは師匠に顔見せに行かないといけないな」

「それでは先に学院に寄って主のお師匠さまにフィリスを紹介した後、後に観光しましょう」

「ついでに変なもの食べて進化した魔剣も見せないとな・・・」

「拾い食いをさせてしまいましたからね」

「フィリスはそこらへんの転がってる魔力とか食べちゃだめだよ！」

「うん、わかった」

クリスとフウリが王都での予定を立てる一方で、ジョンは何か言いたそうに二人をちらちらと見ている。

「宿も取らないといけないな、これからじゃそんなに見て回れないからね」

「そうですね、いい部屋を取りましょう。王都は夜も綺麗ですからね」

ジョンを無視して二人はどんどん予定を決定していく。

「師匠！観光はいいですが、今日中には一度城へ行きますよ！あと滞在場所は僕の実家の客室がありますので、勝手に宿を取らないでくださいね！」

放っておくと目的を忘れて観光しそうな親子に、ジョンがたまらず会話に割り込む。

「ちっ、うるさい弟子め！あんな馬鹿王子少しくらい待たせてもいいだろう！」

「王都に入ってその日に会いにいかなかったら、下手したら僕の首が飛びます！あれでも王子なんです！偉いんですよ！？分ってます！？」

「あーはいはい、分かった分った」

ジョンの叫びに、めんどくさそうに手を振って答えるクリス、会話の内容が内容だけに周りの注目をかき集めつつ門をくぐったのだった。

「ひとつはいい」

目を輝かせてフィリスが大通りを見ている。

ジヨンは実家に顔を出しに行き、観光が終わったら合流する事になった。

クリスたちは王都に入ってすぐに学院へと足を伸ばすも、師匠は最近新しく発見された遺跡に調査へと国の依頼で出ていて会えずに終わり、その足で大通りへと繰り出した。

大通りには露店が並び、話し声や客引きの声、値引き交渉の声、果ては怒声まで入り混じりそれら全てが通りを賑やかに彩っている。

フィリスは村とは違うこの空間のあらゆる物に気を引かれ、放っておくと飛んでいってしまいそうなほどだ。

クリスとフウリが手を繋いでいても、あっちへふらふら、こっちへふらふらと二人を引っ張るほどの勢いで興味のある物に突進している。

「おっと」

「わふ」

フィリスは無軌道な動きを繰り返し、クリスとフウリが上手く手を引っ張って人にぶつからないようにしていたのだが、さすがに通りの通行量は多く、運悪く商人風の男に当たってしまった。

「すみません！」

「申し訳ございません」

「いえいえ、気にしないで下さい」

クリスとフウリが即座に謝り、男も人のいい笑みで手を振り返す。

「フィリスも謝りなさい」

「ごめんなさい」

クリスに言われてフィリスも頭を下げ謝る。

それにも男は笑みで返し、そのまま歩いて去っていく。

その背中に再度謝罪をしてクリスたちは、今度は流れに逆らわずに進んでいく。

「しかし、最近では商人も精霊と契約しているものなのですね」

「さつきぶつかった人か？身のこなしは商人って感じじゃなかったけどな」

「せいれいがついてた」

ゆったりと歩きながら三人は先ほどぶつかった男について話し合う。

「まあ最近は何道にも魔物が多いっていうし、自衛できるくらいには鍛えてるのかもしれないな。それはそうと次はどこ行く？」

「もう少し露店を見て回りましょう。露店は少し少ないようですが、

何かフィリスに合う物があるかもしれません」

「おいしいものたべたい」

フウリは、先ほどから露店の串焼きを夢中で食べているフィリスに目を向ける。

フィリスはその視線に気づいて顔を上げ、更なる美味を要求する。

「俺も師匠に貢物を買わないと！」

「主はそんなにお金をお持ちでしたか？」

「え？ええつと、ないかな！」

クリスは無意味に胸を張り、フウリはそれを無表情に見つめる。

「威張らないで下さい。お師匠さまに貢ぎすぎです。無理をしてプレゼントされても喜ばないでしょう？」

「う、うん。ってというか俺の財布がすっからかんなのになぜフウリは買い物できるし」

フウリはお金を欲しがるということも滅多に無いので、財布なんて持って無いなと思ったクリスは先ほどからたまに出てくるお金の謎に言及する。

「主の財布の紐がゆるすぎるのには以前からなので、甲斐性の無い主には黙って、へそくりをしていました」

当然とばかりに、フウリは言い放つ。

「甲斐性が無くてすみませんね！っていうかさっきから高い露店はつか覗いてるけど、そのへそくりいくらあるの？」

「他所の女に貢いだ拳句、嫁のへそくりに手を出そうとこのですか。主はダメ亭主ですね」

「おい、天下の往来でそういうこと平気で言わないでくれる？視線がものすごい痛いんだけど」

周りから質量があると錯覚するほどの視線を浴びて、クリスは俯き加減で小声でフィリスに話しかける。

「これに懲りたら散財もほどほどにしてくださいね」

「はい、すみません」

クリスは肩をがっくりと落とし、フウリとフィリスが仲良く手を繋いで露店を見て回る後ろにくっついていく。

「このペンダントはフィリスに似合いそうですね、どうですか？」

「うん、似合うんじゃないかね、ってかなんか加護っぽいものが」

「掘り出し物のようですね」

フィリスが甘味を食べている横で両親がぼそぼそと話し合う。

「お客さんお目が高いですね。それは帝国の遺跡で見つかった物なのですよ」

二人に気づいた商人があからさまな笑みを湛えて話しかける。

商人には、田舎の若い夫婦が都会に來た祈念に娘に何かプレゼントしようとしているように見えたのだ。

フウリとフィリスはいいモノを着ているが、クリスは服装には無頓着なため、着ている物は少しみすばらしく見える。そのため、嫁と娘に奮発して服を買ったのだろうと商人は判断した。

実際は、クリスの着ている物は変な加護が掛かっていたり、呪われているが性能の高い物など、曰くつきで下手に繕うこともできない、出すところに出せばいい値がつく物なのだが、露天商はさすがにそこまで見抜くことはできなかった。

「ほほう、帝国の遺跡と言えば珍しい物が多く出ますからね」

「訳の分からない物が大半を占めてるがな！」

クリスは実感の籠った言葉を吐く。

商人はクリスのまるで体験したことがあるような言い振りに首をかしげながらも、二人がある程度知識があることを確認して、セールストークに入る。

「確かに呪いが掛かっている物などもたまに出ますが、大半はすぐに見つかり処分されます。それにこれは、ほらこの通り、私がつけても特に何もありません。なによりこのデザイン、今の技術では再

現できないほどに凝った細工は、王都でもなかなかお目に掛かれませんよ?」

露天商は実際に自分の手に取り、説明することによってそれに呪いの類が掛かっていることを説明し、希少性を謳ってこれを逃したら手に入らないことをアピールする。

対して二人は慣れたもので契約を通しての会話で作戦会議をしている。

『加護については気づいて無いようだな』

『そうですね、どうにも特殊なものようですが。帝国からということ、あまりよろしくない物であることも大いにありそうですが』

『ふむ。しかし、デザインは良いからな、ろくでもない加護なら無力化すればいいし。なんにしても安く買えたほうがいいよな』

『そちらのほうがいいですね。主のお金ではないですが』

『どうも、自分の精霊より貧乏な魔法使いです。っていうか、妙な気配のする物も置いてあるな。よし!』

『腹黒値引き交渉ですね、さすが主』

二人が黙って自分の手にあるペンダントを見ながら考えているので、後一押しで売れるだろうと商人は考える。

しかし、その考えは一瞬で崩れ去る。

「私、魔法学院を先ごろ卒業しまして。在学中には遺跡に何度も潜

つて、そのような品々も拝見する機会がありました。呪われた物にも当たったことがあります」

若い父親の雰囲気が一変したことに商人は驚き、その発言の内容に先ほどの妙に実感の籠った言葉に納得する。

「確かにそのペンダントは装飾も素晴らしく、呪いの類もありませんね」

並んでいる商品を一瞥し、妙に迫力のある微笑みを向けてくるクリスに、商人は嫌な汗を流す。

「しかし、いくつかの商品には・・・」

そこで言葉を切ってじつくりとクリスは商人を見つめる。

商人は考える、この客をどこまで信用していいのかと。

全部嘘ならば、自分は痛まないで済む。

しかし、この言葉と仕草が本当なら、自分の商品には何点かいわゆるつきのモノがあり、それを売ってしまえば信用が地に落ちる。

少し前に、取引のあった帝国の商人から紹介してもらった男から仕入れた物はどれも凝った装飾で素晴らしい物だが、如何せん初めての取引相手であるし、少しの胡散臭さもあった。

そして目の前の若い男は何故か信用出来そうな、そんな商人の勘ともいべきものが働いた。

そして商人は決心する。

「こちらの商品はお譲りします。ですのでよろしければその他の商品を見てもらってもよろしいですか？」

この発言には当の本人であるクリスも驚いている。

少し値引きしてくれればめっけものと思っていたのに、タダになるとは思ってもいなかったのだ。

『どつやら取引相手が信用できるところはないようですね』

『そうかもな、まあタダになるんだし、しっかり鑑定しよう』

二人は結論を出す。

「こちらとしても有難い限りです、それではここに並んでいる物だけによろしいですか？」

「裏にもありますので、そちらもお願いします」

そうして全てを鑑定し終わったクリスは、疲れたようにため息を吐く。

数点のいわくつきの物があつたからだ。

それも、遺跡から出た物ではなく、最近作られたような物が多く、クリスのつけている指輪の錬金前の劣化版のような性能の物が大半であつた。

身につけていても一般の人間ならそこまで違和感がないだろうライオンで調整されているような、魔力吸引機能だけがついた物で、デザ

インはよかったのでクリスはその機能だけ破壊していった。

商人はクリスの話を聞いて感謝し、ペンダント以外にもお礼をした
いと言い、クリスはいくつか壊す前の状態の物を頂いて露店を後に
した。

フィリスの胸元には巧みな細工が施されたペンダントが揺れている。
大層気に入ったようで、フィリスはペンダントを弄りながらご満悦
だ。

クリスとフウリがその様子を見て和みながら会話をしている。

「なんかきな臭い物が出回ってるなあ」

「そうですね。主はお師匠さまに鍛えられてますが、商人にはなか
なか分かる物ではないですね」

「たしかに、身につけただけじゃ分からんしなあ」

「いつそのこと主が商人でもやってみますか？」

「俺が商人なんてやったら、他所がみんな潰れちゃうじゃないか！」

「主は商品を貢物にしそうですね。とりあえず、そのような妄言は
私より資産を増やせてから言うてくださいね」

「はい・・・」

これ以降おとなしく荷物持ちに徹したクリスの両腕には、これでもかと言つほどの荷物がぶら下がる。

結局、合流時間を大幅に遅れた一行は、魔法使いの両手に荷物を満載して弟子の実家へと向かうのだった。

第八話「魔法使いと王子」

「ありえません！」

ジヨンは先ほどから繰り返している言葉を再度、隣を歩くクリスに向ける。

「約束の時間からどれだけたっていると思っっているんですか！」

「けど会うのはステインだろ、別に少しくらい・・・」

「あれでも！王子！なんですよ！」

城の廊下を言い合いながら早足で歩く二人組に、すれ違う人は例外無く振り返る。

フウリとフィリスは見えないようになって二人の後ろをついていつている。

「大声であれでもとか言うな！ああこいつちょっと頭があれなんですよ。気にしないで下さい」

「だれが頭がおかしいんですか！？」

振り返って凝視してきた貴族らしき人物に、クリスは隣を指差しながら愛想笑いを浮かべ弁解するが、それにすらジヨンは立ち止まって噛み付く。

怒りでどこを歩いていたかも忘れていようだ。

そんなジョンをクリスは先ほどからなだめすかしている。

「悪かったって。そんな怒るなよ。ほら飴やるから。今度剣の稽古にも付き合っからさ」

「し、仕方ないですね。今度から気をつけてくださいよ」

実地ばかりでこれまで師匠に稽古をつけてもらうことがほとんど無かったジョンは、クリスの提案を聞いてさっきまでの怒り様が嘘のように歩きだす。

クリスは弟子がやっと平常心になったことにそっと息を吐いた。

「ここが王子の執務室です」

暫く歩くと大きめの扉の前で止まり、ジョンは部屋の前にいる同僚に挨拶しつつ要件を伝える。

「この時間ならぎりぎりここで仕事をしているみたいですね」

そう言いながら、扉をノックする。

暫くの間があつて中から返答がくる。

「何用か」

「ジョン・タリエルーエです。クリス殿をお連れ致しました。お目

通り願います」

「入れ」

部屋の前で成り行きを聞いていた騎士が扉を開ける。

「ご苦労だった、ジョン。そして久しぶりだな、クリス」

ステインが執務机から振り返り、入り口に立つ二人に向かう。

ジョンはその言葉に礼で返し、クリスは扉から入ってそのまま止まらずにステインに向かってつかつかと歩いていく。

そうして、ステインの前まで来ると快音一発、脳天にゲンコツを浴びせる。

「この馬鹿ステインが！何が久しぶりだな、だ！！お前がふんぞり返ってる姿なんぞ見たくなかったわ！！」

「お、おい！久々に会った親友にこの仕打ちはなんだ！それに自国の王子を殴るとは何事か！」

「だまれ！ステインのくせにえらそうにするな！正座しろ正座！」

王子の座る椅子を蹴たぐって、床に正座させるクリス、ステインは涙目で正座する。しかし、自分が王子だと分かっても変わらないクリスの態度に嬉しそつでもある。

「ったく。ちよつと王子さまやってるからって調子に乗るなよ！何偉そうに呼びつけてやがる、いじめるぞ」

「わ、悪かった。しかしさすがに私自らと言うわけにもいなくてだな・・・」

床に正座しつつ、捨てられた子犬のような目でクリスを見上げるステイン。

「おーおー。王子さまですもんねー。俺は知らなかったけど！」

「き、決まりで言えなかったただけだ！」

「けっ。何人かは知ってたみたいじゃねえか」

「あいつらは家柄的にだな」

オーカスの王族は一般的に成人するまでは一部の人物を除き容姿すら分からないものだが、宰相は勿論知っており、その派閥の人間の子供で魔法学院に所属している者も取り込みのために親から知らされていたので、学院ではほとんど公然の秘密扱いであった。

しかし一定の知り合い以外とほとんど話さなかったクリスは、勿論知らなかったし、聞いたとしてもそれを信じなかっただろう。クリスにとってステインは、弟分的な存在であり、それが王族と言われなくても鼻で笑うのがせいぜいである。

「俺の親友のステインは家柄で差別するようなやつじゃなかったなあ」

「む、むっ」

困ったようにステインが唸る。

それを見たクリスがため息一つ、口を開く。

「で、何で王都までわざわざ呼び出したんだ？」

その言葉を聞いてステインは目を輝かせる。

「ゆ、許してくれるのか！」

ステインは立ち上がってクリスの肩を掴む。

「くだらないことで呼んだならゆるさん」

「も、もちろん。とても大事な用件で呼んだのだ」

ステインは椅子に腰掛け無理やり威厳を出そうと足を組む。

「終わりました？」

王子が落ち着いて話出そうとしたところで、先ほどから目を瞑って耳を塞いでいたジョンが片目を開けて質問する。

王子に無言で歩み寄って行く師匠に、瞬時に見ざる聞かざる言わざるを選択したジョンは、落ち着くまで息を殺して待っていたのだ。

「ほう、そこにいるのは忠義に厚い我が近衛騎士殿ではないか」

「いやいや、こればかりは師匠に言っただけでなかった王子が悪いと思

いますよ僕は。貴族内ではほとんど公然の秘密みたいになっていたんですから、親友には話してるものかと思いましたが。おかげで任務失敗しかけたんですから、勘弁してください」

「ところで用件なのだが」

状況がよろしくないと分かった瞬間に、ステインはジョンからクリスに視線を動かす。

「その前に。ジョン、任務ご苦労だった。下がって良いぞ」

「はっ。それでは失礼致します」

ジョンは先ほど騒いでいたのが嘘のように、綺麗な礼をして王子の執務室を後にする。

「ジョンには聞かせられない話なのか」

「そうだな、極めて個人的な願いがあつてな」

ジョンの後姿を見送り、クリスが話は脇にあった椅子に腰を掛ける。

「実はな。近々城の風通しを良くしようと思つてな」

「風通し?」

「うむ。簡単に言えば、粛清というやつだな」

ステインは物騒な言葉を平然と云つてのける。

「肅清ねえ。宰相か」

「やはり知っていたか」

「まあ昔から市井でも宰相のことは結構有名な話だからな、俺みた
いな一般人でも予想はつくな」

「いつぱん・・・じん・・・？」

明らかにおかしな単語で自分を形容するクリスに、ステインは信じ
られないものを見るような顔を向ける。

「さて、帰るか」

「ま、まてまて、冗談だ」

本当に背中を見せるクリスに慌ててステインはその袖を掴む。

「はあ。で、俺にそれを手伝えって？」

座りなおしたクリスはため息を吐く。

「そちらのほうは、準備も万端なのだがな。先ほども言った通り、
個人的に頼みたいことがある」

真剣な顔でクリスを見つめるステインに、クリスも自然と真剣な顔
で向き合う。

「去年の今頃のことを覚えているか？」

「お前が城に忍び込みたいって泣きついてきたときのことが」

クリスはそのときの出来事を思いだして苦い顔をする。

「そのときに行った場所を覚えているか？」

「王さまの騎士が周りを固めてた塔か・・・」

なんとか忍び込んだことを思いだし更に苦い顔をする。

「うむ。事が起こったらその塔へ行ってそこにいる私の妹を助けて欲しい」

「ん？妹？」

「うむ、妹だ。実はあのときは誕生日プレゼントを渡すために忍び込んだのだ」

まさかの話にはクリスは頭の回転が追いつかず口を開けたり閉じたりを繰り返す。

「諸般事情があつてな。私の妹は父、この国の王によってずっとあの塔で生活しているのだ」

「事情ねえ」

クリスが立ち直ったところあいを見計らってステインが話します。

「うむ。妹が生まれるのと引き換えに母が死んでな。父は母を深く愛していたからな、それが原因で妹を塔から出さないのだ、災いの子だと言つてな。ただ、さすがの父も羽が生えた子供を殺そうとは思わなかったようだが」

「羽ねえ。で、そのお姫さまをなんでまた俺が」

羽の生えた王族、それもお姫さまという類に、いい思い出のないクリスは微妙な顔を作る。

「私が動くわけにもいかんしな。まずは宰相派の排除が絶対なのだ、この国を治める王族として私情は挟めぬ。なので親友にお願いしようとな」

「なるほどな。ステインのくせに考えて行動してるんだな。仕方ない、その願いを聞いてやろう」

「王子の私より偉そうだな」

昔から、何かと無茶を言うステインに、似ても似つかないのになぜか故郷の弟が重なって見え、言うことを聞いてきたクリスは、またその無茶振りを了承する。

今回はそれだけでなく、ステインの話の聞き、力になってやろうと思つたのもある。

「ふん。王子だろうがなんだろうが、ステインはステインだからな。その妹を助ければいいだけの話だろ。まかせとけ」

「そうだな、我が親友ならそのくらい朝飯前だよな。しかし、宰相が帝国と絡んでいるという話もある。追い詰められたら何をしてくすか分からない。それが妹に向くかもしれない。どうかよろしく頼む・・・！」

こうして魔法使いは親友の願いをかなえるために動き出す。

第九話「魔法使いの財布」

その後、ステインと少し話をして部屋を出たクリスは、部屋前で待機していたジョンと共に城を後にしようとした。

「そこにいるのは王子に取り入って騎士になったジョンじゃないか」クリスとジョンはその声を聞いて、明らかにうんざりしたような顔をして、無視して歩き去ろうとするが、綺麗な鎧を着込んだ騎士に阻まれる。

「ジョン、目上の人間の前を挨拶もなしに通ろうなんて、君は本当に騎士なのかい？まあ所詮、君には礼儀作法は難しいか」

嫌味たらしくジョンを見るその騎士に、ジョンは明らかに侮蔑の顔を向ける。

そしてクリスは、その騎士が自分を眼中に入れてないことを察知すると徐々に気配を消していく。

「これはこれは、栄えあるオーカス王国第五騎士団のラストフ・ストローさまではないですか。何か御用ですか？生憎腹痛に良く効く薬は持ち合わせておりませんが」

ラストフの家は代々国の政治を司る家系で、宰相に近い人物であり、息子を騎士団に入れることによってその勢力を伸ばそうと画策した。

結果、ラストフは派閥の力で第五騎士団に所属し、剣の腕もなければ指揮官として優秀なわけでもないのに、副団長という地位に収ま

っている。

一度、王子の近衛になったジョンを取り込もうと接触したが、けんもほろろに断られ、逆上して決闘を申し込み、決闘前に派閥の力で小細工をしたりしたのだが、決闘当日に軽くジョンにひねられたという過去を持つ。

それ以来、何かと言い掛かりをつけてジョンにちよっかいをだしているのだ。

ちなみに、ジョンが王都中で好き勝手する第五騎士団に下剤を盛つたときに一番に被害を受けている。

「なっ！だれが貴様に薬など無心するものか！ただ、貴様が小汚い平民を連れていたのが見えてな。由緒正しいオーカスの騎士、それも王子の近衛騎士がそんな者を城に入れるとはまったく教育がなっていないな。仕方ないから私が騎士というものを教えてやろう」

「ふむ、お言葉ですが、ラストフ副団長。その小汚い平民とはどこにいるのですか？気のせいならばいいのですが、私にはそのような者がこの近くにいるようには見えないのですが。もしかして幻でも見たのではないですか？よろしければ、良い薬屋と良い医者を紹介いたしますよ？」

ふんぞり返るラストフに、ジョンは周りを見渡し問いかける。

クリスは既にフウリとフィリスと共に空の上から、風で拾ってくるジョンとラストフの話し声を聞きながら、ニヤニヤとその様子を観察している。

「な、何を馬鹿な！？貴様の隣に・・・」

「いやいや、私はずっと一人だったのですが。困りますねえ、脳内

で架空の人物をでっち上げて、それを叱責的にして指導すると言われても。いや困った、宰相さまにでも相談しないとイケませんかね」

うろたえるラストフを見てジョンはニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ挑発する。

「貴様！ 凶に乗るなよ！ 先ほどの小汚い平民を出せ！」

「さすがの私も魔法使いではありませんので、ラストフさまの脳内にいる人物を現実にお出しすることはできません。まあ、宮廷魔法院の方でもできるとは思いますが。申し訳ございませんが、その騎士としての指導でしたか？ それはまたの機会にお願いしたいですね、是非、ラストフさまの医者通いが終わった後にでも」

「貴様っ！！！」

顔を真っ赤にしてわめき散らすラストフに当然注目も集まり、かなりの数の人間が二人を遠巻きに囲っている。

それを確認しながら、更に挑発を繰り返すジョン、他の貴族の前でそこまで言われて引けないラストフは剣に手をかけようとする。

「しかし、よしんばその平民とやらがいたとして、オーカス王国第五騎士団副団長さまともあるうお方が、一瞬で見失うというのはいかななものか。何でしたら、私がまた稽古をつけて差し上げますよ？」

以前の決闘騒ぎで、まるで赤子の手を捻るかのように負かされた記憶がラストフの脳内で思いだされる。

剣から手はずし、ラストフは真っ赤な顔でジョンを睨みつける。

「ふんっ！いつまで粹がつていられるものかな！私の権力でお前ごとき騎士をやめさせることもできるのだぞ」

ジョンにその真っ赤な顔を近づけ、ラストフは脅すように高圧的に言う。

「それはそれは。また脳内のお話でございましょうか？騎士を辞めさせることのできる人物とは、王と私の直接の主である王子だけです。はて、ラストフさまは王になるおつもりなのですか？いけませんよ、城でそのような物騒な冗談を呟かれては。今までの発言が本気ならば私はあなたを切らないといけなくなってしまう」

もちろん全部ラストフさまの脳内でのお話ですよね、とそこだけボリュームを下げてジョンが剣に手をやりつつ呟く。

「あ、ああ。冗談だとも」

ラストフは周りの目を気にして、小声で呟く。

「ならば良かった。しかし今度からはもう少しうまい冗談を言うことをお勧めいたしますよ、何でしたらそちらの講師もご紹介いたしますでしょうか？冗談のような人生を歩まれている方でしてね。ラストフさまには少々小汚い平民に見えてしまいかもしれませんが」

怒りに震えるラストフに対し、ジョンは剣から手を離しさわやかな笑顔で対応する。

「おっと。ラストフさまにはもう少しご指導のほどを受け賜りたかったのですが、少々騒がしくなってしまうのでまたの機会にお願い致します。それでは」

笑顔のまま周りを見回して、最後にラストフに礼をして颯爽と去る
ジョン。

その後姿をラストフは、形容のし難い表情と真っ赤な顔、怒りに震える体で見送った。

そうして、城の門を出たあたりで、降りてきたクリスがジョンに合流する。

「口も達者になったなあ、ジョン」

「ああいつのの相手ばかりしてましたので」

ジョンはうんざりとした顔で話す。

先ほどの事は少しやりすぎかとも思っていたのだが、師匠を小汚いなどと言われて自制があまり効かなかったのだ。

「とりあえず、僕の家に行きましょう。王子になにを頼まれたか知りませんが、今日はもう動けないでしょう?」

日の沈んできた空を見てジョンが判断する。

「そうだな。まあいつになるのかよく分からないから、当分世話になるかもしれん」

「うちは大丈夫ですよ。父も兄も喜ぶでしょう。特に父は、師匠が全然会ってくれませんでしたからね。ずっと直接会いたいと言っていましたよ」

「ほのかな脳筋臭がする」

知り合いの傭兵と同種であるとクリスの第六感が警鐘を鳴らす。

「うちには修練場もありますからね。師匠に稽古をつけてもらうのなんていつ以来でしょう」

「弟子も脳筋に・・・!」

うきつきとしているジョンを見て、クリスが嘆く。

「まあ、父も無理はしなと思いますから。兄はそこまで争い事が好きな人でもないですからね」

「お兄さんも騎士だっけ?」

「ええ、兄は父のところの騎士団ですね。剣の腕は僕より数段上なのですが、とにかく優しい人です」

「なるほどね」

それ以降も、ジョンはクリスと王子の会話の内容については触れず

に、クリスもその事については言わずに他愛のない会話をジョンの実家に着くまで続けた。

「やっぱりでかいな」

「そうですか？」

ジョンの実家である屋敷の前に立ってそれを見上げる。

「だまれボンボン！」

「なんで怒りだすんですか！」

「貧乏人の僻みだ」

「師匠は貧乏といつか、お金の使い方が荒いだけのよつな気がしますけどね」

事実を弟子に指摘され、言葉に詰まるクリス。

「そうですね、フィリスもいることですし、今後は主の財布を預かるようにしましょうか」

「いつのまに出てきたフウリ！っていうか、財布とフィリスは関係なくね！」

「ほほう？主はいつまでたってもフィリスにプレゼントを買えない

ような気がします」

「はい、すみません」

自分の財布の中身と、今日の大通りのことを思いだし、クリスは即座に頭を下げる。

「ふいりす、ふれぜんといらないよ？」

フィリスがクリスを見上げ気遣うように言う。

「フィリスは気遣いもできて偉いですね。欲しい物はお母さんに言えば買ってあげますからね」

「ああああ、フウリィィィ！これ財布！俺の財布！預ける！」

フウリがフィリスの頭を撫で、クリスが悲痛な叫び声と共に懐から財布を出し片言になりながらそれを預ける。

「ふむ。本当にほとんど入ってないですね。仕方ありません、これからは計画的に買い物するんですよ」

「はい」

「師匠がまるで子供のようだ」

財布を確認するフウリに、小さくなってそれを見守るクリス、その師匠と精霊の姿がまるで母親とその子供のように見えてしまった弟子。

「まあ、とりあえず入りましょう」

ジョンが無理やりその場を纏め、屋敷へと案内する。

こうして、脳筋当主が手薬煉引いて待つ屋敷へと魔法使いは踏み入ったのだった。

第十話「魔法使いと弟子の父」

クリスたちは屋敷に入り、案内され客室に向かう。

「父はもう帰ってますか？」

「坊ちゃんたちと入れ違いでお戻りになりました」

途中でジョンが執事に話掛ける。

「それでは荷物を置いて父に所に向かおうとおもうのですが、いいですか？よろしければフウリさんとフィリスちゃんも一緒に」

ジョンが、先を歩く執事から後ろを歩くクリスたちに視線を移す。

「了解。しかしジョンの父親かあ」

「分かりました、私たちも着いて行きましょう」

クリスは弟子の父の噂を思いだす。

ギルドでもその人柄は、オーカスの騎士とは思えないほど評価されている。

オーカスの真の騎士、オーカス唯一の騎士、オーカス最強の騎士、その他にもいろいろな呼び名でギルドの冒険者から呼ばれている。冒険者を下に見る騎士から無理難題を言われる者に助け舟を出すうちにそんな呼び名がついたのだ。

また、戦場で傭兵がオーカスの中でもっとも信用する騎士として人

望を集めている。

実はギルドとの繋がりもあり、傭兵やギルド所属の冒険者を偏見なく、その実力を見抜き正当な評価を下しているのも、その評判を後押ししている。

また、騎士として優秀であり、剣の腕は年老いた今でも国一と言われるほどだ。

指揮官としても優秀で、国境での戦争に騎士団を率い何度も参戦し手柄を上げ、国内においては傭兵や軍人崩れの盗賊退治などで指揮を振るい名を上げている。

「ジョンパパか……。もういい年齢のはずなのに聞く噂は衰えを知らないんだけど、どうなってるの？」

「今でも、兄と僕、二人がかりでも父を倒せないくらいですからね」

「私が聞いた話ですと、オーカスの騎士らしからぬ実力と人望を持った人物だそうです。今でも現役で国内最強と言われております」

「脳筋チートか。帰りたくない」

実感の籠った声でクリスが本音をぼつりと漏らす。

「帰らないでくださいよ」

「だって絶対手合わせしたいと言われるじゃん、脳筋つてどいつもこいつも手加減つてものを知らないじゃん、俺の命がやばいじゃん」

「おとうさん、しんじょうの？」

「大丈夫ですよ。なんだかんだと死ねないのが我が主ですから」

フィリスの心配そうな顔を見て、フウリが笑顔で断言する。

「死ねないってなんなのおお！そんな決定事項は嫌だ！！死ぬ直前まではいくみたいじゃん！！せめて生死から離れてほしい！！」

「父はその辺は大丈夫ですよ、よく手合わせしてるけど僕生きてますから」

胸を張ってクリスを安心させようとするジョン。

「手合わせは前提なのね。なんか嫌な予感しかしない」

「ま、まあ、とりあえず挨拶だけはしないといけませんから・・・」

クリスはため息一つ吐いて、長い廊下を歩くのだった。

「シッ」

向かい合った二人のうち一人が素早い剣捌きで相手の首を狙って薙ぐ。

もう一方は、その薙ぎをぎりぎり防ぐ。

ジョンの父、マッシュは自分の剣がはじかれると、そのまま流れるように木剣を上段に持っていき振り下ろす。

クリスはひたすら防御に徹している。

先ほどから木剣同士がぶつかり合う音がタリエル―工家の修煉場に響いている。

ジョンは息をするのも忘れるほどに真剣にその試合を見ている。

クリスは魔法を使っではないものの、それ以外は全力でマッシュの相手をしている。

にも関わらず、マッシュに打ち込む隙がないのだ。

マッシュはものすごい勢いで木剣を振り下ろしているのに息を乱すことなくクリスと対峙している。

その目は明らかに手加減をしているようには見えない。

「（は、話が違う！俺の命が風前の灯だああ！手加減できるって話はどこいきやがった！今の！今の！今どう見ても俺の頭勝ち割る気満々だった！？」

クリスは心の中でひたすら呪詛を唱えるのだった。

「ふむ。君がうちの馬鹿息子の師匠か」

「はい、一応そういうことになっています。そんな立派なことを教えたくてもないのですが」

ジヨンの案内でマツシユの部屋へと案内された一行は自己紹介を終えて、今はマツシユと向かいあつて座り歓談していた。

「なんのなんの。どうしようもなかった息子が、私の課題を終えて帰ってきてみれば、一端の男の顔になつていてな、話を聞けば師匠とクリス君の話ばかりだったのだよ。なので会つてお礼をしたと思つていたのだが、こんなに遅くなつてしまい申し訳ない」

「いやいや、ジヨンの努力の賜物でしょう。俺は本当に何もしてませんから」

頭を下げるマツシユに、クリスは更に謙遜する。

クリスは目の前に座る人物が、自分より遥かに強いことを感じ取っていた。

しかも、押さえ切れない闘志が溢れているのが目に見えて分かるので、冷や汗を流してこの状況からどうやって逃げだすか頭をフル回転させて考えている。

「またまた、息子からよくクリス君の活躍を聞かされてな。それは

もう御伽噺の勇者のようじゃないか。是非とも一勝負お願いしたい」

「は、はあ。いやしかし俺なんて栄えある騎士団のそれも団長さまと手合わせするなんて、とてもとても」

『ど直球きたー！無理無理無ー理ー！助けてフウリー！』

『面白そうではないですか。最近剣の腕も鈍ってきてるのではないですか？いい機会です、稽古をつけてもらったらいかかでしょう』

『も、ってなんだよ！魔法の腕は鈍って・・・あれ最近使った覚えが』

『錬金以外を見てないですね、そっちは相変わらずの主クオリテイですが。諦めてお受けしてはいかかですか。弟子父もキラキラした目で待ってますよ』

『どう見ても、キラキラなんて可愛いもんじゃねえ！ギラギラだろおおお！獲物を狙う目だよあれは！』

二人が契約を通していちゃいちゃしてる間に話は進む。

「はっはっは、面白いことを言う。我が国の騎士団は今や張りぼてのようなもの。それはよく知ってるだろう。騎士団の実力に反比例するように、ギルドには実力のある者が集まっていると聞く。その中でも一目置かれているクリス君、君には息子云々を抜きにしても是非一度勝負したいと思っていた。なあに、既に準備もできている、さあ行くぞ」

マッシュは返答を聞かずに立ち上がる。

「父上、僕もついて行ってよろしいですか？」

「うむ。後学のためにしっかり目に焼き付けておくようにな」

「はい！」

ジヨンは期待に満ちた目をする。

「じゃ、若輩の身でありますので、お手柔らかにお願い致します・・・」

クリスはそんな二人を見てがっくりと肩を落として承るのだった。

「（くそ！隙がない上に、剣捌きが早すぎる。しかも一撃一撃が重い！ベアードのおっさんとい勝負なんじゃないか！ジヨンパパは化け物か！）」

「（若く荒削りだが、とにかく勘がいいな。的確に私の剣を捌いている。実戦慣れしているのもあるのだろう。だが・・・）」

マツシユは考えつつもスピードを落さずクリスを攻め立てる。

クリスは自分の手が痺れてきたのを感じる。

どうにか反撃の糸口を見つけたいのだが、そんなものは存在しない

かのようにマツシユの剣が迫る。

どンドン押されクリスは焦りだす。

いつもは魔剣の性能やフウリの恩恵もあって、人間相手ならば一振り二振りですべて終わることが多いのだ。

いくら剣の才能があつたとしても、それだけを武器に戦うことはなかつたクリスに、長い年月を剣と共に生きてきたマツシユの剣捌きは重すぎた。

クリスの焦りは動きからさらに余裕を無くしていき、マツシユの剣はひたすらに重くのしかかる。

やがて、クリスの焦りとマツシユの剣、その二つの攻防が頂点を迎え……

そうして次の瞬間にはクリスの体が文字通り吹っ飛んでいた。

「あ」

誰かの呟きとも取れぬ声が一瞬の静寂の中、修練場に響く。

その日、魔法使いは弟子の父に敗北したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884z/>

魔法使いと風精霊

2012年1月9日23時35分発行